ピタゴラスちゃんのジレンマ

伊吹　由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピタゴラスちゃんのジレンマ

【Ｎコード】
Ｎ１３６５Ｚ

【作者名】
伊吹　由

【あらすじ】
聖フィロソフィー学園・・・通称・テツ学。最近男女共学になったこの学園では、あらゆる生徒が哲学を中心に勉学に励んでいる。主人公のピタゴラスちゃんは、恋する乙女。勇気をふりしぼって、憧れの男子生徒にラブレターを届けようとするが・・・不可思議なミステリーに遭遇する。同じ倶楽部のデカルトちゃんやラッセルちゃんと共に、そのミステリーに挑むのだが・・・事態は思いがけない方向へと進んでいく。数学、物理、化学・・・全ての学問は哲学に通ず。実際の哲学論理的思考あり、哲学バトルあり、推理小説の

ような謎やどんでん返しあり・・・真実を証明するには?神は存在する?因果律とは?あらゆる哲学的要素を盛り込み、ピタゴラス達は困難に立ち向かう。そして彼女たちが行きついた先に見たものは・・・?

第1話　始まりはラブレター（前書き）

【哲学的な彼女】という企画に投稿を考えている作品です。この企画の要点は2つだと個人解釈。1つは「哲学に萌えを」（これ、企画側的には大事な点らしい）。そしてもう1つは哲学を知らない人が、「ふ～ん、哲学ってこんなものなんだ」と、入り口的な物が見える点。個人的には古代や近代あたりが好きですが、時空を超えてあらゆる世代の哲学者を登場させ、謎解きあり、哲学的論理解釈あり、バトルありという形で書いていきます。最後の最後には、多くの科学者が議論している1つのテーマを元に・・・推理的トリックを用意してますので、推理小説が好きな方は謎解きに挑戦してみてください。

第１話　始まりはラブレター

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜　第１話　始まりはラブレター　〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

３月１４日。

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

ピピピピピピ・・・

「は！？」

一気に目が覚めた。鳴り響く目覚まし時計を見ると・・・午前６時。

「・・・　・・・」

なんかやけに・・・リアルな夢を見ていたような・・・？

「・・・　・・・」

目覚ましを止め、夢の内容を思い出そうとするが・・・思い出せない。

「そうだ！」

この日は、私・・・ピタゴラスにとって、大切な日。

・・・　・・・。

いつもよりかなり早く起きた私は、午前7時前の誰もいない学園に登校した。

そして今・・・

ある靴箱の前に立っている。

「きょ、今日こそ・・・　このラブレターを・・・
ルブラン君に・・・」

そう。私は今日、あこがれの男子生徒にラブレターを届ける。そのため、ほぼ徹夜でラブレターを書いた。1時間しか寝てないが、眠気はない。

「・・・　・・・」

直接渡す勇気なんてない私は、定番中の定番【靴箱にラブレター作戦】を決行するというわけだ。

「・・・　・・・」

学校の靴箱は、みな扉がついている。だからラブレターを入れて、扉を閉めちゃえば・・・誰かにそれを見られる心配はない。

「・・・　・・・」

右手でギュッとラブレターを握りしめる・・・自分でどんな内容を書いたか、今は覚えてない。見返すと、届ける勇気が削(そ)がれちゃいそうで・・・

「こういうのは・・・勢いが大事よね。
見直しなんかせず、私が思ったありのままの・・・

愛の言葉で・・・」

ラブレターを握りしめたまま、しばらく靴箱の前でたたずむ私。この土壇場に来て・・・

トクン　トクン　・・・

心臓が高鳴り、行動を起こせない。

「このままじゃ・・・　誰か来ちゃう・・・」

髪につけたアクセサリーの三角定木を、左手で握りしめた。1：2：√3の方。

「・・・　・・・」

30度を握ると・・・少し落ち着きを取り戻す。

「よし！」

勇気を振り絞った私は靴箱の扉を開け、ラブレターを押し込もうと・・・

「！？」

したその時だった。靴箱の中に・・・

【ルブラン君へ】

そう書かれた手紙が1枚、入っている。

「ラ、ラブレター！？」

ハートマークのシールが貼られた、ピンクの封筒。どう見てもラブレターにしか見えないそれを見て・・・

「だ、誰が・・・？」

私は呆然とした。

（第2話へ続く）

第1話　始まりはラブレター（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

謎のラブレターを手に取った私。その内容を盗み見た・・・

そしてこのラブレターを書いたのは・・・？

次回　「第2話　数学ガール？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２話　数学ガール？（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。
３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・

その靴箱の中に、何者かのラブレターが！？

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第２話　数学ガール？

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第2話　数学ガール？

「・・・　・・・・」

靴箱の中を覗き込みながら、私は思う。

「ありえない・・・」

私は昨日・・・最後に学校を出た。警備の人が出入り口のカギを閉める直前まで、私は目の前の靴箱に三角定木をあてている。

ルブラン君がラブレターに気づいた時、最もインパクトを与えるため・・・

【靴箱とラブレターのサイズは、どんな【比】であるべきか?】

この問題を必死で考えていた。

「あの時は、上履きしかなかった・・・」

このラブレター、昨日はなかった。だとしたら今日・・・

「私より、早く来た人が・・・?」

リーン・・・　ゴーン・・・　カーン・・・　ゴーン・・・

7時ちょうどのチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「！？」

学生用入り口が開いて、誰かがが入ってきた。

「カントちゃん・・・」

【近代組】の彼女は、必ず同じ時間の7時ちょうどに登校してくる。

「ど・・・　・・・」

パニクった私。靴箱の前で、あたふたとする。とりあえずカントちゃんに見えないよう、身をかがめた。

「あら～　こんな朝早く、珍しいわね～　・・・　デカちゃん」

1つ向こうの靴箱で、カントちゃんの声が聞こえる。

「ど、どうしよ・・・」

私は思いがけず・・・

「・・・　・・・」

靴箱に入っていた、何者かのラブレターをわしづかみにした。

「・・・　・・・」

慌てて靴箱を閉めると・・・カントちゃんに見つからないよう、足早にその場を立ち去る。

「・・・　誰が・・・？」

主のわからぬラブレターを握りしめ、自分の教室【古代組】へと走って行った。

・・・　・・・・。

教室にカバンを置いたあと、トイレへ駆け込む。誰もいない個室に入ると・・・

改めて

【ルブラン君へ】

と書かれたラブレターを凝視した。

「・・・　・・・・」

裏を見ると

【ｆｒｏｍ　Π】

そう書かれている。【Π】？　何？　なんて読むの？

「・・・　・・・・」

封を開け、中身を取り出した。中にはたった１枚、真ん中２つ折りの便せんがあるだけだ。

「・・・　・・・」

人のラブレターを盗み見る事に抵抗はあるけれど・・・

「・・・　・・・」

私はそれを広げ、読み始めた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もっとあなたの・・・近傍（きんぼう）に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていけます。

メールアドレスを教えてくれたら・・・
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。
時間は5時１３分でどうでしょう?
私、１分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P．S．
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれれば、私は十分です。

～～～

「・・・　・・・」

そのラブレターを見て、呆然とする。

「なんて、センスのいい・・・」

そして・・・

「これならルブラン君を・・・落とせる」

心からそう思った。と、同時に確信する。

「手紙の主は・・・」

数学倶楽部の人間だ・・・間違いない。

恋敵（ライバル）は・・・

私の所属するクラブにいる。

（第3話へ続く）

第2話　数学ガール？（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

手紙の主は、私の所属する数学倶楽部にいる。
そう確信した私は、授業が終わった後・・・部室を探ってみた。

次回　「　第3話　数学倶楽部　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第３話　数学倶楽部（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部に違いない。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３話　数学倶楽部

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第3話　数学倶楽部

午後3時。

最後の授業終了を告げるチャイムがなった。ショートホームルームを終えた私は、すぐに部室へと向かう。

【数】
【学】
【倶】
【楽】
【部】

部室の前にある、古びた立て看板。それを横目に勢いよくドアを開け、中に入っていった。15畳はある、まぁまぁ広い部屋。

「・・・　・・・」

部員は結構いるはずだが、9割以上は幽霊部員。入り口に入ってすぐの壁には・・・数学倶楽部の部員が書いた、書き初めが貼られている。

【人間は、考える葦だっぴょん♪】

1番手前にあるのは、顧問であるパスカルちゃん先生の言葉だ。その横に、部員の言葉が続く。

【前に進んでるって？　嘘、嘘！】

【我思う、ゆえに我萌え～】

【万物の根源は・・・　水であるけー】

【ナマギーリ女神の、おかげです】

【ひとなみに、おごってよー】

正直言う。私はこの【ひとなみに・・・】の作品、大嫌いだ。

【神。お前はもう、死んでいる】

【余白が少なねーってば！！】

【いまいましいフレンチマドモアゼル！】

【みんなの幸福の総和が、大きくなりま】

用紙に入りきれてない。

【3，2，1！　ラッセル♪ラッセル♪】

【天ではない、地が回っているのだ！】

・・・　・・・

このような己の言葉を書道作品にしたものが、卒業生も含め５０枚ぐらいある。

【3＾2＋4＾2＝5＾2】

私は自分の作品を見ながら推理した。

「ラブレターの主は・・・
学園の窓から見つめていると言っていた。
ならば卒業生は、犯人じゃない・・・」

私は自分も含め、在校生の作品を眺める。

「ちょうど20枚。その中に犯人が・・・」

いつの間にか私は・・・　あのラブレターの主を【犯人】と呼んでいた。

部室の中をさぐり、何か犯人に繋がるものがないかを見て回る。でも・・・

「この部室。基本、紙と鉛筆と本しかないのよね・・・」

あとは、真ん中にテーブルが2つ。その周りに椅子が数脚あるだけ。本は結構あるけど、全て数学書。数冊の本を手に取り、パラパラとめくるが・・・

「・・・　・・・」

犯人に繋がるようなものは、見つけられない。簡素な部屋ゆえ、部屋の中の捜索はすぐに終わった。

「・・・　・・・・」

犯人の手がかりは得られず、三角定木で頭をポリポリとかく。１：１：√２の方で。

キーン　コーン　カーン・・・

校内放送だ。

【昨夜、校舎の屋上に小さな隕石が落下しました。
一部、金網に破損がありましたので、現在修復中です。
修復作業が終わるまでの間、全校生徒の屋上への立ち入りを禁じます】

キーン　コーン　カーン・・・

「・・・　・・・・」

そう言えば昨日・・・何とか流星群の隕石が屋上に落ちたって、誰か言ってたな。まぁ、私は星には興味ないけどね。

そんな事思っていたら・・・

数少ない部員が入ってきた。

（第４話へ続く）

第3話　数学倶楽部（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

部室に現れたのは、同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃん。

この日の数学倶楽部では、【集合論】を専攻しているラッセルちゃんの講義。講義の途中、４人目の人物が部室に入ってきた。

次回　「　第４話　　デカルトちゃんとラッセルちゃん　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部にいると確信し、部室を探ってみた。

でも、何も手がかりを得られず・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第4話　デカルトちゃんとラッセルちゃん

部室に入って来たのは2人。

「はわ？　Pちゃん。今日、早いですね～」

私の事を【Pちゃん】と呼ぶのは、【近代組】のデカルトちゃん。

「おろ？　ピタ子。教団の集会、今日はないの？」

そして【ピタ子】と呼ぶのは、【現代組】のラッセルちゃんだ。

・・・　・・・。

ここで簡単に・・・私から2人を紹介しておこう。まずはデカルトちゃん。【ＴＲＵＴＨ】と書かれたバッグを持ち歩き、ポニーテールを水色のリボンで止めている。そんな彼女は・・・

校内1の遅刻魔で有名。

「無理して起きたら死んじゃうもん～」

が、口癖の基本ワガママっ子だが、何故か校内にファンクラブもあるほど人気度は高い。ついでに言うと・・・非常に疑り深い子で、何か気になる事があれば

「ない・・・　絶対とは言えないから・・・
意地悪な悪霊さんに、ダマされてるから・・・はわわ・・・」

とにかく疑えるものは疑ってかかる。【これは疑えないだろう】って事に関しては【悪霊】が登場する事になるらしいけど・・・ちょっとイタイ子？　その【悪霊】の前では、全てが疑う対象となるらしい。

「疑う事は萌え～」

未だに理解出来ないが、彼女にとって【疑う】事は【萌え】に繋がるらしい。あと正直言うけど・・・

「でもね。デカちゃん・・・
　疑ってる自分、すなわち萌え～の自分だけは・・・
　絶対いるのよね～」

自分の事を【デカちゃん】というのに、ちょっとイラッとくる。とりあえずデカルトちゃんの紹介はこの辺で。ラッセルちゃんの紹介は・・・　後でね。

・・・　・・・。

「今日もデカちゃん、遅刻しちゃいました～」

「また？　デカ子、出席日数ヤバくね？」

ラッセルちゃんは、デカルトちゃんの事を【デカ子】と言う。

「・・・　・・・」

「そうなんです～。
デカちゃん、出席日数微妙なんです～。
はわわ・・・」
1つ確かな事がある。
デカルトちゃんは犯人じゃない。手紙の主は私より早く登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れている。
あれ？　でも待ってよ・・・？
「デカルトちゃんさ～。今日の朝・・・学校来てなかった？」
「はわ？　無理して起きたら死んじゃうもん～」
出た。
「今日もデカちゃん。超遅刻です～！！」
いや、そこで胸を張られても。
「でも私・・・
朝、靴箱のところでカントちゃんが言ってたの、聞いたわ・・・
【こんな朝早く、珍しいわね。デカちゃん】って・・・」
確か・・・そう言ってたわよね？

「デカちゃん、今日起きたの・・・12時ちょうどです～。
学校来たのは、お昼の2時ですから～」

今、3時過ぎだけど・・・　何しに学校来たんだ、この子？

「あのさ・・・　僕の推理が正しければ・・・」

ラッセルちゃんは、自分自身の事を【僕】と言う。

「多分、僕と同じクラスのハイデガーちゃんの事だと思うよ。
彼女、【デガちゃん】って呼ばれてるし」

なるほど。

「そうか～・・・　私の聞き間違えね。
デカちゃんじゃなくて、デガちゃんだったのね・・・」

まぁおかげで・・・

朝が苦手なデカルトちゃんは、真っ先に犯人候補から除外された。

一方、ラッセルちゃんは・・・

「さぁ、今日は昨日の続き・・・僕が集合論の基礎、教えるからね～」

あの手紙の主の可能性はあるのだろうか？

・・・　・・・。

では、ここでラッセルちゃんの紹介。

何を隠そう、数学倶楽部の部長。ミニスカ＋ヘソ出しルック・・・ちょっと時代遅れな感はあるが、ツインテールの元気な女の子。かの天才アインシュタインちゃんとも仲が良く、校内でも随一と言われるほど豊富な知識を持っている。

部長は集合論を研究してるらしく・・・ここ最近の数学倶楽部では、毎日部員相手に集合の話をしてくれている。もっともそれを聞くのは、私とデカルトちゃんの2人だけ。あとは幽霊部員だし。

いっけんしっかりものの部長だが・・・まぁ、その本性は次のエピソードで解る事になるでしょう。

・・・　・・・。

「はわわ～　昨日の【空集合】は難しかったです～」

「集合論はロジックとも密接につながってるんだから。
デカ子、論理的に【神の存在】を証明したいんでしょ？

じゃ～、ちゃんと学ばなきゃダメよね～」

集合論を学ぶ事は、哲学を学ぶ上でとても大事だと部長は言う。私達にゲーデルちゃんの【不完全性定理】まで教えると言っているんだけど・・・正直難しいのよね、集合論。でもこれらを学ぶ事は、哲学的にも大きな意義があるんだって。

私は哲学者として成長したいから・・・難しくても頑張って勉強す

る！

ちなみにこの【集合論】は数学の世界でも割と新しい研究分野らしく、聖フィロソフィー学園の中でも【現代組】の子達しか学んでいない。

果たして【古代組】の私と、【近代組】のデカルトちゃんに理解出来るのかしら？

昨日の部長の講義で、【部分集合】と【空集合】について学んだ私達。

「昨日習った・・・

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】。

私も、そこがよくわからなかったわ」

空集合というのは、中身が空っぽの集合の事なんだけど・・・そんな集合考えて、意味あるのかしら？

まず【ｘが集合Ａに属する　→　ｘは集合Ｂに属する】が成り立つとき、ＡはＢの部分集合という。

例えば、

Ａ＝｛1，2，3，6｝

Ｂ＝｛1，2，3，4，6，12｝

という2つの集合の場合、ｘがＡに属している（この場合、ｘは1，2，3，6のどれかになる）ならば、そのｘはＢに属している。だから、ＡはＢの部分集合なのだ。

「それはわかるんだけど・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】と部長は言う。

「だったら・・・

【ｘが空集合に属するならば、ｘは全ての集合にも属する】・・・

それが成り立つって事よね？」

「そだよ」

即答する部長。

「でも、空集合って・・・中身空っぽなんだからさ・・・

ｘが空集合に属するって・・・　おかしくない？」

「デカちゃんも、そこ・・・よく、わからなかったです～」

「ＯＫ。じゃぁ、今日は集合とからめて、論理の基礎を教えよう～」

私達はテーブルの周りに座った。

「まずは・・・

【デカ子がテストで１００点とったならば、僕がケーキおごる】

って、命題あったとするわよ？」

命題というのは【正しい】か【正しくない】かが、ハッキリとしている文章や数式の事。

あらゆる真理探求命題の真偽を議論するのも哲学の１つ。例えば命題【神はいる】とかね。

あ！　勘違いしないでよ。命題【神はいる】ってのは【神がいる】事を、必ずしも言ってるわけじゃないの。命題ってのは【正しくない】とハッキリわかってる事に対しても言うんだ。だから【２＋３＝１００】のように、完璧間違っている事も立派な命題なのだ。

一応私達の認識では【神はいる】か【神はいない】かの２択でしょ？なので神がいても、いなくても・・・【神はいる】は命題の１つなの。

【デカ子がテストで１００点とったならば、僕がケーキおごる】

部長は紙にその命題を書き、テーブルの真ん中に置く。

「デカちゃん、ケーキ、大好きです～」

「いや、例えだから・・・で？　部長、続きを」

「ケース１。
デカ子が１００点とった。そして僕がケーキおごった。

この時この命題は・・・正しい？　正しくない？」

「それは正しいです～　１００点とったんだから～
デカちゃんがケーキごちそうになるのは、当然です～」

「ま・・・　疑う余地はない。正しい」

「正解。じゃぁ、ケース２。
デカ子が１００点とったのに・・・僕がケーキをおごらなかった。

この場合、この命題は正しい？」

「それは間違ってます～」

「うん。１００点とったらケーキおごるんだから・・・
１００点とったのに、おごらないのはおかしい！！

だからこの時、命題は・・・正しくない！！」

「ＯＫ！　ではケース３。
デカ子が１００点とらなかったので・・・僕はケーキをおごらなかった。

この時、命題は正しい？」

「正しいです～」

「うん、私も正しいと思う。
１００点取れてないから・・・ケーキもらえないのは当然」

「よし！　今のトコ、全て正解・・・ではラスト！　ケース４！

デカ子が１００点とれなかったのに・・・　僕はケーキをおごった。

この時、命題は正しい？　正しくない？」

「これは・・・正しくないです～」

「私も正しくないと思う」

ガラリ！！

その時・・・部室に入ってくる人物がいた。見覚えのない顔・・・誰？

「ラ・・・ラマヌジャンちゃん！？」

部長が裏返った声をあげる。ラマヌジャンちゃん？

「あら・・・ラッセルちゃん」

名前、聞いたことある。確か部長と同じ、【現代組】の子だ。肩まで伸びた真っ黒な黒髪と、大きなクリッとした黒い目。見た目からして、インド出身だろう。何となく、神秘的な魅力がある。

「な・・・　何故、ここへ？」

そして数学倶楽部の・・・幽霊部員の１人でもある。

「ただ・・・　私の本を取りに来ただけ・・・」

【デカ子がテストで１００点とったならば、僕がケーキおごる】

「・・・　・・・・」

ラマヌジャンちゃんが、部長の書いた命題をじっと見つめた。

「あ、デカルトちゃんが１００点取らなかった時にね・・・
部長がケーキをおごったら・・・この命題は正しいかって話をしてたの。

私とデカルトちゃんは、正しくないって思うんだけど・・・」

「絶対正しくないです～」

命題は正しくないという私とデカルトちゃんに対し・・・ラマヌジャンちゃんは、首を横に振ってこう告げた。

「それ・・・　正しいわよ・・・」

「え？　嘘・・・」

「はわ？」

思わず声をあげる私達。

「何で・・・？　１００点取ったらケーキおごってもらえるなら・・・

１００点取らなかったら、おごってもらえないでしょ？

なんでこの命題が・・・その時、正しいって言えるの？」

「わかるの。ナマギーリ女神のおかげで・・・」

「え？」

「はわ？」

そう言うとラマヌジャンちゃんは、ニッコリと優しい笑顔を見せる。

いや・・・笑顔はステキだけど・・・　な、何？ナマギーリが何とかって？

部屋の奥の方へ行ったラマヌジャンちゃんは、数冊の本を手に取ると・・・

「それじゃ・・・私はこれで・・・」

そのまま笑顔で、部室を出て行った。

「・・・・　・・・・」

「はわわ～　・・・・」

彼女が出て行く姿を呆然と見つめていた私達。

「なんだか・・・　不思議な子ね・・・」

閉じた扉を見ながら、私は呟いた。

「まぁ・・・　天才と何とかは、紙一重らしいからね。
僕にもあの子は・・・イマイチわかんないだよね～」

そう言えば、ラマヌジャンちゃんは・・・かなりの天才肌だって聞いた事ある。

「はわわ～　でも、ホントにラマヌジャンちゃんの言う通り～
デカちゃん１００点とらなかったのに、ケーキをおごってもらうって・・・

この命題が正しい事になるんですか～？」

「私も・・・信じられない・・・」

半信半疑の私達に、部長はきっぱりと言う。

「うん。正しい」

え！？　ホントに！？

「論理の世界では正しいんだ。こう考えるといい。
例えばデカ子が９９点取った。そこで僕はこう言う。

【１００点じゃないが、よく頑張った！　だからケーキをおごろう！】

どう？　そういう成り行き、割と自然じゃない？」

「自然です～　ケーキ、欲しいです～」

「う～ん・・・　それは自然に思えるけど・・・」

「いい？
【デカ子がテストで１００点とったならば・・・】という命題。
これは１００点をとった時の事を言ってるだけで・・・」
「うん・・・」
「１００点を取れなかった時の事は一切言ってない。
デカ子が１００点取れなかった時・・・
僕がケーキおごっても、この命題を否定してる事にはならないの」
「なるほどです～　デカちゃん、わかったです～」
「・・・　・・・」
デカルトちゃんは納得してるようだけど・・・私は・・・
「結論。【ｐならばｑ】という命題を考える場合・・・
前提ｐが正しくないとき、ｑが正しくても正しくなくても・・・・・
命題【ｐならばｑ】は、正しい事になるのよ！」

ｐ	ｑ	ｐ↓ｑ
Ｔ	Ｔ	Ｔ
Ｔ	Ｆ	Ｆ

Ｆ―Ｔ―　Ｔ
Ｆ―Ｆ―　Ｔ

部長はこんな表を書いた。

「これ、真理値表って言うんだ。
Ｔは【ＴＲＵＴＨ】で、【真】って意味ね」

「デカちゃんのバッグにも、【ＴＲＵＴＨ】って書かれています～」

「そうそう。まさにそれ！　【真実】とか【正しい】って意味。
Ｆは【ＦＡＬＳＥ】。もちろん【偽】【正しくない】って意味ね」

「う～ん・・・」

しかめっ面の私。

「はわわ～。確かに【ｐ】が【偽】の時、【ｐ↓ｑ】は２つとも【真】です～」

「だから
【ｘが空集合に属するならば、ｘはどの集合にも属する】ってのはさ・・・

前提の【ｘが空集合に属する】がすでに間違ってるから・・・
この命題自体は正しい事になる！」

「むむむ・・・」

まだ微妙な理解の私。

「ゆえに【空集合は全ての集合の部分集合である】ってわけ！ん～。　Q．E．D．ね」

「デカちゃん、わかったです～」

「う、う～ん・・・」

論理は難しい。

こうして・・・

この日の部長による【集合論講義】は終わった。何となく解ったような、解らなかったような・・・

「ピタ子さぁ、今日もブラジャーつけてるよね？」

講義を終えた部長が、私に声をかけてきた。

「え？」

さっきも言ったけど、私の事を【ピタ子】と呼ぶんだけど・・・

「デカ子のブラジャーは認めるけどさ～」

デカルトちゃんは【デカ子】と呼ぶわけで。

「・・・　・・・」

つい、自分の胸を覗き込んだ私。明らかに・・・

胸の大きさで【デカ子】【ピタ子】と呼んでいる。失礼な！

ここだけの話、ラッセルちゃんの胸は・・・

ペッタンコだ。

「僕、思うんだけどさ。ピタ子に・・・ブラ、必要ないよ？」

胸がつるぺたで、自分を【僕】と称するので・・・時々、男の子に間違えられる部長。本人は男の子と間違えられる事をすごく嫌うので、そこをイジったりはしないんだけど・・・

「あのね、部長。前も言ったけど・・・
私・・・こう見えても、Ｂはあるんだから・・・」

思わずそう言ってしまった私。だってラッセルちゃんよりは胸あるのよ！これは真実！！

「こう見えても？　見えてないけど？」

出た。この言い方は彼女の作戦の１つ。

「ぐ・・・　だ、だからそれは・・・　例えであって・・・」

わかってはいるんだけど・・・

「ピタ子、【見えても】と仮定しているのに・・・
見せないって事？」

いつも、ラッセルちゃんの術中にハマってしまう私。

「そ・・・それは・・・　そうよ・・・」

「見せないんならさ・・・
【こう見えても、私はHカップ】とでも言えるじゃん！」

なんていうか・・・　人の揚げ足をとるのが絶妙なよ、部長は。

「そ・・・　そりゃ、そうだけど・・・」

「つまり本当はAでも、Hだと言う事が出来る・・・
見せないこと前提なら・・・何でもありじゃん！」

「う・・・」

言い返せない私。後で知る事になるんだけど・・・これは昔の哲学者の常套手段、【詭弁（きべん）】というものらしい。

「結局はさ。ブラを脱ごうとしないってわけよね？」

「う・・・」

始まった。

ラッセルちゃんは・・・1年前、通称【ブラパラ事件】を起こした張本人。いわゆる【ブラジャー・パラドックス事件】。この事件は、彼女の集合論的パラドックスの追求による結果起きたらしいんだけど・・・

説明すると話が長くなるので、この事件の詳細は【番外編？】に預ける。

「きょ、今日はスポーツブラだから・・・」

「え～・・・　ハズし甲斐(がい)ない～。なっせる～」

なっせる？

明らかにテンション下がった部長はちょっと落ち込んだ後、私を見た。いや・・・私の胸を見た。

「じゃぁ、スポブラの先に豆つけたら？
おっぱい、大きく見えてセクシーになるよ！」

私が豆、大嫌いなのを知ってて言ってる。ここでカッとなったら、またさっきの繰り返しだ。

「豆つけたら・・・ラッセル、ラッセル～♪」

とにかく彼女は下ネタが大好き。あと、オヤジギャグも。てか、中身はただの【エロセクハラ中年オヤジ】だと断言していい。

数学や哲学やってる時は超真面目なんだけどな～。

「・・・　・・・」

私は思う。このエロオヤジが、あんなセンスのいいラブレターを書いたなんて・・・まず、ありえない。そうとなれば・・・

「ねぇ。あなた達・・・」

私はテーブルの上に・・・

「ちょっとコレ・・・見てくれる？」

あのラブレターを置いた。ひと癖もふた癖もある連中だが・・・

「はわ？」

「何？」

この数学倶楽部で、数少ない毎日顔を見せる部員。

「コレ、誰が書いたか・・・わかるかな？」

そして、頭はキレる子達だ。

「はわ？　ラブレター？　いやいや・・・
これがラブレターとは・・・簡単には信じないです～
何かの罰ゲームの可能性もあります～・・・」

私は中から便せんを取り出し・・・それも広げて見せた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もっとあなたの・・・近傍（きんぼう）に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていけます。

メールアドレスを教えてくれたら・・・
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P．S．
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれれば、私は十分です。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「有界名閉集合にして、この文章センス・・・」

「部長、何言ってんの？」

「コンパクトなのにセンスがいいって言ってんの！
まぁ、僕ほどじゃないけどね」

「・・・　・・・」

部長のギャグには、センスのかけらもない。

「玄関の前で、コレ落ちてるの見つけてさ・・・」

私は嘘をつく。愛のためなら、嘘だって平気。

「落とし主に、返してあげたいんだけど・・・」

これも嘘。私以外に誰がルブラン君を狙ってるから知りたいだけ。

「だからコレ・・・誰が書いたと思う？」

こうして・・・数学倶楽部に所属する私・ピタゴラスと・・・

「デカちゃん的には～　まずは部員、全員を疑ってみる！
手紙の主は・・・

あなたよ！Pちゃん！」

朝が弱く、疑り深いデカルトちゃん。そして・・・

「僕が犯人？　ち！　バレちゃ～しょうがない・・・
どうせ有罪は確定だ。それならば・・・

お前のブラを頂く！」

私のド下手な物真似をする部長。すなわちエロオヤジのラッセルちゃんの３人で・・・

「おら！　デカ子！　僕にお豆を見せなさい～」

「はわわ～（笑）」

このラブレターの主を探し出し・・・

「あまいわ！　ラッセルちゃん！
デカちゃんが、女の子と信じているようだけど・・・

果たして真実かしら!?」

そしてその子が【犯人】である事を証明するため・・・

「そんなの・・・ブラを頂けば、解ること！」

「それはどうかしら!?　仮におっぱいがあったとしても・・・
意地悪な亡霊さんに、ダマされてないかしら!?」

動き始めた・・・

のか?

（第５話へ続く）

第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

１年前に起こった、【ブラジャー・パラドックス事件】。

これはラッセルちゃんの、集合論的パラドックスを追求する事がきっかけで起こった。最初の犠牲者はカントールちゃん。

そして・・・

次回　「　番外編？　ブラジャー・パラドックス事件　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この２人と共に、真犯人を探し出そうとする。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件

今から約1年前・・・

その事件は起こった。

【現代組】所属のラッセルちゃん。昔から自分より胸が大きい子を見ると、ブラジャーをハズしたくなる衝動に駆られる子だった（これは本人も認めている）。

ある日彼女は

【自ら（みずか）ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

の存在について考えてみたらしい。そして、本人曰く

「僕も【自らブラを脱ごうとしない子の集合】に属している」

との事。そうすると、どういう事が起こるか？

「僕はブラを脱ごうとしない女の子から、強引にブラをはぎ取るから・・・

自らブラを脱ごうとしない僕自身の、ブラもはぎ取らなければいけない。

でも、そうすると・・・自らブラを脱いでいる事になってしまい・・・

まさにパラドキシカル！！」

自己存在のパラドックスに直面した彼女は興奮し、あろうことか・・・

【自ら(みずか)ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

を【実践】する事を決意。本人曰く、それも立派な哲学的実践だと・・・？

とはいえ、そのためにやるべき事といえば・・・

明(あきら)かだ。

最初の犠牲者は、同じクラスのカントールちゃんだった。ラッセルちゃんは彼女に・・・

「ねぇ、ブラとって」

と言った。

「は？　何言ってんの？　嫌に決まってるじゃん！」

というカントールちゃんの返しに対し・・・

「ふ・・・　自らブラを脱ごうとしないわけね・・・」

ニヤリと笑ったラッセルちゃん。カントールちゃんの背中に忍び寄り・・・

「3！」

彼女のブラホックを、一瞬でハズしたかと思うと・・・

「2！」

まるでマジックのように、ブラジャーをはぎ取った。

「1！」

目撃者の証言によると、ラッセルちゃんは奪い取ったブラを高々と持ち上げ・・・

「ラッセル、ラッセル～♪」

と、勝利の雄叫びをあげていたそうだ。

「これで私は、パラドキシカル！　ラッセル、ラッセル～♪」

ついでに彼女は・・・どんなブラも、3ステップでハズせると豪語している。そんなスキル、人生で有用か？

こうして・・・

彼女自身、パラドキシカルな存在になりたいがため・・・

クラス中の女の子を巻き込んだ【ブラジャー・パラドックス事件】、通称【ブラパラ事件】が勃発。

この事態を収拾しようと動いたのが、同じクラスの学級委員長・ヒルベルトちゃん。

「は？　ブラはずせ？　あなた、気は確か？
そんなクラスの秩序を乱す生徒の言う事が聞けるとでも？」

矛盾のない完全なクラス体系（システム）作りを目指していた彼女も・・・

「自らブラをハズす気・・・無いわけね・・・」

「当たり前でしょ！　完全な・・・」

「3！　2！　1！」

言わずもがな。2人目の犠牲者となった。

「ラッセル♪　ラッセル～♪」

そしてクラスの女子達は、次次とラッセルちゃんの毒牙にかかる。

「ブラとって！」

の要求に対し

「いや！」

と言う女子のブラをはぎとっては

「ラッセル♪　ラッセル～♪」

勝利宣言と同時に、ブラを高々と持ち上げる。パラドックス以前に、
もはやただの変態だ。

「ブラとって！」

このラッセルちゃんの理不尽な要求に・・・

「いいわよ」

唯一「Ｙｅｓ」と言ったのが、ラマヌジャンちゃん。彼女・・・論理は通じないが、超のつく天才肌で、あらゆる公式を見つけるのが得意な子らしい（ラッセルちゃん情報）。

「じゃぁ、取るね」

というラマヌジャンちゃんに対し

「あ！　待って！　いい！　あんたじゃ、パラドキシカルに反する！！」

初めてうろたえたラッセルちゃん。矛盾に反するというのも、変な話だけど？

こうして・・・

ラマヌジャンちゃんを除く【現代組】の女子全て・・・ラッセルちゃんの犠牲になった。

「ラッセル　ラッセル～♪」

やがて【現代組】の女の子達だけでは飽きたらず・・・他のクラスの女の子を標的にし始める。

【古代組】に侵入したこのテロリスト・・・いや、エロリストは・・・

私と相対(あいたい)した。

「・・・　・・・」

ラッセルちゃんは私の胸をじっと見つめた後、こう言った。

「ブラ、必要？」

これがラッセルちゃんにかけられた、最初の言葉。

「は！？　Ｃあるから！！」

そしてこれが私からラッセルちゃんにかけた、最初の言葉。

「Ｃ？」

「あ・・・　ホントは、Ｂ・・・　プラス・・・
Ｂプラスよ！　四捨五入してＣよ！！」

「Ｂプラス？　それ以前にさ・・・　おっぱいに、四捨五入ってあるの？
言うなれば、四捨五乳ってか？　ラッセル、ラッセル～♪」

（「な、何よ・・・　この子？　人のおっぱいをネタにして・・・」）

ラッセルちゃんの目がキラリンと光ったかと思うと・・・

「ぶっちゃけ言うけどさ・・・　Aでしょ？」

自信満々でそう言ってきた。

「は！？　Bあるし！！」

「じゃぁ、ブラとってよ・・・」

「はぁ！？　頭おかしいんじゃないの？
なんで、ブラとる必要があるわけ？」

「ふむ・・・じゃぁ、あなた・・・」

この当時はお互い名前も知らない。

「自ら、ブラを取ろうとしないわけね？」

「あ・・・当たり前でしょ！？
あんただって、ブラ取りなさいって言われたら・・・

取らないでしょ！？」

「うん♪」

あの時の嬉しそうなラッセルちゃんの顔は・・・忘れたくても忘れられない。嫌な意味でね。

「3・・・」

「？」

ラッセルちゃんは、突如・・・

「２・・・」

カウントダウンを始めたかと思うと、私の背後に忍び寄り・・・

「１！　ラッセル♪　ラッセル～♪」

瞬殺でブラホックをはずし、ブラジャーをはぎ取った。

「き・・・　きゃ～！！」

この後、どうなったかって？

私の口から言いたくないし、言えるわけがない。それは読者の想像に任せる事にしておく。

・・・　・・・。

事件から数日後。私は数学倶楽部に入部するため、部室を訪れた。

そこでラッセルちゃんと再会する。

「お？　古代組の・・・　えっと・・・」

彼女は私の胸を見て、何かを思い出した。

「そうだ！　ピタ子！　【古代組】のピタ子だ！！
正真正銘のピタ子だ！」

いや・・・　そんなピタ子ピタ子、言わなくても・・・

「・・・　・・・・」

あんただって、胸ピッタコンじゃん。私は失礼かなと思って、触れないでいるのに。

「すでに証明済みだもんね～。ラッセル♪　ラッセル～♪」

このセリフから、ブラをハズされた後の事を・・・少し想像できるだろう。

前述したけど、ラッセルちゃんはつるぺたぴったんこ・・・学校１の貧乳だ。

【自分より胸が大きい子のブラをハズす】Ⅱ【学校１の貧乳】＝【無差別エロ】

※　【Ⅱ】は、【かつ】と読む。

この命題における等式は、【現代組】で【ラッセルの法則】とよばれている。【ド・モルガンの法則】よりも明かで、本人以外周知の公式なんだって。まぁ、集合論は【現代組】しか習っていないから、

私にはあまりわからないけど。

そんなつるぺたぴったんこののラッセルちゃんに・・・

「ラッセルちゃんこそ、間違いなくブラいらないから」

なんて言おうものなら・・・

「あなたこそ、ブラ、必要なの？」

となり、あの事件の繰り返しになってしまう。そんなラッセルちゃんが・・・

数学倶楽部の部長だったのには驚いた。

「僕、集合好きだから」

意味不明な動機で、自ら部長に立候補したらしい。基本、数学倶楽部の人間は・・・自分にしか興味がない。倶楽部会議で集合に興味あるという彼女以外、立候補する人も推薦される人もいなかったらしい。

「じゃ。僕、部長ね♪　ラッセル、ラッセル～♪」

こうして我が聖フィロソフィー学園、数学倶楽部の部長に・・・

「集合に必要なのは・・・エレメント！

ん～、何かエロい【ひ】【び】【き】！」

エロオヤジが就任したというわけだ。

人のブラをハズすのが趣味・・・そんな子が上の立場に立つなんて、どんな混乱を招くだろう。

そう思っていた私だが・・・

現代組のラッセルちゃん。彼女こそ部長にふさわしい・・・

だんだんそう思うようになってくるから不思議。それはこの小説を読んでもらえれば・・・みんなわかってくれるだろう。

そしてもう1つ。

後に私は・・・

このラッセルちゃんの【驚くべき事実】を知る事になる。

（第5話へ続く）

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

私達３人は、【ｆｒｏｍ　Π】を見つめながら議論する。

この記号、部長は円周率だというんだけど・・・？

まさか・・・？

次回　「第５話　パイからの手紙」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第5話　パイからの手紙（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この2人と共に、真犯人を探し出そうとする。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第5話　パイからの手紙

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第5話　パイからの手紙

「やっぱり・・・　まず、コレからよね」

ラブレターを裏返す私。

【ｆｒｏｍ　Π】

「これ・・・フロム何？　何かの記号？」

私の質問に、２人は即答してくれた。

「はい！　デカちゃん、わかります～！
これは円周率のパイです～！」

「そうそう。おっぱいの【Π】（パイ）ね」

とりあえず部長は無視したいが・・・

「パイ？　パイって、【π】じゃなかったっけ？」

「それ小文字よ。大文字で【Π】って書くの。
ピタ子・・・ホント、無理数とか苦手よね～」

現代組の部長の知識は、犯人捜索に欠かせない。

「仕方ないでしょ！　【古代組】では無理数、教わらないんだから！」

「そういえばピタ子。無理数の質問しにきた、教団の弟子・・・
半殺しにしたってホント？　すっごい噂になってたよ？」

「あ！　その話！　デカちゃんのクラスでも話題なってました～」

「・・・　・・・」

「いくら自分が無理数わからないからってさ。
弟子を半殺しにするってのは・・・僕はどうかと・・・」

「あ、あれは私じゃない！　私のとりまきが勝手に・・・
【禁忌（タブー）に触れし者、制裁あれ】とか言ってさ・・・

その子を校庭裏の川に投げ込んだのよ。
私は一切、関与してないから！」

ここで【ピタゴラス教団】について説明しておこう。いわゆる私のファンクラブで、何故か私は【教祖様】と呼ばれている。そしてファン連中は自らを【弟子】と称し、ぶっちゃけストーカー並に盲信というか、妄信するコアな連中が多い。

デカルトちゃんのファンクラブとは違い・・・私の教団は一歩間違えれば、犯罪者になりそうな子ばかり。【万物は数なり】【ピタゴラスの定理】【豆禁】が教団の３大キャッチコピーになっているらしい（私は関知していない）。

弟子になって日の浅い子は・・・熱心なのはいいけど、私が苦手な無理数に関する質問をする時がある。そんな時、これまた熱心な先輩弟子が・・・質問した子を校庭裏の川に投げ込むのが慣例だ。

先にも言ったが、私は豆が大嫌い。死ぬほど嫌い。死ねばいいのに。

そんな私に、新人弟子が【納豆】を差し入れた事があった。

「僕が聞いた話じゃ、納豆差し入れた子をさ・・・
半殺しどころか、全殺しにしたって聞いたわよ」

「・・・　・・・」

ノーコメント。

「豆、体にもよくて美味しいのに～。
デカちゃん、豆、大好きだけどな～」

「僕もお豆、大好き～」

部長が言うと、エロにしか聞こえない。

【ｆｒｏｍ　Ⅱ】

「話(はなし)を戻しましょう。じゃぁ、これは・・・パイからの手紙？」

「ん～・・・　僕には、インターセクションに見えるな」

「インターセクション？」

「そ。２つの集合の共通部分。交わりって事。
僕、一昨日教えたじゃん。

ホントは【Ｕ】をひっくり返した感じなんだけど・・・」

う〜ん。【∪】を逆さまにして【∩】か。まぁ、見えなくはない。

「デカちゃん。共通部分の事、忘れたです〜」

「教えたばかりなのに・・・　デカ子、もう忘れた?」

ここ最近、部長が講義してくれている【集合論】。一昨日は【共通部分】と【和集合】の話も出た。

例えば、

A＝｛2，3，5，7｝
B＝｛1，3，5，7，9｝

という2つの集合があった場合、どちらの集合にも属する要素の集合を、AとBの【共通部分(インターセクション)】といい、A∩Bで表す。

A∩B＝｛3，5，7｝

ってわけ。ちなみにどちらかに属している要素を集めた集合は【和(ユニオン)集合】といい、A∪Bで表す。

A∪B＝｛1，2，3，5，7，9｝

というわけだ。部長曰く、集合論で【共通部分】【和集合】は基本中の基本との事。

「インターセクションか・・・
ルブラン君と、交わりたいって意味じゃね?」

部長のエロトークはおいといて・・・

「顧問に聞いてみようかな？」

顧問なら部員のことをよくわかるはず。このラブレター見せたら、一発で手紙の主を特定しくれるはず。我ながらいいアイディア。早速・・・

「デカちゃん、思うんですけど～
顧問に頼るのは～　多分ダメです～」

ところがデカルトちゃん、私の意見にダメだしする。

「顧問のパスカルちゃんは～
学校終わったらすぐパチンコ屋行くです～」

パチンコ屋？

「そういえば僕、日曜日にパスカルちゃん見たよ。
赤鉛筆耳にかけて、競馬新聞を凝視してた」

競馬？

「その新聞の裏側にさ・・・裸の女の人も載ってて興奮したわ～
ラッセル～　ラッセル～♪」

「デカちゃんの担任ですけど～・・・」

そう。数学倶楽部顧問のパスカルちゃんは、【近代組】の担任でも

ある。

「放課後～　担任、見かけた事無いです～」

「でも授業だけは上手よね、あの先生。
僕、確率論の授業受けた時さ・・・

わかりやすくて、けっこう感動したわ」

「えぇ？　デカちゃん、しょっちゅう怒られるです～。
【お前、空しいよな】【お前の哲学、浅いんだよ】って～・・・」

「【古代組】の授業では、なんか変な事言ってたな～。
【結婚＝殺人】が成り立つとか・・・」

「あー！　それ、言ってた！　僕も聞いた！」

井戸端会議になりかけたが、話を総合すると・・・どうやらは顧問はギャンブル好きらしく、授業が終わるとすぐにパチンコ屋か競馬場に出向くらしい。

「ふむ。パスカルちゃんに頼る作戦は・・・　無しね」

「無しです～！」

「ナッセル！」

なっせる？　こうして顧問経由の犯人捜索は、全会一致で否決された。

「どうやって手紙の主を見つければ・・・
他に何か手がかりないかしら・・・？」

部長が手を挙げた。

「容疑者の人数は、有限なんだからさ～。
しらみつぶしに、部員全員あたればいいんじゃない？

【あなた、ラブレター落としませんでした？】ってさ」

自信満々で言いあげたものの・・・

「でもほとんどの部員・・・学校終わったら、散らばるのよね～」

部室に顔出すのは、私達３人ぐらい。他の部員は、基本幽霊。たまに顔見せても、すぐどっか行っちゃう。

「う～ん、確かに。僕達は、毎日ここ来るけど・・・
帰宅部員を始め、他の部員がどこにいるか把握できないな～」

かといって、休み時間に各クラス回るのも・・・

「【古代組】【中世組】【近代組】【現代組】【東洋組】の５クラス。
部員は、全てのクラスに散らばってるし。
１つ１つ回るのも、けっこうめんどくさいわよ？」

「デカちゃん、めんどくさいの嫌いです～」

「あ、僕もめんどくさいのダメ。はい、ナッセル！」

なっせる？

「は～い！」

今度はデカルトちゃんが手を挙げる。

「はい、どうぞ」

あまり期待せずに、彼女に発言権を与えた。

「５時過ぎにポール公園行けばいいと思います～」

「あ・・・」

「あ・・・」

部長と同時に声を上げる私。何故、気づかなかったんだろう？

時計を見ると午後４時過ぎ。学校から公園までは、１０分もあれば行ける距離だ。

「デカルトちゃん・・・　あなたの言う通りだわ。

手紙の主は・・・

ポール公園、トイレ近くのベンチに座っているはず・・・」

「デカ子！　冴えてるじゃん！

ご褒美に・・・ラッセル、ラッセル♪」

「きゃ～！！」

また始まった・・・。

私は2人を部室に残し、部屋を出ようとする。

プチン♪

「　！？　」

瞬間、ブラホックがハズれる感覚を味わった。

「ふふ・・・スポーツブラなんて嘘ね。僕にはお見通しさ！」

酔っぱらって気分が高揚すると、キスをしたくなるオヤジがいると聞くが・・・

「【ブラを脱ごうとしない子のブラを、強引にはぎ取る女の子】
この命題のパラドックスに・・・　いざ、挑まん！」

部長は気分が高まると、人様のブラをハズしたくなる・・・結局エロセクハラオヤジってわけだ。

「ラッセル♪　ラッセル～♪」

「ちょ・・・　」

この変態のせいで・・・　無駄な時間を過ごしたのは言うまでもない。

（第６話へ続く）

第5話　パイからの手紙（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

部室を出た私。思いがけず何者かとぶつかった。

目の前にいたのは・・・部長と同じ【現代組】のソーカルちゃん。

不思議な服装の彼女は、突然意味不明な事を言ってきた。

次回　「　第６話　　ソーカルちゃんと理事長　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第６話　ソーカルちゃんと理事長（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。

同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この２人と共に、真犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第６話　ソーカルちゃんと理事長

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第6話　ソーカルちゃんと理事長

バタン！！

「あ・・・」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかり・・・

ドスン

その場で倒れてしまった。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を見ると、ぶつかった相手も尻餅をついている。

「2分の1mvの2乗が、帰納的に分子間力によって引き裂かれ・・・」

「？」

その子の洋服には、色々な数式や化学記号がプリントされていた。

「ご、ごめんなさい・・・」

前を見ず部室を出た私・・・明らかに私の不注意でぶつかったので、素直に謝るが・・・

「ユークリッド空間なら・・・カノンコードで調和がとれるけど・・・
もし、遠近法によるミスディレクションの世界なら・・・？」

その子は、ニヤニヤしながら私に語りかける。

「は？」

首をかしげる私。

「オールトの雲の中で見たわ。
垂直落下式・・・　クローズドインターバルによるタイムトラベルを・・・」

「ちょ、ちょ・・・　あなた、大丈夫？」

絶対、この子・・・

「エントロピーが増大すると、ジュール熱によるガンマ線の波長が・・・」

打ち所が悪かったんだ。

「おろ？　ソーカルちゃん・・・」

私に続いて、部室を出てきた部長。私がぶつかった相手に、手を差し出した。

「・・・　・・・」

その子は部長の手を握り、ゆっくりと立ち上がる。

「1／f揺らぎってあるでしょ？
　ベジタリアンの世界じゃ、ヴァンデグラフにG難度なの」

立ち上がると、ニヤニヤの視線をラッセルちゃんに向け・・・さらに語り始めた。

「ロンゴロンゴ文字で、コックリさんやるとさ・・・
　4コマ滑りのディアミドフから逆転してヒーリーを得られるから！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

ラッセルちゃんは、その子の背中を押し・・・

「相対性理論も、アウトオブプレイスアーティファクツも・・・
　フラクタル音階で、現在完了なの」

「ほら。【物理倶楽部】は、隣・・・」

隣の部屋へ押し込む。

「私！！　あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」

押し込まれたその子は、私を指さしてそう言った。直後・・・

「じゃ、また明日ね。ソーカルちゃん」

バタン！

部長が物理倶楽部の扉を閉める。

「ふ～・・・」

やれやれという表情を浮かべる部長。幸いにも、その子が再び私達の前に現れることはなかった。

「ソーカル・・・ちゃん？」

「うん。僕と同じクラス。【現代組】のね・・・」

「デカちゃん、聞いた事あります～」

ラッセルちゃんの後ろからひょっこり現れたデカルトちゃん。

「デカちゃんが聞いた話では～　早口言葉で専門用語を言って～校内意見発表会で最優秀賞とったんです～。

でも授賞式で【全部嘘ぴょーん】って、笑い飛ばしたって聞いてます～」

「お？　デカ子、よく知ってるね～。

【ソーカル事件】って、ヤツだね」

「ソーカル・・・事件？」

「まぁ、クラスでもかなり変な子だからさ。

あまり気にしない方がいいよ。さ、公園行こ」

【現代組】って所は部長を始め・・・

「うん・・・」

変人の集まりらしい。

「数学倶楽部のメンバーで外へ行くのって、初めてかも～。
デカちゃん、ドキドキです～」

「お？　ドキドキしてる？　どれどれ・・・
ちょっとブラジャーハズして、お胸を・・・」

「きゃ～♪」

また始まった・・・。

「これ！」

不意に男性の透き通るようなテノール声が、私達にかけられた。

「あ・・・」

物理倶楽部の前にたたずむ、スーツ姿のダンディなおじさん。少し白髪が目立つ巻き毛で、身長は推定１８５ｃｍと大柄。ネクタイ姿をビシッと決めた我が聖フィロソフィー学園・・・

「サンジェルマン理事長・・・」

「・・・　・・・」

私達3人を睨み付けている。いや・・・　私を睨み付けてる？

「廊下で騒がないように。部室に入るか、静かに廊下を歩きなさい」

目つきは鋭いけど、優しい口調で注意する。

「すいません・・・」

頭を下げた私。後ろの2人も、一応頭を下げている。

「仲がいいのは良いことだが・・・
君達は今朝早くも・・・校舎の屋上ではしゃいでいたね？」

「え？」

「はわ？」

「え～？」

私達は同時に、疑問の声をあげた。

「僕たち、朝は一緒じゃないですよ？」

「そうです～。デカちゃんは今日、遅刻しました～！」

いや・・・だからそれ、胸をはって言える事か？　しかも理事長の前で？

「そ、そうです。私達は今日、倶楽部で初めて顔を合わせました」

「・・・　・・・・」

理事長の眉がつりあがる。

「そうか・・・。失礼。人違いだったようだ。
まぁ、とにかく。はしゃぐ時は、場所をわきまえて」

「は、はい！　失礼します！」

私は横にいた2人の袖を引っ張り、その場から立ち去った。

「僕たち、誰と勘違いされたんだろうね～？」

「デカちゃんも気になります～」

「・・・　・・・・」

チラッと後ろを見ると・・・理事長が、こちらをジッと睨み付けたままだった。

「理事長・・・

ロリコンかしら・・・？」

女子高生を見つめ続けるって事は、その可能性も否定できないってわけよね？

「わ。理事長、ずっとピタ子見てるよ。
ひょっとして、興味あるんじゃないの？」

部長が私の背中をポンと叩く。

「可能性アリです～。だからあんな作り話を言って、気を引いたんです～」

「まさか・・・」

再び後ろを振り返ると、彼が物理倶楽部に入っていくのが見えた。

「・・・　・・・」

確か理事長・・・　化学の先生だったはずだけど？　何故、物理倶楽部へ？

サンジェルマン理事長の事をちょっと気にしながらも・・・

私達3人は、学校を出ようと1階へ降りていった。

（第7話へ続く）

第6話　ソーカルちゃんと理事長（後書き）

次回予告

外に出ようと、1階の廊下を歩く私達。タレスちゃんやヘラクレイトスちゃん達が、万物の根源についてディスカッションしている所へ遭遇する。

次回　「　第7話　万物の根源（アルケー）　」

第７話　万物の根源（アルケー）（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。
それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の内容から、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員で間違いない。
同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんは犯人でないと確信した私は・・・この２人と共に、真犯人を探し出そうとする。
デカルトちゃんの提案で、ポール公園に行こうとするのだが・・・？

第７話　万物の根源（アルケー）

第7話　万物の根源（アルケー）

一介の化学教師だったサンジェルマン先生は、ある日偉大な化学の実験に成功した。くわしくは知らないけど、人はそれを【錬金術】と言うんだって。そのおかげでサンジェルマン先生は超のつくお金持ちになったらしい。

そして私立学校として経営の危機だった聖フィロソフィー学園を立て直すため、理事長に就任したのが数年前。彼のおかげで廃校の危機を免れた本校・・・最近、共学になったのもサンジェルマン理事長の発案だったそうだ。

まぁ私的には、ルブラン君と運命の出会いをしたのだから（遠くから見つめるだけで、喋った事ないんだけどね）・・・サンジェルマン理事長様々って感じよね。

そんな聖フィロソフィー学園・・・通称「テツ学」。放課後の廊下を歩くと、色々な連中と遭遇する。今、私達は玄関に向かうため、1階の【古代組】の前を通っているが・・・

「万物の根源（アルケー）は・・・水ですわ」

「いやいや、火だっぺよ！！」

「原子（アトム）だっちゃ！」

そこでは毎日、万物の根源・・・すなわちアルケー探しのディスカッションが行われている。

「水はどんな形にもなれるのよ。それに生命の起源は水にあり。
もっとも万物の根源にふさわしいのは・・・　水ですわ」

まるでネグリジェのようなスケスケの服装で・・・おっぱいも大きいタレスちゃん。

「それなら火だって、形を変えられるっぺよ！」

魔法使いのような出で立ちのヘラクレイトスちゃん。

「いやいや。原子（アトム）の結合次第では、どんな形にもなれるっちゃ・・・」

巫女のように可愛らしい姿のデモクリトスちゃん。万物の根源（アルケー）について語りあうこの3人の輪の中に

「デカちゃん的には・・・全て疑わしい！
つまりあなた達は・・・」

デカルトちゃんが乱入した。

「あら、デカルトちゃん。今度は私と・・・勝負するつもり？」

タレスちゃんがけんか腰に言葉を投げつける。

「はわ？」

首をかしげるデカルトちゃん。その横にいたラッセルちゃんと、タレスちゃんの目が合った。

「!?」

瞬間、タレスちゃんは・・・両手で胸を抑える。あれ？　ブラジャーつけてないよね？

「部長、タレスちゃんのブラ・・・取った？」

「あのさ、ピタ子。僕が見境無く人のブラ、取ったりするように見える？」

見える。

「タレスちゃん・・・　普段から、ノーブラだったっけ？」

「だから僕、彼女のブラなんか取ってないし」

明らかに警戒心むき出しのタレスちゃんは、部長に声をかける。

「あんた・・・　もう、十分でしょ？　さっさと行きなさいよ・・・」

タレスちゃん・・・部長が苦手みたい。過去、何かあったのだろうか？

「部長・・・タレスちゃんを襲ったんじゃないの？」

「まさか。僕がそんな事をするように・・・」

見える！

「まぁ、あの豊満な生乳・・・　揉んでみたいけどさ。
僕にだって理性があるよ」

人のブラはずしまくった前科数犯のエロオヤジに・・・理性なんてあるのか？

「いい？　デカちゃん的には～」

デカルトちゃんは、３人を交互に指さし・・・

「絶対的な何かを探すには・・・
あなたたち、【萌え】が足りないわ！！」

ドヤ顔で言ってのける。

「あなたの言う【萌え】だって、水じゃないの～！？」

「いやいや・・・火だっぺお！」

「だから、原子（アトム）だっちゃ・・・」

彼女たちには通じない。

「我思う、ゆえに我萌え～！　それだけが唯一の真実！！」

「あの・・・」

熱く語るデカルトちゃんに、背中から声をかける人物がいた。

「あの・・・　絶対壊れない・・・イデアの世界について語らない

？」

まためんどくさいのが現れた。時間が気になる私はデカルトちゃんの腕を掴み、ディスカッションの輪から引きずり出す。

「プラトンちゃん、ごめんね～。
私達、ちょっと用事があるの」

ヒラヒラのスカートに三角形のアクセサリーをつけたプラトンちゃん。

「ほら、デカルトちゃん。行くわよ！」

プラトンちゃんに背を向け

「イデア・・・」

「水・・・」

「火・・・」

「原子（アトム）・・・」

背後に、古代組の白熱ディスカッションを聞きながら・・・

「はわわ～　萌えです～」

後ろ髪引かれるデカルトちゃんの背中を押し、私達は靴箱へと向かった。

「僕的にはさ～」

ディスカッションを遠目に見守っていた部長が、口を開く。

「デモクリトリスちゃんは、なかなか・・・」

「デモクリトスちゃん！！」

油断するとベクトルが変態の方を向く部長。

「そうそう。デモクリトスちゃんね。
万物の根源（アルケー）が原子（アトム）・・・

なかなか確信ついてると思うな～」

「・・・　・・・」

以前はよく・・・私も、アルケーディスカッションに参加していた。

【万物の根源（アルケー）は、数である！】

これが私の持論。だけど、私のファンクラブ【ピタゴラス教団】の人以外・・・ほとんどこの意見に耳を貸さないのよね。

「数って何ですの？」

「見えないし！　書かないと見えないし！」

「そんなものが、万物の根源（アルケー）っちゃ？

ちゃんちゃらおかしいっちゃっちゃ！」

みな自分の主張こそが正しいと思ってる。まぁ、そういう私もそうなんだけど・・・。

「でもピタ子も、なかなかいいセンいってるよ」

部長は私の意見を褒めてくれる。教団以外の子では、唯一の人物だ。

「聖メンデレーエフ学園の子達と合コンした時さ。
元素は番号がついてる。つまり数字と元素は対応してるのよ」

合コン？

「それに僕たちがいる場所だって、座標系で数値表現できる」

「は～い！　座標はデカちゃんが発明しました～！」

「デカ子の発明は、直交座標。色んな座標系あるけど・・・
やっぱり最初の座標系を創始したのは偉いね、うん」

部長が言うには・・・例えば北緯何度、東経何度、高さ何ｍとかでこの地球上の【位置】は全て【数字】で表現できるという。さらには、その位置にある物質も全て元素レベルで考える事が出き、それら元素も数字が対応しているという。

「あとは質量なんかも、全て数値表現できるしね。
この世に存在する物は、数字で表現可能。例え見えなくても・・・」

「見えなくても?」

「例えばブラックホール。
光ものみこむわけだから、直接観測されたワケじゃない。
X線など電波の観測数値を元に、位置を特定しているんだ。
つまり数字だけが、見えないブラックホールの存在を主張しているのよ」

部長曰く・・・数字があれば、その物が存在している位置や材質、質量や大きさなど全て表現できる。例え私達の目で見えなくても。
つまり全ての物の存在は、数字に還元できる・・・

「僕は、【全て】とは言ってないよ」

これ以上は【存在論】という哲学の深いところまで発展する事になるので・・・その話はまたいつか。

「だからピタ子。万物の根源(アルケー)は数字・・・
正解とは断言できないけど、いいと思うよ。マジで」

「でも、数字の世界も疑う余地はあるでしょ〜」

デカルトちゃんの哲学は全てを疑う事から始まる。

「待ってよ、デカルトちゃん。例えば座標系も疑えるって事?」

「もちろんです〜」

「そんな事言ったら、デカ子。
君が開発したデカルト座標も、正しくないって事になるよ？」

「だからデカちゃん、言ってるじゃない～。
萌えの私だけが、唯一正しいの！

その私が考えた座標系は正しい・・・　はわ？
でもさっき、疑う余地があるって言っちゃったし・・・」

「ほら、パラドックスに陥った」

嬉しそうに部長が言い放つ。

そう・・・

私達は毎日・・・　こんな話し合いをしている。

ある者は、物質とは何かについて研究し・・・

ある者は、生きる意義は何かと考える・・・

ある者は、正義とは何かを語り・・・

そしてある者は、知識とは何かを追求する・・・

何も知らないという事さえ、【知】だという人もいる。

「【ムチの血】ってヤツでしょ！
興奮するね～　ラッセル～　ラッセル～♪」

「違います～。【無知の知】です～！」

「・・・　・・・・」

「おろ？　いつも真っ先にツッコミ入れるのはピタ子なのに・・・
放置プレイ？」

「いや・・・　私も1つ、【知】を得たわ」

「何です～？」

「【ベタなエロオヤジギャグは、殺意を芽生えさせる】」

「あ～。僕もそれ、わかる！！　すっごい、よくわかる！」

こいつはわかってない。

「・・・　・・・・」

部長の邪魔が入っちゃった。話を戻そう。

私達【人】はどこから来て、どこへ向かっているのか・・・

その存在意義とは何か？

何故、私達は感情があるのか？　愛とは何か？　生きるとは？

それらについて考える事は全て【哲学】の対象だ。

そして多くの哲学者は・・・それら思考の先にある、大きなテーマにぶちあたる事になる。

それは・・・【神の存在】。

【現代組】では【大統一理論】や【ビッグバン】、【インフレーション理論】や【超ひも理論】など、最新の科学や数学を学んでいるらしいが・・・

実のところ、それらの根本は不確実なのである。

結局行きつく先は、それら全ての源（みなもと）。おそらく【絶対的な何か】・・・多くの人はそれを【神】と表現する。そしてその存在を認めなければならないのかという議論になる。

【神】の定義とは何か？　【神】の存在をどう証明するのか？　そもそもこの世の起源は【神】でしか語れないのか？

現代組の天才児と言われるニーチェちゃんは

【神。お前はもう、死んでいる】

という言葉で、一躍（いちやく）時の人になった。これは【神は存在していたが、すでに死んだ】という意味ではない。彼女の言う【神】とは、絶対的な象徴・・・例えば【神】もそうだが、【真理】や【善】などもそれにあたる。それらはもはや無価値である・・・という彼女の主張を表したのが、上の言葉だ。

しかし彼女とて・・・

神が存在しない事を証明したわけではない。
この先、万人が納得する【答】が見つかるのかどうか・・・今のとこ、誰にもわからない。

「・・・　・・・・」

今の私はそれよりも・・・

「さ。ようやく学園の外に出たわ。
ポール公園に向かうわよ～」

恋敵（ライバル）が誰なのか・・・それにしか興味がない。そして無価値かもしれない【愛】のため・・・

その子の前に立ちはだかってやる。

「公園、見えてきたです～」

「青空教室ってのも、アリだわ。
部長として週一ぐらい、公園で部活ってのも考えようかな」

「・・・　・・・・」

もうすぐ目的地に到着する私達。

・・・　・・・・。

ちょうどその頃。

理事長室では、私達の想像を超えた【物】が運ばれていた。

「じゃ、ここにサインお願いします」

「・・・　・・・」

サンジェルマン理事長は、無言で宅配業者の差し出した用紙にサインする。

「では、失礼します」

業者が部屋を出ると・・・　目の前にある、段ボールを見つめた。

１辺約１．５ｍの、大きな立方体の段ボールだ。

「これが・・・」

その段ボールを、右手でさすりながら

「これが・・・

【神】の贈り物か・・・」

理事長はそう呟いた。

（第８話へ続く）

第7話　万物の根源（アルケー）（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

公園内のトイレに隠れ、私達は犯人が現れるであろうベンチを監視していた。

そしてとうとうその子は現れた！

急いで私は犯人の正体を確認しようとするが・・・？

次回「第8話　謎のメッセージ」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第８話　謎のメッセージ（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、何者かのラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達は・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第８話　謎のメッセージ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第8話　謎のメッセージ

ブラパラごっこに巻き込まれたり、ソーカルちゃんとぶつかったり、アルケーディスカッションに（デカルトちゃんが）プチ参加したり・・・

結局、ポール公園についたのは午後5時5分。

手紙の主は5時12分までに、トイレ近くのベンチに座っているはず。この公園にトイレは1つ。そしてその前にあるベンチも1つしかない。

「ベンチには、誰も座っていないです～」

「トイレとベンチは、完全に1対1対応。
つまりあのベンチに・・・

手紙の主は、今から現れるはず。
名探偵ラッセル～　ラッセル～♪」

部長が張り切っている。

「デカちゃん達、どこにいておきますか～？」

「・・・　・・・」

しばらく考えた私。

「あそこしかないわね」

私達はトイレの中・・・一番奥の個室に3人で潜り込んだ。

「わお～。個室に3P!?　ラッセル～　ラッセル～♪」

こらこら!

「これは18禁小説じゃないの!
そういう発言は禁止!!」

「【P】は【philosopher】（哲学者）の【P】だよ!
ピタ子、何エロい事考えてんの～?」

嬉しそうな部長。

「う・・・」

そして言葉に詰まる私。

「でも、みんなでトイレに入るなんて～
デカちゃんも、ちょっとドキドキです～」

「デカルトちゃんまで・・・」

他の個室には窓がない。だけどこの奥の個室だけは、小さな曇りガラスの窓がある。その窓をちょこっと開けると、あのベンチが見えるのだ。

私達3人は狭い個室で身を寄せ合いながら、その時を待つ。

午後5時10分。

「僕、おしっこしていい？」

「ダメ！」

「僕、緊張するとおしっこしたくなるんだけど・・・」

知らないって。

「デ、デカちゃんも・・・その・・・　おしっこしたいです～」

「えぇ！？」

溜息をつく私。

「じゃぁ別の個室行って、用を足してきてよ・・・」

「ほ～い」

「は～い」

2人が個室を出て行ったその時・・・

「は！？」

あのベンチに・・・

「誰！？」

何者かが歩み寄っていくのが見えた。背は私と同じぐらい。ブカブカの帽子を深くかぶり、大きすぎる黒いコートを着けている。

「あれじゃ・・・」

その子はトイレに背を向ける角度で歩いてきて、ベンチにちょこんと座った。

「誰かわからない」

迷ってる暇はない。私はすぐに個室を出ると、トイレの外に出た。

「・・・　・・・」

ベンチの方を見ると、その子が走り去っている姿が見える。

「く・・・」

私はすぐに彼女を追いかけようとした。どうしても・・・

「あの子は・・・？」

その子の正体を知りたい。だけど・・・

「！？」

ベンチの前を通り過ぎようとしたとき

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれた手紙が、ベンチの上に置かれているのが目に入った。

「・・・　・・・・」

走り去るあの子と、その手紙・・・交互に目をやる私。追いかけたいけど、手紙も気になる。

結局手紙から目を離せない私は、必然的に歩が止まった。それを手に取り、裏返す。

【ｆｒｏｍ　U】

そう書かれていた。

「フロム・・・　ユー・・・？」

顔を上げると・・・　すでにあの人物の姿はない。

「・・・　・・・・」

「ピタ子～！」

「いつの間に、ベンチに行ったんですか～？」

2人が仲良く、トイレから出てくる。

「ピタ子、誰かきたの？」

「う、うん・・・」

「誰だったんですか～？　気になります～」

私は首を横に振った。

「私がここに来たら、すぐ逃げていった。
帽子を深くかぶって、コート姿で・・・
いったい誰なのか・・・」

「え～？　じゃ、ピタ子・・・
結局、わからないまま？」

「うん・・・」

「はわ？」

デカルトちゃんが、私の手に握られた手紙に気づく。

「それ、何です～？」

「これは・・・」

2人の前に、私は【ｆｒｏｍ　Ｕ】の手紙を見せた。

「はわわ？　フロム・・・ユー？」

「表は？」

手紙をひっくり返す私。

【ピタゴラスに告ぐ】

「ピタ子に告ぐ？　何、コレ？」

「さぁ？」

「デカちゃんは～　中を見てみたいです～」

「まぁ、まぁ。まずはピタ子から見なよ」

「う、うん・・・」

私は封を切って、中を取りだした。便せんが1枚あるだけだ。

「・・・　・・・」

たった1行だけ、そこには書かれてあった。

「どう？　ピタ子？」

「何、書かれているんです～？」

「うん・・・」

見せても問題ないと判断した私は、便せんを広げて2人に見せた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「お～。いいね～。ライバル心、伝わる！
有界閉集合でいて挑戦的・・・僕、こういうの好きよ～」

「はわわ～　ルブラン君をめぐって、恋の三角関係勃発です～」

「ちょっと2人とも・・・　大事な事忘れてるわよ！」

そう。この手紙は・・・

「大丈夫、言わなくてもわかってるよ。
この手紙のパラドックスをね」

明らかな矛盾を含んでいる。

「えぇ？　デカちゃん、何が矛盾なのかわかんないです～」

「コレ書いた人の立場になれば、すぐわかるよ」

さすがは部長。

「このピタ子に宛てた手紙は・・・
ピタ子がルブラン君に関わろうとしていた事を知っている。

しかも、今、ここにピタ子が現れる事も知っていた」

それだけじゃない。この【U】はルブラン君がここに来ない事も知っていた？

「はわわ～　やっぱりデカちゃん、わかんないです～」

「【ピタ子がここに現れるのをどこで知ったの？】って事さ。
だって、この公園に来ようってなったのは・・・

ついさっきでしょ？」

「あ～！！　わかったです～！
デカちゃん達がここに来るのを決めたのは～　ついさっきなのに～

この手紙書いた人は～　ここに来るのを知っていた～
おかしいです～」

「はい、デカ子！　繰り返しの説明、ありがとさん」

「おかしいわ。ありえるの？
コレを書いた人・・・　まるで未来を知ってたみたい」

「まぁ焦らず。最初から整理しよう。
まずは・・・この公園に来ようと言ったデカ子が疑われるわね」

「はわ？　デカちゃんが！？」

私がトイレの個室からベンチを見ていた時・・・デカルトちゃんも部長も、私の側にはいなかった。

「でも僕は、デカ子がおしっこする【音】を聞いていた。
その間に、何者かがこの手紙をベンチに置いているから・・・

デカ子はアリバイある。シロね！」

「・・・　・・・・」

「きゃ～！　デカちゃんのおしっこ・・・聞いてたですか～！？」

「ラッセル！」

らっせる？　皮肉にも部長のセクハラ行為が・・・デカルトちゃんの無実を証明した。

「そのデカ子と一緒にトイレから出てきた僕も・・・当然シロ」

そう言うと部長は私をじっと見る。

「え？　まさか私・・・疑われてる？」

「可能性の問題。否定はできないってヤツね」

「ちょ、ちょっと待ってよ。
デカルトちゃんが公園に行こうと言ってから・・・

私達、ずっと一緒だったじゃない。こんな手紙を書く時間なんてないわよ」

「ちっちっち！」

部長は人差し指を左右にふった。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「ほら、この手紙の内容。別に公園を示唆してるわけでもないし・・・

あらかじめピタ子が用意しておいて、今、そのベンチに置いた。

その可能性もあるって事よ」

「はわわ～　自作自演です～」

「え～！　じゃぁ私、嘘言ったって事じゃん！」

「ブラサイズを【C】って言ったのも嘘だったじゃん」

「そ、それとこれとは・・・」

「まぁ、あくまでも可能性って事よ。
真実を追究したければ、あらゆる可能性を考えなきゃね。

それが僕達、哲学者の務めなんだからさ」

「・・・　・・・」

なんていうか・・・。部長にはいつも、うま～く言いくるめられているような気がする。

「大丈夫。今んとこ、僕はピタ子が【U】だと思って無いから。
じゃぁ次は、ここにいない人物の可能性を考えましょう。

ピタ子が見た子って？　どんな感じだった？」

「誰なんだろう？　あっという間に逃げていったけど・・・」

「もっと情報無いの？　身長とか、おっぱいの大きさとか？」

「身長は・・・私と同じぐらいだったかな？
コート着けてたから、おっぱいはわからないけど。
それと・・・」

私は見た。あの子が立ち去る時、コートの裾から

「何か、角張ったものが見えた。コレみたいな・・・」

髪の毛につけた三角定木のアクセサリーを2人に見せる。

「・・・　・・・」

部長がじっと定木を見つめた。なんだか私が【U】っていう可能性を増やしたような気もするけど・・・

「プラトンちゃんかな？　数学倶楽部だし・・・
それに彼女。そういうアクセ、持ってるわよ」

「プラトンちゃん・・・」

私と同じ【古代組】の子。いつも隣のソクラテスちゃんのために、必死にノートを取っている。ソクラテスちゃんは、ノートを一切取らない子で有名。なんでもプラトンちゃんは、ソクラテスちゃんをかなりリスペクトしているとか？

「でも～　プラトンちゃんは～　デカちゃん達が学校出る時～
ずっと校内にいた感じだったです～」

そうだ。

「確かに。私、同じクラスだけど・・・
放課後はいつも、ソクラテスちゃんの後ろをついていったり・・・

イデアイデアと言って、校内で誰かとディスカッションしてる。
今日みたいにね。外に出るのは登下校の時だけ・・・」

「プラトンちゃんはシロです～」

「う～ん。数学倶楽部で、ピタ子とプラトンちゃん以外で・・・
角張った小物持った子、他にいたかな～？」

「ここは・・・テツ学の生徒全員を、捜査対象にするべきかもです～」

「私と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持った子・・・」

「デカちゃん的には～　Pちゃんが見たのは～
Pちゃん自身～　って感じです～」

「話を総合するとそんな感じするよね～。
とうとうピタ子も・・・

僕みたいに、パラドキシカルな子になっちゃった？」

「はわわ～　デカちゃんもパラドキシカルなのに・・・
Pちゃんも仲間入りですか～？」

いや・・・　何、言ってんの？

「おぉ！　パラドキシカル！
３人ともパラドキシカルで３Ｐ！！」

ケラケラと笑う2人を横目に、今一度私はその便せんを見つめた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

手紙の主が私？

「冗談。こんな手紙なんか、書いた事ないし！」

何よりも・・・　この手紙書いた人物は、私の性格を全くわかってない。

「【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私よ！」

「うわ・・・ピタ子、なんかイメージ悪！」

「でもデカちゃんは～　Ｐちゃんの事、好きです～」

「いや・・・　そんなフォローしたら・・・
ホントに私、性格悪いみたいじゃん」

愛しのルブラン君に関わらないで？　それは私にとって、関わりなさいって言ってる事と同値だ。

「はい！　デカちゃん、１つ気づきました！
この【ｆｒｏｍ　Ｕ】！

【U】から始まる子を探せばいいと思いま～す！」

「【U】か・・・　僕の記憶では、【U】から始まる生徒・・・テツ学には、1人もいないわ」

「あ、ホラ。
部長と同じクラスに【ウィトゲンシュタイン】ちゃんがいたでしょ？

あの子、イニシャル【U】じゃない？」

「ううん。彼女は【U】でなくって、【W】から始まるよ」

「デカちゃんの記憶にも、【U】から始まる子って・・・
あの学校にはいないです～」

「【U】から始まる子はいない。なら、この【U】はいったい・・・？」

言いながら、部長が【U】を睨み付ける。

「・・・　・・・」

しばらく考えていた部長が、口を開いた。

「ユニオンかも・・・」

「ユニオン？」

「うん。集合で【II】はインターセクションだったでしょ？

【∪】はユニオンを表したじゃん」

一昨日、部長から習ったヤツだ。

「集合論は、現代の論理学とも密接に繋がっている。
僕たち哲学者が真なる何かを見つけようとしたら・・・
それを証明する道具が必要でしょ？　集合論もその道具の1つってわけ」

という部長の信念の元、私達は集合論を学んでいるけど

「ユニオンか～　う～ん・・・」

果たしてこの【∪】は、ユニオンなのか？

「最初ピタ子が見つけた【ｆｒｏｍ　Ⅱ】。
そして今回は【ｆｒｏｍ　∪】。

2つの手紙の主は、同一人物とみて間違いなさそうね」

私も同一犯という意見に賛成だ。

「最初が【インターセクション】。次が【ユニオン】を表しているなら・・・」

表しているなら？

「手紙の主は集合論を知っている人物。
そして集合論は【現代組】しか習わない。

つまりこの手紙の主は・・・
僕と同じ【現代組】の子の可能性が高いわね」

「・・・　・・・」

エロセクハラオヤジではあるけれど・・・【現代組】ゆえの豊富な知識、それに説明のうまさ、何より洞察力の深さ。やっぱり【数学倶楽部】の部長として適任だなと思わされる。

部長の言う通り。【Ⅱ】と【Ⅴ】が集合論の記号を表しているのだとすれば・・・

「【犯人】は【現代組】の子・・・」

この時の私は、意外な犯人の正体に気づくはずもなかった。

（第９話へ続く）

第8話　謎のメッセージ（後書き）

～～～

次回予告

部室へ戻った私達は、再びソーカルちゃんと遭遇する。これまでの状況を整理して犯人を探ろうとする。

倶楽部終了後、私は・・・

ルブラン君の家に向かった。

次回「第9話　ドッペルゲンガー？」

～～～

第9話　ドッペルゲンガー？（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月14日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を見かけたが逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第9話　ドッペルゲンガー？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第9話　ドッペルゲンガー？

午後6時前。

私達は学校に戻ってきた。部室の前で、再びソーカルちゃんと遭遇する。

「ライデン瓶の中に、冬虫夏草を入れておくとね・・・
カーボンによるサイクロンが発生し、コリオリの力で・・・・」

相変わらず意味不明な事を・・・

「はいはい・・・
僕たち、数学倶楽部のミーティングあるからさ」

先ほど同様、部長がソーカルちゃんの背中を押し・・・

「マヤ予言の真相は、リーマン予想によるコペンハーゲン解釈的で・・・」

「明日、話を聞くからさ～。じゃぁね、ソーカルちゃん」

物理倶楽部の部室へ押し込む。

「私！！　あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」

デジャビュ？　ソーカルちゃんは、私に指さしてそのセリフを言った。

「ばいば～い」

部長は物理倶楽部の扉を閉めると、隣の数学倶楽部へ入っていった。
私とデカルトちゃんが後に続く。

「結局手紙の主はわからなかったな～。
でも今日は・・・僕たちに出来る事はここまでだね」

「そうね・・・」

「ただ、いくつか情報は得た。
ピタ子と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持っている。

そして・・・」

「【Π】と【U】です～」

「手がかりはいくつか得られたけど・・・　謎が多いわ・・・」

「まぁそれは各自持ちかえって、考えるって事で。
明日また、わかった事を報告しあおう。

ほら、下校のチャイムもなったし。今日の数学倶楽部はお開き！」

「デカちゃんも、謎に挑戦してくるです～」

「あの・・・」

私は気になる事を、２人に聞いてみた。

「ドッペルゲンガーって・・・　何？」

「え！？」

「はわ！？」

２人は同時に驚いた表情を浮かべる。え？　何で？

「ピタ子、知らないの～？」

「はわわ～　Ｐちゃんはドッペルゲンガーの事、知らないんですか～？」

何よ・・・　２人して・・・

「普通、知ってるものなの？　その・・・
ドッペルゲンガーってヤツ・・・」

「有名なパラドックスの１つだよ。もう一人の自分の存在ってヤツ。
同じ世界に・・・
見た目だけでなく、心も体も全く完全な同一人物がいるっていう」

「この世界に・・・　全く同じ人がいる？」

「そうです～　自分と完全に同じ人物が～　その人のドッペルゲンガーです～」

よくわからない。

「じゃぁさ。その全く同じ人物とやらが、顔を合わせたらどうなるの？」

「おっと～・・・　ホントにピタ子、知らないんだね～」

「だから、聞いているんじゃない・・・」

「はい！デカちゃんが教えてあげます～！！
自分のドッペルゲンガーを見た人は～・・・」

見た人は？

「ズバリ、死ぬと言われてます～！！」

「死ぬ！？」

「まぁ、都市伝説の１つよ。
１人の人間は、この世に１つの命としてしか存在出来ない。
だから全く同一の人物が相対（あいたい）したら・・・
どちらか、あるいは両方死んじゃうってわけ」

「・・・　・・・」

未だによくわからないけど・・・

「自分のドッペルゲンガー・・・　見ちゃいけないって事？」

「そうです～」

「例えば僕のドッペルゲンガーがいたとして・・・
僕はそいつをチラリと見て、【僕のドッペルゲンガー?】と思うけど・・・

あちらも僕を見て、【僕のドッペルゲンガー?】・・・
なんて思ってるかもね」

「う～ん・・・　そんな事、あるのかしら?」

「あくまでも都市伝説だからさ。
量子力学では平行世界を考える場合もあって、そのブレーンを超えたら・・・

まぁいいや。今日はもう帰ろう。僕、お腹空いちゃった」

「デカちゃんも～　お腹ぺっこぺこです～」

ドッペルゲンガーはちょっと気になるけど・・・まぁ、あくまでも都市伝説だしね。

「うん。じゃぁ明日・・・」

こうしてこの日の数学倶楽部は・・・部長の集合論講義に始まり、手紙の主捜(ぬし)しで終わった。結局、犯人は見つけられなかったけどね。

学校を出た私は・・・

自宅とは違う方向へ足を運ぶ。

「・・・　・・・」

私はこう考えていた。

犯人は今朝早く学校に登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れた。そして今日の5時13分に、公園に来るようにと指示している。

ところが・・・そのラブレターは私が奪った。もちろんルブラン君が公園に現れる事はない。犯人の立場ならどう思うだろうか？

【ルブラン君にフラれちゃった】

これはマイナス思考。

【きっと何かの都合で、来られなかったのよ】

これがプラス思考。この世の思考も、プラスとマイナスがあるのは数学と同じ。

ただ・・・犯人は【私がラブレターを盗んだこと】を知って動いている。つまり【何かの都合】というのは、【私の邪魔】というわけだ。でなければ、あんな挑戦的なメッセージを私に残すはずがない。

1番最初の手紙から察するに・・・私同様、その子はルブラン君にベタ惚れのはず。ならば簡単に【諦める】という選択肢は存在しな

い。

つまり・・・

「・・・　・・・・」

午後６時３０分。

私は・・・

ルブラン君の家の前にいた。予想が正しければ

「犯人は、ここに現れる・・・」

ピーポー　ピーポー　ピーポー　・・・

閑散とした住宅街の中、救急車の音が鳴り響く・・・

私は電柱の影に身を寄せ、その人物を待っていた。

（第１０話へ続く）

第９話　ドッペルゲンガー？（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ルブラン君の家の前で張り込みする私。何とそこで、サンジェルマン理事長と遭遇してしまう。

そして理事長は・・・私にある手紙を渡した。

次回　「第１０話　理事長と手紙と私」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１０話　理事長と手紙と私（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

デカルトちゃんの提案で、ポール公園に向かった私達。怪しい人物を追いかけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

私はメッセージを無視。ルブラン君の家に向かった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１０話　理事長と手紙と私

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１０話　理事長と手紙と私

ストーカーでも何でも、好きによぶがいい。私は惚れた相手に一直線。生年月日や血液型、住所だって調べ上げる。

「さすがピタゴラス教団の教祖様」

誰！？

「・・・　・・・」

気のせいか。

住所はすでに調べていた私。でも、実際彼の家の前まで来たのは今日が初めて。

「すごい・・・　お屋敷・・・」

お金持ちの子と聞いてはいたけど・・・私の目の前には、３階建ての大きな洋館が建っている。数学的に言うと、５０ｍ×５０ｍ×１５ｍの直方体がスッポリ入るといった感じかしら。

屋敷に入るためには、大きな正門を通らなければいけない。門には誰も立っていないけど、何かしらのセキュリティはあると思う。

目的はあのラブレターの主を見つける事だけど・・・

「ルブラン君・・・　姿、見せないかな？」

いつしか私の視線は、犯人ではなく愛しの人を探そうとしていた。

・・・　・・・。

待つこと３０分。７時ちょうど。

「ピタゴラス君！」

電柱の影に隠れていた私に、透き通るようなテノール声がかけられた。

思わずロリコンと言おうとしたのは秘密。

「ロ・・・　サンジェルマン理事長！？」

「こんなところで・・・君は何を？」

視線は鋭いが、声は優しい。

「あ、えーっと・・・　その・・・」

理事長はチラリとお屋敷の方に視線を合わせた。そして再び私を見る。

「ルブランに・・・会いに来たのか？」

「え！？　あ、いえ・・・」

いきなりど真ん中にストライクを投げ込まれた私。しどろもどろに

応える。

「・・・　・・・・」

理事長は無言で、スーツの胸ポケットに手を突っ込んだ。そして・・・

「ついさっき、ある女の子に会ってね。
これをピタゴラス君に渡してくれと・・・」

「え？」

私に手紙を差し出す。

【ピタゴラスに告ぐ】

「！？」

ゴクリと唾を飲み込んだ。

「ま、まさか・・・」

「・・・　・・・・」

理事長が私の表情を伺っているけど、気づかない。震える手で、私はその手紙を受け取った。

「だ、誰が！？」

封を切る前、思わず理事長に大声で聞いてしまう。

「ブカブカの帽子に、黒いコートの子だったが・・・
顔を隠すようにしていたし、誰なのかはわからなかった」

公園で見たあの子だ！

「私が近くを通りかかったら、突然現れてね。
【これを、あの電柱の所に立っているピタゴラスちゃんへ渡して下さい】

そう言って手紙を渡すと、すぐに走り去ったよ」

「・・・　・・・」

起こりえない事が起きている。

デカルトちゃんと部長と別れた後・・・私は自分の意志でここに来た。その私を先回りした！？

「ありえない・・・」

「手紙を・・・　見ないのか？」

理事長が手紙を見るように促す。

「・・・　・・・」

理事長に背を向けた私は、すぐに中に入っていた1枚の便せんを取り出した。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！　ルブラン君、死んじゃうわよ！】

またしても1行。だけど・・・

「・・・　・・・」

背中に事長の視線が突き刺さる。

「な・・・　何が・・・」

何が起こってるの!?　私の頭は混乱の極みだ。

もし・・・

もし、この手紙の内容が真実なら?　出所は未だに不明だが、この手紙の主は私の行動を知っている。そして今度はルブラン君が死ぬとまで言ってきた。

出任せ?　それとも、まさか・・・ホントにルブラン君は、死んじゃいそうなの?

心拍数が上がっているのが自分でもわかる。

「り、理事長。さよなら!　また明日、学校で!!」

とっても嫌な予感がした私は、大通りに出てタクシーを止めた。

「市立病院まで!!」

運転手にそう告げると、祈るように窓の外を見上げる。

「この手紙が、デタラメであることを証明しなければ・・・」

安心できない。私の視界の隅・・・　サンジェルマン理事長が、ルブラン君のお屋敷に入っていく姿が映る。

「・・・　・・・」

でも、ルブラン君の安否を気にしていた私は・・・それに気づくことはなかった。

（第１１話へ続く）

第１０話　理事長と手紙と私（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

あまりにも突然の出来事だった。

ルブラン君は・・・

交通事故に遭って・・・

次回　「第１１話　ルブラン君の死　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１１話　ルブラン君の死（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

犯人の現れる可能性が強いポール公園に向かった私達。怪しい人物を見かけたけど、逃げられてしまう。そしてその人物は、これ以上ルブラン君に関わらないでというメッセージを残していた。

メッセージを無視した私は、ルブラン君の家に向かう。そこで理事長と出会い、手紙を渡された。その手紙には・・・

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１１話　ルブラン君の死

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１１話　ルブラン君の死

私が謎の手紙を受け取った翌日。

３月１５日。

聖フィロソフィー学園の全校生徒が体育館に集められた。

そしてサンジェルマン理事長の口から・・・

【近代組】に所属するルブラン君・・・彼の【死】が報告された。

自宅近くでの交通事故。ほぼ即死状態だったという。

体育館の至る所から、すすり鳴く声が聞こえてくる。

「・・・　・・・」

涙を流すことはない私。昨夜、病院で彼の死に顔を見た時・・・涙枯れるまで泣きはらしたからだ。

「・・・　・・・」

ルブラン君の死に直面してから、今に至るまで

「・・・　・・・」

私の記憶はない。何がどうなってるか、その判断能力もない。

好きな人を失った・・・それが事実なのだろうけど、その意味すらわらかない。哀しみだとか愛だとか、生きるだとか死ぬだとか・・・

今の私は何も解らない。

「・・・　・・・」

真っ赤な目を理事長に向け・・・

私は抜け殻のように、呆然と立っていた。

・・・　・・・。

放課後、数学倶楽部。

「私のせいよ!!」

私はデカルトちゃんと、部長を前に・・・自分を責めていた。

「ホントは・・・　ホントは私・・・
ルブラン君の靴箱から、あのラブレターを盗んだの!!」

正直に話す。

「私が盗まなければ・・・
ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかった!!
!」

テーブルに突っ伏し、大声でわめいた。

「・・・　はわわ・・・」

デカルトちゃんは、どんな言葉をかけたらいいかわからない様子で・・・

「・・・　・・・」

部長は、無表情で私を見ている。

やがて部長は・・・わめく私をよそに、眉間にしわをよせた。

「・・・　・・・」

何かが腑に落ちないといった様子だ。数分後、ようやく部長が口を開く。

「ねぇ、ピタ子さぁ。昨日、病院行ったんだって？
ルブラン君が運ばれた病院に・・・？」

「それが何よ!!」

逆ギレ気味で返事する。

「どうしてピタ子・・・ルブラン君が病院に運ばれた事、知ってたの？
僕たちは誰一人、彼が事故に遭った事を知らなかった。

今朝の全校集会までね」

「・・・　・・・・」

沈黙を保つ私。

「・・・　・・・・」

しばらくして私は、ポケットからあの手紙を取り出した。理事長から譲り受けたその手紙を、テーブルの上に広げて置く。

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！　ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「これ・・・」

「え!?　また、手紙もらったの？　誰から!?」

「はわわ～・・・」

「みんなと別れた後、理事長と偶然会って・・・
この手紙を渡された・・・」

「理事長から!?
まさかコレ、理事長が書いたわけじゃないでしょ!?」

そりゃそうだ。直接会ってるんだから、手紙経由で会話するわけがない。

「誰からの手紙!?」

「ブカブカ帽子で黒コートの子から・・・
私に渡すように手紙を預かったって。

多分、公園で私が見たのと同じ子だと思う・・・」

「はわわ～　それでPちゃん、病院にいたんですね～」

「どこで!?　どこでそれ、もらったの!?　学校?」

私は首を横に振る。

「ルブラン君の・・・家の前。あの手紙の主を捜したくて・・・」

ここまで来たら、とことん正直に話すわ。

「そこで理事長と会った?」

「うん・・・」

「・・・　・・・」

ちょっと悩んだ表情を浮かべた部長は

「なるほど。偶然にしては出来すぎな気もするけど・・・」

【今すぐ、市立病院へ行きなさい!　ルブラン君、死んじゃうわよ!】

「・・・　・・・」

じっとその文面を凝視する。

「あのさ・・・」

「　？　」

不意に部長は私の手を握ってきた。

「・・・　・・・」

ゆっくりと顔をあげる私。デカルトちゃんも、部長に視線を合わせる。

「僕、思うんだけど・・・」

部長は、衝撃的な事を口にした。

「ルブラン君・・・　殺されたんじゃないかな?」

「え!?」

「えぇ!?」

（第１２話へ続く）

第１１話　ルブラン君の死（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

部長は昨日の出来事を紙に書き始めた。

そして理事長から貰った手紙の裏に書かれた【ｆｒｏｍ　θ】を見て・・・

手紙の主を特定する。その人物は、１日前に私達が遭遇した人物の中に・・・

次回「第１２話　部長の予言」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１２話　部長の予言（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１２話　部長の予言

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１２話　部長の予言

「はわわわ・・・」

「ル、ルブラン君が・・・　殺された!?」

部長の言葉で、一気に現実に戻った。

「ちょっと・・・　声、おさえてよ・・・」

「はわわわ・・・」

「どうして!?　何でそう思うの!?　誰かが車でひき殺したっての!?」

矢継ぎ早に質問する私。

「まぁまぁ。落ち着いて。順を追って説明するから」

冷静な部長は、テーブルの上に紙と鉛筆を用意した。

「情報をまとめる。そこから導き出される可能性を全て考慮し・・・

論理的な推論の元で・・・」

言いながら、紙の上に何かを書き出していく。

３月１４日
ＡＭ７：００　ピタ子。

靴箱からラブレターを盗む。カントちゃんとニアミス。

ＰＭ３：１０頃　ピタ子、僕、デカ子。
部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

ＰＭ３：３０頃
デカ子の発案で、公園に行くことを決定。

ＰＭ３：４０頃
ソーカルちゃんと遭遇。

・・・　・・・

「昨日の事・・・　まとめてるのよね？」

「そう」

ＰＭ５：１１
デカ子がおしっこ。証人、僕。

「はわわ・・・
デカちゃんがおしっこしてた時の事も、書き込むんですか～？」

「もちろん。デカ子がシロだっていう根拠になるし」

ＰＭ７：００頃
ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】
【今すぐ、市立病院へ行きなさい！　ルブラン君、死んじゃうわよ！】

ＰＭ７：４０頃
ピタ子、病院でルブラン君が死んだ事を知る。

「よし。完成！」

私達は、部長が書いたそれに目を通す。

「まずコレよね」

ＰＭ５：１２
ピタ子がコート姿の子を見た。しかし逃げられる。
ブカブカ帽子、黒コート。三角形のアクセ。

ＰＭ５：１４頃
ベンチの上にあった手紙を確認。

【ピタゴラスに告ぐ】【ｆｒｏｍ　Ｕ】
【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「内容から察するに、手紙の主はピタ子が手紙を盗んだことを知っていた」

「まぁ、そう考えるのが妥当よね。
でもどこで・・・　私がラブレター盗んだのを知ったのかしら？」

「僕とデカ子が、ルブラン君に宛てられたラブレターを見たのは・・・」

ＰＭ３：１０頃　ピタ子、僕、デカ子。
部室で【集合論講義】。ルブラン君宛のラブレターを見せられ、差出人を捜す事に。

「３時過ぎ。
この時から【ｆｒｏｍ　Ｕ】の手紙に遭遇するまで・・・
僕たち３人、ずっと一緒に行動していた。
つまり僕とデカ子は、この手紙を書くだけの時間はなかった」

「最初から・・・部長とデカルトちゃんは、疑ってないわよ」

「デカちゃん的には～　やっぱりカントちゃんじゃないですか～？
朝一で～　Ｐちゃんとニアミスしてるし～」

「あの角度では・・・　絶対私、見られてないと思う」

「カントちゃんの事は頭に入れておく。大事なのはこの先・・・コレよ」

ＰＭ６：４０頃
ピタ子、ルブラン君の家の前に現れる。

ＰＭ７：００頃
ピタ子、理事長から手紙を渡される。

【ピタゴラスに告ぐ】
【今すぐ、市立病院へ行きなさい！　ルブラン君、死んじゃうわよ！】

「病院へ行けと警告した人物なんだけどさ。逆算すると・・・
ルブラン君が車にひかれた直後、この手紙を書いている事になるわ」

「はわわ・・・　ルブラン君が車にひかれたのに～
こんな手紙を書くって・・・

そんな神経の持ち主、いるんですか～？」

「ヘタしたら・・・
ルブラン君が車にひかれる前に、手紙を書いた可能性もある」

「え！？　そ、そんな事・・・あり得るの！？」

「まぁ、可能性としてはあるってだけで。
やっぱルブラン君が事故に遭った直後に、書いたと思う方が自然かな。

どちらにせよ・・・」

どちらにせよ？

「この手紙の主がルブラン君を殺したと思えば・・・
スジが通るんじゃない？」

「えぇ！？」

「はわわ・・・」

「僕の仮説はこう。
ストーカー並にルブラン君を愛するがあまり・・・

抱きついたか、何かの拍子で彼を道路に押し出した。
そして彼は車にひかれてしまった」

「・・・　・・・」

「突発的な事故ですか～？」

「うん。その子は自分のラブレターが、ピタ子に盗まれた事を知っている。
いわばルブラン君をめぐって、恋敵と思ってるわけだから・・・

死ぬかも知れないルブラン君に・・・
最後、ピタ子を会わせてやろうとした」

「だから・・・　あんな手紙を書いた？」

「そんなとこね」

かなり無理のある話のように思える。

「苦しい仮説なのはわかってる。ただ1つ。
どうみても、この手紙の主は・・・
ルブラン君の【死】に関わっている。それだけは間違いないと思う」

ルブラン君が車にひかれた直後に手紙を書いてるのだから・・・

「デカちゃんも～　部長の話聞いてたら～　そんな感じがします～」

「うん。私も・・・」

確かにそんな気がしてきた。でも・・・

「いったい誰が？　ルブラン君の死に関わってる人物なんて」

「はわわ～　誰なんでしょう～？」

「そう言えば・・・」

部長が何かを思い出す。

「ほら、理事長からもらった手紙」

「ん？　何？」

「【ｆｒｏｍ　Π】とか【ｆｒｏｍ　U】とか、書いてなかった？」

「あぁ・・・」

昨日は混乱してたから，手紙の裏を確認するのを忘れてた。

「書いてる。ほら、コレ・・・」

「僕の予想じゃ、集合論の記号とみた。
補集合を表す【C】か、あるいは・・・」

【ｆｒｏｍ　θ】

「あれ？」

部長の予想はハズれた。

「これは～　シータです～」

図形の角度を表すのに、よく使われる記号だ。

「あれれ～？　絶対集合論がらみだと思ったのに。
インターセクション、ユニオンときて、次がシータ？」

「部長が思ってるほど、この記号・・・
意味なんて、ないんじゃない？」

私は素直に思った。

【Π】【∪】【θ】

「そうね。こりゃ、意味なんてなさそ・・・」

突然部長の眉がつり上がる。

「・・・　・・・」

【Π】【∪】【θ】

じっと3つの記号を見つめながら・・・

「まさか・・・」

首を横に振った。

「部長？」

「どうしました～？」

「・・・　・・・」

部長の視線は、3つの記号を見つめたままだ。

「部長？　何かわかったの？」

「い、いや。まさか・・・　ね・・・」

「はわわ～　何か解ったら、デカちゃん達にも教えて欲しいです～」

「そうよ。部長・・・」

「・・・　・・・・」

眉をつり上げたままの部長。

「ピタ子。最初の手紙、持ってるわよね？
【ｆｒｏｍ　Π】のヤツ」

「うん」

「見せて」

私はポケットに入れっぱなしだったその手紙を、部長に渡す。

「・・・　・・・・」

部長は便せんを取り出し、それを凝視した。

「５・・・　１３・・・・」

「　？　」

「もしも・・・」

部長は手紙を見つめながら

「もしも次、こんな手紙が来てさ。それが・・・」

「それが？」

「アルファからの手紙だったら・・・」

「α（アルファ）？」

【α（アルファ）】・・・【θ】に次いで、角度を表すのによく用いられる記号だ。

「アルファだったら、どうなるんですか～？」

「手紙の主が確定する。確率的にも、ほぼ間違いなく・・・」

「だ、誰よ、それ!?」

私は、その手紙の主・・・犯人の正体を問い詰める。

「今は言えない。だって・・・」

いつもの部長とは違う。魂が抜けかけたような感じだ。

「だって、ありない事だから・・・」

「はわわ～　教えて欲しいです～」

部長は首を横に振った。

「これは冗談抜きで、パラドックス・・・」

この部長の反応。

「・・・　・・・」

もしかして・・・

「私達が知ってる人？」

ピンと来た私。

「うん」

部長はそれを認める。

「誰！？」

「言えない。それを口にすることは・・・
哲学者にとって、大きな覚悟がいる・・・」

「はわわ～　こんな真剣な部長、初めて見ます～」

「・・・　・・・」

知りたい。でも部長にも部長の哲学がある。簡単に人の哲学を否定してはいけない。いけないけど・・・

「じゃ、じゃぁ・・・
昨日1日、私達が会った人物の中にその人はいる？
それだけでいいから、教えて！」

「・・・　・・・」

逡巡の後、部長は・・・

「いる・・・」

私と目を合わせず、そう言った。

部長の予言したアルファからの手紙。

今から3分後・・・

その手紙を手にするなんて、夢にも思わない私達だった。

（第１３話へ続く）

第１２話　部長の予言（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

部室を出た私は、ソーカルちゃんとぶつかった。

いつもとは、何かが違うソーカルちゃん。そんな彼女から・・・

私は【ｆｒｏｍ　α】の手紙を受け取った。

次回「第１３話　違和感」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１３話　違和感（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【α】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている誰かだと言い切った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１３話　違和感

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１３話　違和感

キーン　コーン　カーン・・・

校内放送だ。

「【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へお越し下さい。繰り返します。【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へ・・・」

「はわ？　Ｐちゃんの呼び出しです～」

「な、何だろう？」

私はイスから立ち上がった。

「僕も行く」

部長も続いて立ち上がる。

「え？　呼び出されたの、私だけよ？」

部長は首を横に振った。

「わかってる。でも僕も行く。いや、行った方がいい」

エロセクハラキャラなのに・・・今はそんなそぶりが微塵もない。

「じゃぁ、デカちゃんも行きます～」

この展開を読んでいた私は

「お好きなように」

と告げ、真っ先に部室を出た。

バタン！！

「あ・・・」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかる。

あれ？　つい最近もこんな事があったような？

その場で倒れてしまった私。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を向くと、色々な数式や化学記号がプリントされている洋服が目に入る。

「ソーカルちゃん！」

昨日と全く同じシチュエーション。違うといえば、ぶつかった子の名前を私が知っている事ぐらいだ。

「・・・　・・・」

私と視線を合わせたソーカルちゃんは

「今ね。今・・・
ＬＨＣで、光より速いニュートリノの観測に成功したって！
わかる？　どんなにすごい事が起こったか？」
顔を近づけ、嬉しそうに語ってきた。

「アインシュタインちゃんの相対性理論が崩れるのよ！
タイムマシンが作れるの！！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

昨日同様、私の次に部室を出てきた部長が

「天動説が地動説に変わった時と同じぐらい・・・
哲学に大きな波が押し寄せるわ！！」

やはり昨日と同じように、ソーカルちゃんの背中を押していく。

「ほら。【物理倶楽部】は、隣だから・・・」

「あと１つ！　あと１つ、数式を解ければ・・・
タイムマシンが・・・」

「そうね。光より速い物質があれば・・・
タイムマシン、作れるわよね」

そして隣の【物理倶楽部】へ押し込み、扉を閉めた。

「さ、行こ。理事長室」

邪魔者をカタした部長が、笑顔を見せる。

「うん。でも・・・」

逆にモヤッとした表情を浮かべる私。

「どした？」

部長が私の顔を覗き込む。

「うん。なんかあの子・・・今日、変じゃない？」

「どこがです～？　昨日もあんな感じでしたよ～？」

部室から出てきたデカルトちゃん。

「いや、ほら。
昨日は意味不明な事、しっちゃかめっちゃか言ってたのに・・・

今日は、話のスジが通っていたような・・・？」

そう。少なくとも私には・・・昨日のソーカルちゃんと、別人に思えた。

「まぁ、あの日ってヤツじゃない？　さ、行こ」

「うん・・・」

バタン！！

「ちょっと待って！！」

物理倶楽部の扉が勢いよく開いたかと思うと、ソーカルちゃんが再び出てきた。

「・・・　・・・」

違和感を感じる私。再び顔を出す事なんて、昨日はなかったのに。

彼女は私に詰め寄ってくる。

「な、何か？」

「コレ！　あなたにって！！」

そして１枚の手紙を差し出した。

「１０分前に、預かったの！」

ソーカルちゃんが差し出した手紙には

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれている。

「！？」

「・・・　・・・」

「はわわ・・・」

震える手で、私は手紙を受け取った。

「だ、誰？　誰からこの手紙を！？」

すぐにソーカルちゃんに詰め寄る。

「さぁ？」

いつものマシンガントークはどこへやら。彼女はニヤニヤしながら・・・そのまま物理倶楽部の部室に戻り、自ら扉を閉めた。

「ちょ・・・　待って！　いったい誰がこれを！？」

物理倶楽部の扉を開けようとした私の肩に、部長がポンと手を置く。

「ピタ子。裏、見てみなよ」

「・・・　・・・」

言われた通り私は、手紙の裏側を上に向けた。

「はわわ・・・」

そこには・・・

【ｆｒｏｍ　α】

部長が予言した【α】が書かれていた。

「な・・・　」

呆然とする私と

「はわわ・・・」

デカルトちゃん。そして・・・

「・・・　　・・・・」

部長は

「でも、これで・・・　手紙の主は確定した・・・」

私の横で寂しそうに呟いた。

（第１４話へ続く）

第１３話　違和感（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

私はとうとう・・・

部長の口から、手紙の主の名前を知る事になる。

次回　「第１４話　犯人の正体」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１４話　犯人の正体（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

ラッセルちゃんはルブラン君が誰かに殺されたという。そしてもし【α】からの手紙が来たら、犯人は私達の知っている人物だと言い・・・

私はソーカルちゃんから、【ｆｒｏｍ　α】の手紙を受け取った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１４話　犯人の正体

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１４話　犯人の正体

「誰!?　誰なのよ!?」

私は部長に詰め寄る。

「その前に・・・　手紙の中は?」

「何で!?　手紙の主が確定したんでしょ!?　すぐ教えてよ!!」

「僕自身、その子が手紙の主とは思えないんだ。
だからまず・・・　手紙の中を見たい」

「だ・・・　・・・・」

言葉をのみ込む私。

「・・・　・・・・」

ここで言い争っても仕方がない。深呼吸をした私は手紙の封を開け、中を取り出す。毎度のように便せんが１枚入っていた。

【３人で理事長室へ】

「・・・　・・・・」

「はわわ～」

「パラドックスのオンパレードね・・・」

ソーカルちゃんの証言では、この手紙が渡されたのは１０分前。しかし私が理事長室へ呼び出されてから、まだ5分と経っていない。

「ど、どういう事？　何で？　まるで、未来から送られた手紙みたい・・」

「デカちゃんわかりました～！
理事長があらかじめこれを書いて～
ソーカルちゃんに渡したと思います～」

さすがデカルトちゃん。１番納得いく答えだわ。でも・・・

「そんな手の込んだ事・・・　あの理事長がやるかしら？」

その時の私はそう思っていた。

「デカ子、ピタ子。理事長室、行くわよ。そこに答えがある・・・」

部長は犯人の名を明かさず、私達の先頭に立って理事長室へ向かう。

「・・・　・・・」

その後ろを私、最後尾をデカルトちゃんが続いた。

・・・　・・・。

理事長室の前まで来た私達。スーツ姿の見慣れぬ2人の男が

「それでは、また明日」

そう言って、理事長室から出てくるのを見た。一礼した男達は、向こう側へ歩き出す。

「もし、ＲＤＮＤの話が本当なら・・・
医療の現場に革命が起こせるな・・・」

ＲＤＮＤ？

「あぁ。特許を取れば、間違いなく・・・
数兆円の利益を得られるというのに・・・」

す、数兆円！？

怪しげな会話をしながら、男達は視界から消えていく。何だろう？

理事長お得意の【錬金術】がらみかしら？

「・・・　・・・」

理事長室の前に立った私は

トントン。

「失礼します」

ノックをした後、理事長室へ入っていく。

「失礼しますです～」

「失礼しまっす」

デカルトちゃんと部長も私に続いた。

理事長室に入るのは初めて。２０畳ぐらいだろうか。広い部屋の周りをぐるりと囲むように、ガラスケースがある。そのガラスケースの中には・・・地図とか人形とか、色んなオブジェのような物が見えた。

「あぁ。ちょっと待ってくれ」

サンジェルマン理事長は何枚かの書類を抱えて、奥のデスクに向かっていた。

「・・・　・・・」

その書類の文字が目に入る。

【ＲＤＮＤ】？　【仮死】？　【硫化水素】？

何だろう？　さっき出て行った人たちが言ってたヤツかな？

「３人できたか・・・」

書類をデスクの引き出しにしまいながら、理事長が呟いた。

「あ、あの・・・　呼び出されたので・・・」

「わかっている。後ろの2人も入りなさい。そこのソファに座りたまえ」

部屋の中央にある、大きな大理石のテーブル。その前にある横長のソファに私達は座った。

「ふっかふかです～」

嬉しそうなデカルトちゃんとは対照的に、私と部長は緊張気味。

「さて・・・」

理事長は、向かいのソファに座ると・・・

「呼び出した理由はこれだ・・・」

【ピタゴラスに告ぐ】

1枚の手紙を、表にして差し出した。

「・・・　・・・」

驚いたのは一瞬。さすがにもう慣れてしまった。それに・・・

「なるほど・・・」

横で頷いている部長は、手紙の主を知っている。

「君達に聞こう。この裏に、何が書かれているかな？」

「・・・　・・・・」

これが呼び出した理由なの？

「・・・　・・・・」

私とデカルトちゃんは、同時に部長の方を見る。部長は、理事長に視線を合わせて

「フロムガンマ」

と言った。ふろむがんま？

「ふふ。さすがは本校数学倶楽部の部長・・・」

嬉しそうな表情を浮かべた理事長は、手紙を裏返す。そして私達の目の前に・・・

【ｆｒｏｍ γ】

手紙の裏に書かれた、それが映った。いっけん英語の【ｒ（アール）】に見えるが、これはギリシア語の【γ（ガンマ）】だ。

「はわわ・・・」

「・・・　・・・・」

私の脳裏にデカルトちゃんの言った事が浮かぶ。手紙の主はやっぱ

り・・・理事長では？

そういえば昨晩、ルブラン君の家の前にも理事長はいた。何故あの時間、あの場所に理事長がいたのか？

それに私達が公園に行く前にも、理事長に会っている。そして今日・・・

理事長は私達を校内放送で呼び出す前、あの手紙をソーカルちゃんに渡した。デカルトちゃんの仮説を認めれば、全てつじつまが合う。

でも、理事長がこんな手の込んだ事を？

「・・・　・・・」

とはいえ【理事長が犯人】である事以外、この事態をうまく説明する事が出来ない。

「あの・・・　その手紙、いったいどういうつもりで？」

あなたが書いたんですか？

「ピタゴラス君。この手紙が、誰によって書かれたのか・・・？
君はまだ、わかってないようだ」

わかってるけど・・・　手紙の主があなたよ！だなんて、目上の人には言いづらい。

「はい！」

重い空気が流れる直前、デカルトちゃんが手を挙げた。

「デカちゃんの推理によれば～　この手紙の主は～」

立ち上がったデカルトちゃんは、目の前の理事長に指さすと・・・

「サンジェルマン理事長！　ズバリ、あなたです～！！」

ドヤ顔で言ってのけた。えらい！　よくぞ言ってくれた！　天然キャラのみが許される無礼講だ。

「・・・　・・・・」

「・・・　・・・・」

しばし静寂の時が流れる。

「ブー！　デカ子、大ハズレ！」

静寂をうち破ったのは部長だけど・・・　え？　違うの？

「デカ子が・・・
　１番最初に、犯人を言い当てていたんだけどな～　残念！」

え？

「では、ラッセル君。この手紙の主は・・・誰かな？」

そうだ・・・

何故、部長は【γ】からの手紙だと知っていた？　謎はまだ残っている・・・

「えぇ、僕にはわかります。この手紙の主は・・・」

部長は私をじっと見つめた。

「　？　」

キョトンとする私を指さした部長は・・・

「ピタ子です」

こともあろうに、私を犯人だと言った。

（第１５話へ続く）

第１４話　犯人の正体（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

部長は私が犯人である事を証明すると言い出した。

【Π】【u】【θ】【α】【γ】

この５つの文字・・・

そして私が犯人である決定的な証拠を・・・

次回　「第１５話　証　明　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１５話　証　明（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私だと言った。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１５話　証　明

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１５話　証　明

「ちょ・・・」

「根拠は？」

私の反論より先に、理事長は部長へ質問する。

「まず最初にピタ子が手にした手紙に【ｆｒｏｍ　Π】とありました。

僕は最初、【Π】をインターセクションだと思っていましたが・・・

後に、これはギリシア語の【Π（パイ）】を表していると確信しました。

英語で言うと【Ｐ】」

「ふむ・・・」

「次にピタ子が手にした手紙。ポール公園で見つけた【ｆｒｏｍ　U】。

こちらは英語の【Ｕ（ユー）】か、集合論のユニオンかと思いましたが・・・

ギリシア語の小文字【Ｕ（ウプシロン）】です。英語で言うと【ｙ】」

「ちょっと待ってくれ」

理事長がストップをかけた。

「お二方にもわかるよう・・・」

お二方？　どうやら、私とデカルトちゃんらしい。

「これに書くといい」

そういうと理事長は、自分のデスクから紙と鉛筆を取り出し、部長の前に置いた。

【Π】【U】
【P】【y】

部長はギリシァ語と英語の両方を書いて見せる。

「3枚目はルブラン君の家の前で、ピタ子が理事長から渡された手紙。
【ｆｒｏｍ　θ】。【θ（シータ）】の英語での対応は【ｔｈ】」

発音記号でお馴染みの記号だ。

【Π】【U】【θ】
【P】【y】【ｔｈ】

ん？　なんか見覚えが・・・

「4枚目はここへ来る前、ソーカルちゃんからもらった【ｆｒｏｍ　α】。

【α（アルファ）】はもちろん・・・」

英語の【a】。

【Π】【U】【θ】【α】

【P】【y】【th】【a】

え？　え？　まさかこれって・・・

「そして今、目の前にある【from γ】。

【γ（ガンマ）】は英語で、【g】にあたります」

【Π】【U】【θ】【α】【γ】

【P】【y】【th】【a】【g】

「はわわ・・・」

「もし、次の手紙があるなら・・・」

「待って・・・」

私は部長の手を止め・・・

「【o（オミクロン）】、【ρ（ロー）】、【α（アルファ）】、

【ζ（ゼータ）】・・・」

次に来るであろう、ギリシア文字を書いて見せた。

「ご名答・・・」

部長の寂しい返事が返ってくる。英語対応は【o】【r】【a】【s】だ。

【Π】【U】【θ】【α】【γ】【o】【ρ】【α】【ζ】
【P】【y】【th】【a】【g】【o】【r】【a】【s】

その場にいた4人全てが・・・
私の名前【Pythagoras（ピタゴラス）】を凝視している。

「な、何でギリシァ語？」

「ピタ子、ギリシァ出身じゃん。サモス島から来たんでしょ？」

そうだ・・・　けど・・・

聖フィロソフィー学園は世界各国から生徒を募っている、いわば多国籍軍。学園内の公用語は日本語と英語。

「母国語なんて、久しぶりに見た・・・」

でも、待って。

「私、こんな手紙、書いた事ないわよ？」

「いや。ピタ子が書いたんだ、間違いない」

「だからこんな手紙、書いてないってば・・・
本人がそう言ってるんだから・・・」

「証明して見せようか？」

部長は自信満々で私の顔を覗き込む。

「是非とも証明して貰おうかしら」

私も自信満々で言い返す。犯人は勝手に人様の名前を使って、私を陥れようとしているに違いない。

「じゃぁ、もしさ・・・」

「？」

「もし、僕が正しかったらさ～　ピタ子のブラ、ちょうだい」

こらこら。理事長の前で、なんつー・・・

「いいわよ！」

でもまぁ、私が犯人のワケないし。その賭けにのることにした。

「じゃぁ、部長が間違ってた場合は？　部長は私に何かしてくれるの？」

「ピタ子のブラ、2度とハズさない」

んー・・・　なんか私に得があるように思えない気もするけど・・・

「のった！」

私は部長に右手を差しだし

「Ｉｔ，ｓ　ａ　ｄｅａｌ！」（決まりね！）

お互い、しっかりと握手した。

これから先、ブラパラごっこに巻き込まれる事は無い。前向きにこの交渉をとらえよう。

「で？　どうやって私が手紙の主だと？」

余裕の私に、部長はニヤリと笑った。

「ピタ子のリュック、持ってきて」

「え？　私のリュック？」

「そ」

「何で？」

「証拠がそこに入ってるから」

「・・・　・・・」

全く部長の意図が見えない。見えないけど・・・

「わかった。その証拠とやら、私も納得できるんでしょうね？」

それで白黒つくのなら・・・

「もちのロンよ！」

「・・・　・・・・」

しばらく部長の顔を見た後、理事長の方に視線を移す。

「ラッセル君の言う通りに」

どうやら理事長も、それを望んでいるらしい。

「では・・・」

私はソファから立ち上がると・・・

「失礼します」

一礼して、理事長室を出て行った。そして自分のクラス【古代組】へ向かう。ロッカーからリュックを取り出し、それを背負うと再び理事長室へ向かった。

・・・　・・・。

「これがかの有名なピリレイスの地図だ。
１５１３年に描かれたと言われている」

「はわわ～　あの時代に、こんな地図を描けるなんて～」

「理事長、この金色のロケットは？　僕、こういうカッコいいの欲

しい～」

「それはコロンビアで発見された、黄金のシャトルだ。
年代測定の結果、今から１０００年以上前のものだそうだ」

「１０００年！？
１０００年も前に、こんなスペースシャトルみたいなものが？」

「あぁ。不思議だろ？　飛行機なんてもちろん無い時代の代物。
こちらに来てごらん。メキシコで発見された恐竜土偶がある。

これは、人類と恐竜が共存していたことを示唆する・・・」

カチャリ

「失礼します。戻りました・・・」

私が理事長室に戻ると・・・デカルトちゃんと部長は目を輝かせて、
室内にあるガラスケースの中身を覗いていた。

「あぁ、ピタゴラス君。戻ってきたね。では・・・」

再び私達は、大理石のテーブルを取り囲んだソファに座る。

「ほら、部長。リュック、持ってきたわよ」

テーブルの上にリュックを置くと・・・

「ちょっと失礼・・・」

部長がリュックを手にした。

「・・・　・・・・」

黙って様子を見守っていると・・・

「だいたいピタ子。大事なのは、この奥のポッケに入れるんだよね～

こないだは、そこに替えのパンティ入れてたし～」

「ちょ・・・」

理事長の前で何を・・・　いや、それ以前に勝手に私のリュックを・・・

あれ？　そういや先週、替えのパンティ入れた時・・・　無くなってたけどまさか・・・？

「ちょっと部長！　まさか私のパン・・・」

「あった！！」

問い詰める前に、部長が声をあげた。その手には手紙が握られている。

「・・・　・・・」

表に【ルブラン君へ】と書かれていた。これは・・・

「はわわ～。これは、Pちゃんが最初にデカちゃん達に見せた手紙

です～」

部長はそれを裏返す。

「はわ？　【ｆｒｏｍ　Π】が無いです～」

これは私がルブラン君のために書いたラブレターで、最初からルブラン君の靴箱に入っていたものではない。裏に何も書かれていない事が、それを証明している。

「ちょ、ちょっと。それはダメ・・・」

すぐに部長の手から手紙を奪い取った。

「それが証拠だよ、ピタ子」

え？　これが証拠？

じっとその手紙を見てみる。

「裏には【ｆｒｏｍ　★】とか、書かれてないのに？」

一連の手紙には、必ず【ｆｒｏｍ　★】と書かれてあった。

「中、見れば一発だから」

「中？」

そう言えば私、どんな事書いたんだっけ？

「はわわ〜　早く中、見せて欲しいです〜」

デカルトちゃんにせかされ、私は中身を取り出した。便せんが１枚だけが入っている。その内容は・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もっとあなたの・・・近傍（きんぼう）に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていけます。

メールアドレスを教えてくれたら・・・
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時１３分でどうでしょう？
私、１分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P．S．
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれれば、私は十分です。

信じられない表情を浮かべる私がいたのは、言うまでもない。

（第１６話へ続く）

第１５話　証　明（後書き）

〜〜

次回予告

パニックになる私。

そんな私達に、理事長は数学の問題を出してきた。

それを解く事が出来れば・・・全ての謎が明らかになるという。

次回「第１６話　合同数」

〜〜

第１６話　合同数（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は・・・手紙の主は私である事を証明した。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１６話　合同数

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第16話　合同数

「は・・・　はわわ～」

「な、何コレ？　あの手紙と、一緒じゃない・・・」

「ね？」

部長が勝ち誇ったような笑顔を浮かべている。

私はポケットに入れていた【ｆｒｏｍ　Π】のラブレターを取り出す。中の便せんを取り出し、今一度それを見ると・・・　全く同じ事が書かれていた。

「な・・・　何で！？」

「はわわ～　同じ手紙が2通です～」

「どちらもピタ子が書いた手紙って事さ」

嘘よ！　ありえない！！

「・・・　・・・」

2通の手紙を見比べる同じ。いっけん同じに見えるが、唯一違う点がある。

「う、裏に・・・　【ｆｒｏｍ　Π】ってないわよ？」

「でも一字一句違わず、手紙の内容は同じ・・・　でしょ？」

確かにそうだ。驚くべき事に、筆跡も全く同じ。

私のラブレターと【Ⅱ】からのラブレター・・・　違うはずなのに中身が一緒って？

頭の中がさらに混乱する。

「嘘よ！　絶対、嘘！　何か・・・　亡霊の陰謀よ！！」

「はわわ・・・」

デカルトちゃんのセリフをとってしまった私。それほどパニックの極みだ。

「今思うと、ピタ子らしい手紙だわ～」

「嘘・・・　何で？」

「ピタ子の好きな数字が書かれてあるの・・・　わかる？」

「数字？」

「この手紙の中に出てくる数字が３つあるけど・・・　言ってみて。

漢数字以外ね」

「えっと・・・」

手紙を見渡すと・・・

「5と13と・・・　1？」

「いんや。13分の1分前だから、12だね。
5と12と13。何か浮かばない？」

これは・・・

「5の2乗プラス、12の2乗イコール・・・　13の2乗。
ピタゴラス数？」

「ね？　ピタ子らしい手紙ってワケ」

そう言うと部長はエロそうにニヤリと笑った。

「じゃ、ピタ子のブラ、貰うから～
これでパンティとセットでゲット～

あ、後でいいからさ。ブラもらうの」

まだパニック中の私・・・　え？　パンティも取った？　あれ？
どさくさに紛れて部長・・・

手紙のことは全く理解出来ないけど、部長が正真正銘の変態だという事だけは理解した。

「で、でも・・・　何がいったい・・・？」

「はわわ・・・　こ、これはやっぱり・・・　亡霊の仕業です～」

「さて・・・」

混乱する私とデカルトちゃんをよそに、サンジェルマン理事長が声を出した。

「君達の謎は・・・　もう１つ、これを解く事で全て明らかになる」

そういうと理事長は、私達の目の前に１枚の紙切れを出した。そこには・・・

「直角・・・　三角形？」

＞ｉ３７１０７―２４３０＜

直角三角形が描かれており、その三角形の中には【１５７】という数字がある。斜辺、すなわち１番長い辺のところには【ｘ】と書かれていた。

「合同数というのをご存じかな？」

理事長は私の目を見て尋ねる。

「・・・　はい・・・」

知ってる。

３辺の長さが全て有理数の時、面積が自然数ｎとなるならば・・・

その自然数ｎを合同数という。定義自体は簡単だし、何よりも私

の嫌いな無理数が出てこない。

例えば、ピタゴラス数として知られる（3，4，5）。これらを3辺とする直角三角形は、斜辺が5，他の2辺は3と4。

＞i37109―2430＜

面積は底辺×高さ×（1／2）の公式で

3×4×（1／2）＝6

と出る。だから自然数6は合同数だ。あと、ちょっと難しいけど5も合同数として知られている。3／2，20／3，41／6も

（3／2）の2乗　＋　（20／3）の2乗　＝　（41／6）の2乗

私の、いわゆるピタゴラスの定理を満たすので、直角三角形の3辺になる事が出来る。面積は

（3／2）×（20／3）×（1／2）＝5

となるので、自然数5も合同数というわけだ。

「5と6は合同数だけど・・・
1，2，3，4は合同数でない事も知られているのよね」

部長が言った。

「では、この157は合同数かな?」

「ちょっと、すぐには・・・」

「はわわ・・・」

私とデカルトちゃんには応えられなかったが・・・

「１５７は合同数です」

部長は言い切った。

「どんな数が合同数になるかってのは、数学の中では未解決問題の１つ。
だけど奇素数の場合、８で割った余りが５なら・・・
その奇素数は合同数って知られているの。いわゆる十分条件の１つね」

むむ？　合同数の問題って、未解決問題なんだ？　そんな事も知らない私。

「１５７は素数で・・・　８で割ると余りが５。
だから、１５７が合同数だって事だけは確かよ」

エロトーク無しで私達に説明してくれる。頼りになる数学倶楽部の部長だが、相変わらず私の頭は整理がつかない。

「１５７は合同数か・・・」

理事長はニヤリと笑い、部長に質問した。

「では、ｘは？」

「・・・　そ、それは・・・」

言葉に詰まる部長。

「合同数とわかっていながら・・・
有理数である３辺の長さを出す事は容易ではない。
スーパーコンピュータを用いてもだ」

理事長が神妙な面持ちで語り出す。

「３辺が有理数で、なおかつ１５７を面積とする直角三角形は・・・
無限個ある事もわかっている。
なのに、その辺の長さはわからない。
不思議なもんだな。数字と言うのは・・・」

「・・・　・・・」

私達３人は、直角三角形を凝視する。

＞ｉ３７１０７―２４３０＜

「【生】とは何か？　【正義】とは何か？　【愛】とは何か？
【宇宙の起源】は？　【神】は存在する？

この世界、答があるはずの疑問は数多い。
それこそ真実は無限にあるはずなのに・・・」

「・・・　・・・」

「ところが、それらの答え1つ見いだすことすら容易ではない。
ふふ。この【x】・・・

そんな現実を皮肉っているようだ」

何が言いたいんだろう?

「あの・・・　理事長。私を呼び出したのは、いったい・・・?」

「その理由は明確だ」

理事長は私をじっと見つめた。

「君に、この【x】を求めて貰いたい」

「え?」

私に?　何故?

「あの・・・」

私に変わって、部長が理事長に質問した。

「合同数を求めるのは、高度な数学理論を要します。
何故【現代組】の生徒ではなく、【古代組】のピタ子に・・・?」

おっしゃる通り。

「この【x】が有理数だからだ」

理事長は即答する。

「え？」

「合同数の世界は、有理数だけで構成される。
【現代組】の生徒は実数ありきで計算し、【x】にたどり着けないだろう。

むしろ有理数しか知らない・・・
ましてや直角三角形のスペシャリストと言われる・・・」

「・・・　・・・」

理事長の視線が、私に突き刺さる。

「ピタゴラス君。君がこの【x】を求めるのにふさわしいと思ったんだ」

「・・・　・・・」

わ、私が？

「ピタゴラス君。底辺と高さが1の直角三角形の斜辺を求めるより・・・

この【X】を求める方が、君には適した仕事だ。

そうは思わないか？」

思わないけど・・・

「あの・・・　理事長・・・」

私は今の心境を正直に伝える事にした。

「正直私・・・　その・・・　あの手紙にあるように私は・・・
ルブラン君の事が好きでした。

今はまだ、ルブラン君の死をまだ受け入れられなくて・・・
【X】を求めるような心境に・・・　なれません・・・」

「ふふ・・・」

理事長が不敵な笑みを浮かべる。

「　？　」

「全ては・・・　この【X】にある」

「はい？」

何？　どういう意味？

「来たまえ。３人ともだ」

理事長は立ち上がると・・・　私達3人を、部屋の奥へと呼び寄せた。奥にはカーテンがかかっているところがあり、理事長はそれを開ける。

「・・・　何？」

カーテンの向こうには、大きな段ボールがあった。

「中を見せてあげよう」

そう言った理事長は、手際よく段ボールを止めていたガムテープをひきちぎる。そして・・・

大きな球体が私達の目の前に現れた。直径が1．５mぐらいだろうか？　その球体は銀色の美しい表面で覆われ、下側には何か機械じみたものが見える。パッと見では・・・　何かの乗り物みたいな？

「はわわ・・・」

「何ですか、これは・・・？」

「・・・　・・・」

部長は無表情でそれを見つめている。まるで、この球体が何かを知っているみたいだ。

「これこそ・・・　神の贈り物だ・・・」

「え！？」

（第17話へ続く）

第１６話　合同数（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

私は何が何だかわからないまま、【x】を求めるように言われる。

そしてこの【x】がわかれば・・・

なんとルブラン君が・・・？

次回「第１７話　神の贈り物」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１７話　神の贈り物（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は・・・　数学の問題を私に出す。これを解けば、全ての謎を解けるというが・・・？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１７話　神の贈り物

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第17話　神の贈り物

聖フィロソフィー学園・・・　サンジェルマン理事長【神】を口にした。

「はわわ・・・」

「・・・　・・・」

「神の存在を・・・　理事長は認めるという事ですか？」

私達を代表して、部長が質問する。

「言ったろ？　全ては【ｘ】にある・・・　見ろ」

理事長は球体の真上を指さした。そこには直角三角形が描かれており、その三角形の中に【１５７】と書かれている。

＞ｉ３７１０７―２４３０＜

「こ、これ・・・　さっき理事長が紙に書いたのと同じだ・・・」

斜辺に【ｘ】と書かれているところも全く同じ。そして・・・

「テンキー？」

電卓のような数字配列のキーが、三角形の横にはあった。

【７】【８】【９】
【４】【５】【６】
【１】【２】【３】
【０】【↑】【↓】
【＋】【－】【×】
【／】【※】【Ｅｎｔｅｒ】

【０】から【９】までの１０個のキーと、２つの矢印キー。そして【＋】【－】【×】【／】の四則演算キーと、【Ｅｎｔｅｒ】・・・あとは、よくわからない【※】キーが１つ。計１８個。

「この球体は、先月・・・　アララト山の、とある場所で発見された。
複数の付着物を、カーボン１４という年代測定法で調べたが・・・

年代はバラバラ。
最古のものは、紀元前２３７０年プラスマイナス８０年」

「そ・・・　そんな昔!?」

思わず声をあげた私。紀元前２０００年もの昔に、こんな綺麗な球体があるなんて・・・　絶対ありえない。

「最近のものだと、今から２０数年前という奇妙な結果が出ている」

「はわわ・・・　不思議な物体です～」

「オーパーツ・・・」

部長が呟いた。

「な、何？　オーパーツって？」

「【Ｏｕｔ　ｏｆ　ｐｌａｃｅ　ａｒｔｉｆａｃｔｓ】。場違いな出土品って事。つまり・・・」

部長は理事長室にあるガラスケースを指さす。

「その年代のテクノロジーでは作り得ない、存在し得ない物の事」

そう言えば・・・　理事長は世界中の珍しい物を集めるのが趣味と聞いた事がある。このガラスケースの中にある物って・・・

「オーパーツ？」

「私はある研究機関の依頼を受け、この球体の材質を調べた。ところが、この合金・・・

地球上にあるどんな技術をもってしても、生成し得ないものだった」

「はわわ・・・」

「げ、現代でも・・・　作り得ない？」

「正真正銘の・・・　オーパーツ・・・」

「私への調査依頼はリミットがあってね。ちょうど3日。

これを譲り受けて、すでに1日が経過している。

明後日の夜には、これを送り返さねばならない」

理事長はその球体を右手でさすっている。

「ピタゴラス君！」

「は、はひ！！」

突然理事長に呼ばれた私は、声が裏返った。

「できれば明日までに・・・　この【ｘ】を求めて欲しい」

何故、【ｘ】に執着するの？

「あの・・・　その【ｘ】を求めると、何が起こるんですか？」

「実に不思議な金属で、Ｘ線による内部の様子もわかっている。

球体の中には、シンプルな構造の電子機器が内蔵されているようだ。

おそらくこのテンキーで、正しい【ｘ】を入力すれば・・・

この機械が起動すると思われる」

球体の外側で何かを操作出来るとしたら、そのテンキーしかない。

理事長の言う事が、正しいような気がしてきた。

「・・・　・・・」

「パソコンで、調べられないんですか？」

部長が理事長に聞いた。

「調べたさ・・・」

小さな溜息をついた理事長は、私達に問う。

「1澗という単位を？」

「1澗？」

何それ？　単位？

「デカちゃん知ってます～。1兆の1兆倍の、さらに1兆倍です～」

「一、十、百、千、万、億、兆、京、垓、
杼、穣、溝、澗・・・」

部長は、単位を数え上げてくれた。

「分母分子、ともに1澗×1澗の組合せを・・・
スーパーコンピュータに試させてみた。

ところが全て不正解。
この【x】は、さらに上の単位で答を持っている事が判明した」

「な・・・」

日本のほこるスーパーコンピューター【京】（けい）。１秒間に１京以上もの計算をこなしたと認定されている。１秒間に１京もの計算が可能だとして、１澗もの計算をさせるには・・・　１京の１京倍の１万倍の秒数かかる事になる。

それを時間に換算すれば・・・

「３兆年かかるです～」

デカルトちゃんは、暗算が得意だ。

「３兆年って・・・」

呆然とする私。

「宇宙年齢は、約１３７億年と言われてるけどね」

部長が追い打ちをかける。

「無理！！　無理でしょ！？　スパコンでも３兆年かかる計算を・・・

私が２４時間で！？　絶対無理！！」

それに・・・

「仮にこの【ｘ】を求めたとして・・・　この機械が動いたとして・・・

その先に、何があるっていうんです！？」

思わず逆ギレ気味に、理事長につめよった。

「これで3度目だ。その先には・・・　全てがある」

「意味、わからないです～」

「僕の仮説が正しければ・・・」

「　？　」

不意に部長が急に語り出す。

「この機械が動けば、ルブラン君が・・・」

え？　なんで、ここでルブラン君が出てくるの？

「ルブラン君が生き返る・・・」

「えぇえええ！！！？？」

（第１８話へ続く）

第１７話　神の贈り物（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

部室に戻ってきた私達。ルブラン君の事を部長に聞くけど、はぐらかされてしまう。

【ｆｒｏｍ　γ】の手紙には、謎の数字【１７２９】が書かれていた。

それが何と、【ｘ】を求めるための・・・

次回「第１８話　インドの魔術師」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１８話　インドの魔術師（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

校内放送で呼ばれた私は、ラッセルちゃんとデカルトちゃんと共に理事長室へ。そこで部長は、手紙の主が私である事を証明した。

混乱する私をよそに、理事長は数学の問題を私に出す。これを解けばルブラン君が生き返る・・・　部長はそう言った。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１８話　インドの魔術師

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第１８話　インドの魔術師

「ねぇ、部長。ルブラン君が生き返るって、どういう事？」

部室に戻ってきた私達。

「さぁ？　カマかけて言ってみただけだから・・・」

サンジェルマン理事長は・・・　部長の言葉を肯定も否定もしなかった。

「・・・　・・・」

実はルブラン君は脳死状態で、体はまだ生きているとか？　でも今朝、全校生徒の前でルブラン君の死を報告してるし・・・

あるいはあの機械の中に、死者をよみがえらせる薬がある？　まさかね。

「それにしても・・・」

謎が多すぎる。

「この手紙・・・」

【ｆｒｏｍ　γ】

理事長から受け取った【ピタゴラスに告ぐ】の手紙。この中には、

毎度のごとく便せんが1枚。その便せんの中には・・・

【1729】

とだけ書かれていた。

「何、コレ？　意味わかんない」

「【x】じゃない事だけは確かです～」

もう、ワケわかんない事だらけ。

＞i3710７―2430＜

この【x】が求められたら・・・

「ホントにルブラン君・・・　生き返るのかもよ」

部長はそう言うけど・・・

「死んだ人が生き返るなんて、ありえない」

私は死んだルブラン君を病院で見ている。

「ありえないです～」

全てを疑うデカルトちゃんでも・・・　死んだ人が生き返るなんて、思ってはいない。

「まぁ、理事長曰く『全てはこの【x】にある』らしいからさ。

ピタ子、早く求めてよ」

そんな事言われても・・・

「暗算得意よね？　デカルトちゃん」

「デカちゃんでも～　さすがにこんな大きな数、無理です～」

だよね。スパコンでも計算出来ないんだから・・・

「僕、思うんだけどさ。
まず攻めてみるのは、この【１７２９】だと思うよ」

部長はテーブルの上に広げられていた便せんを指さした。

「はい、デカ子！　素因数分解！」

「１７２９は～　７かける１３かける１９です～」

「うわ・・・　絶対素数だと思ったのに。
僕のカンもにぶったな～。う～ん・・・」

【現代組】の生徒達は、まず素数を疑う・・・　有名な話だ。

ガラガラ・・・

不意に部室の扉が開いた。そして１人の生徒が入ってくる。

「ラ、ラマヌジャンちゃん！！」

部長が驚いたような声をあげた。

「こんにちは、ラッセルちゃん」

ブラパラ事件で唯一、ブラジャーをはぎ取られなかった子。美しい黒髪に、これまた美しい黒目の女の子。

「ピタゴラスちゃんにデカルトちゃんも・・・　お久しぶり」

「え？　あ・・・　お久しぶり？」

「はわ？」

昨日と何か雰囲気が違う。何か今日は・・・　友好的なオーラ、出てない？

「な、何しに来たの！？」

やや焦り気味で喋る部長。どうもラマヌジャンちゃんは、苦手らしい。

「うん・・・　私、最近体の調子が悪くて・・・
明日、田舎に戻るの。

だから自分の物、取りに来たの」

そう言うと彼女は・・・

【ナマギーリ女神の、おかげです】

という、習字作品をはぎ取った。そして部屋を出て行こうとする。

「はわ!?　それを取りにきただけですか～?」

デカルトちゃんが声をかけると

「うん。昨日で、本は持ち帰ったから・・・　今日はこれだけ」

元気なさそうに応えたラマヌジャンちゃん。

「　?　」

ふと机の上にある物を見て、彼女はよってくる。

「せんななひゃく・・・　にじゅうく・・・・」

【1729】

例の手紙を見て呟いた。

「あ?　これ?　素数でもないし、つまらない数なんだけどさ・・・」

部長が言うと・・・

「そんな事ない・・・　とっても神秘的な数だわ」

え?

「どこが?」

「1の3乗たす12の3乗は1729だし・・・
9の3乗たす10の3乗も1729」

「確かにそうですけど～」

暗算の得意なデカルトちゃんだけが頷いている。

「この数字は、2組の異なる2つの立方数の和で表す事ができる・・・
最小の数ですわ」

え？　そうなの？　1729がその・・・　なんたらの最小数？

「はわわ～　デカちゃんでもわかんないです～」

「・・・　・・・」

「【現代組】ではこの子、【インドの魔術師】の異名を持ってるからね。
僕の知る限り、数字の感覚は世界一よ」

「インドの魔術師？」

部長が世界一というぐらいだから・・・　ホントにすごい子なんだ。

「でもね、この子・・・
数々のすごい公式発見してくれるのはすごいな～って思うんだけど・・・

証明はしてくれないのが、玉にキズなのよね～」

「・・・　・・・」

ラマヌジャンちゃんは、無言で手にもっていた物を広げて見せた。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

そして弱々しく、ニコッと笑う。

「・・・　・・・」

なんだか、独特の空気を持ってる子だ。

その時！！

私の中に何かがひらめいた。

「じゃぁ、みなさん。ごきげんよう・・・」

「ちょっと待って！！」

出て行こうとするラマヌジャンちゃんを引き留める。

「ひょっとしてあなた・・・　この【X】、わかったりしない？」

私はラマヌジャンちゃんに、理事長からもらった直角三角形の図を見せた。

「どう？　合同数の問題なんだけど」

「合同数・・・　・・・・」

ラマヌジャンはじっとそれを見つめたあと・・・

「・・・　・・・・」

私を見つめ、こう言った。

「２１６垓、６６５５京、５６９３兆、
７１４７億、６１３０万、９６１０分の・・・
４１１３垓、４０５１京、９２２７兆、
７１６１億、４９３８万、３２０３」

「え？　え？　ちょ・・・」

「はわわ・・・」

「嘘・・・　でしょ？」

まさか、【ｘ】をいい当てた？

「ちょっと待ったぁ！！」

部長が大きな声をあげる。

「理事長が言うには、この【ｘ】・・・
１澗、すなわち１兆の１兆倍の１兆倍の数字を超えてるのよ。

1垓は、1兆の1億倍。今のは【x】じゃないわ!!」

確かにそうだ。でもラマヌジャンちゃんは、弱々しく笑って言い返す。

「私が言ったのは、【x】じゃなくて、ここの数・・・」

そう言うと彼女は・・・　直角三角形の斜辺じゃなく、底辺の方を指さした。

「な・・・何で？　何でわかるの!?」

「・・・　・・・」

ラマヌジャンちゃんは、無言でそれを広げて見せる。

【ナマギーリ女神の、おかげです】

「いや・・・」

それ？

「ま、まぁ・・・　この子は、不思議ちゃんだから・・・」

苦笑いする部長。私はラマヌジャンに視線を合わせ

「でも、そこがわかるなら・・・　【x】もわかるって事でしょ？」

そう尋ねる。

「もちろん。でもそれは・・・　あなたが考えるべきですわ」

「ど、どうして!?　ここまで来たら・・・
ズバリ教えてもいいじゃない!?」

ラマヌジャンちゃんは、やっぱり弱々しく笑った後・・・

【ナマギーリ女神の、おかげです】

を広げて見せた。

「・・・　・・・」

「・・・　・・・」

「・・・　・・・」

部長もデカルトちゃんも一斉に固まる。意味わかんないけど、説得力を感じるのは何故だろう?

「それじゃ私は、さよならですわ・・・」

「あ・・・　ちょ・・・」

ラマヌジャンちゃんは、そのまま部室を出て行った。

「ま、待って・・・」

追いかけようとした私の肩を、部長が捕まえる。

「ピタ子。大丈夫。
1辺の長さがわかれば・・・　面積からもう1辺の長さも出る。
でしょ？」

「う、うん・・・」

「あとはあんたの専売特許で、【x】出せるじゃん」

その通りだ。面積がわかってる直角三角形はどこか1辺でもわかれば、残り全てを計算できる。そう・・・

【ピタゴラスの定理】で！！

「そ、そうよね。じゃぁ、早速計算するわ！！」

意気揚々で紙と鉛筆を用意し・・・

「・・・　・・・」

そのまま固まる。

「どした？　ピタ子？」

「・・・　何だっけ？」

「何が？」

「さっき、ラマヌジャンちゃんが言った数字・・・」

「あ・・・」

あんな長い数、1度聞いて覚えられるわけがない。

「や、やっぱりもう1度ラマヌジャンちゃんを呼び出し・・・」

その時

「２１６垓、６６５５京、５６９３兆、
７１４７億、６１３０万、９６１０分の・・・）

４１１３垓、４０５１京、９２２７兆、
７１６１億、４９３８万、３２０３です～」

「え？」

「で、デカ子？」

「はい～。デカちゃん、ちゃんとメモってました～。ほら～」

そう言うと、ものすごい長い数字の分数が書かれている用紙を見せた。

何とデカルトちゃん。たった1回しか言わなかった、ラマヌジャンちゃんの言った数字を・・・　全てメモっていたのだ。

「デカした、デカ子！！！」

「きゃ～、デカちゃん、褒められると伸びる子です～」

この子は抜けているようだけど・・・　要所を締めるタイプだ。

「よし！　ご褒美に僕が・・・　おっぱいを大きくしてあげよう！」

大きなヤマを超えたからだろう・・・

「きゃ～！！」

目の前の2人は、いつもの2人に戻っていた。

ラマヌジャンちゃんが嘘をついていたか、あるいはデカルトちゃんのメモが間違ってない限り・・・

【x】を求める事は出来る。

先にバラしちゃうけど、ラマヌジャンちゃんもデカルトちゃんもミスはなかった。つまりあの数字は正しいものだ。

そうとなれば・・・

さっと【x】求めて、すぐにでも理事長の元へ行こう。

そう思っていたんだけど・・・

（第19話へ続く）

第１８話　インドの魔術師（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ついに【Ｘ】を求めた私。理事長室にあった、あの球体にその数字を入力する。

すると・・・

次回　「　第１９話　　【Ｘ】、そして球体の正体　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第１９話　【ｘ】、そして球体の正体（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えのない私に、理事長は数学の問題を出す。

私はラマヌジャンちゃんのヒントを足がかりに・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第１９話　【ｘ】、そして球体の正体

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第19話　【x】、そして球体の正体

サンジェルマン理事長から、【x】を求めるように言われて24時間後。

3月26日。金曜日だ。

私、以下2名は理事長室にいた。

「【x】を求めた？」

理事長が聞き

「はい」

私が応える。

「・・・　・・・」

意外と手間がかかった。1辺の長さがわかれば、面積からもう1辺の長さはすぐにわかる。でも、2辺の平方和をとる作業は・・・かなりの重労働だった。

最初、コンピュータにやらせようと思ったんだけど・・・　あれだけの桁数、しかも分数計算となると、コンピュータもオーバーフローを起こしてしまう。結局、手計算で頑張ったんだけど・・・

2つの巨大な分数を平方して、通分して、和をとって、足して、約

分して、ルートをとる作業・・・

「では・・・」

徹夜してなおかつ、ついさっきまで計算して、ようやく【ｘ】を求める事ができた。暇な読者がいれば、あの【ｘ】を是非とも求めて欲しい。ＰＣをもってしても、簡単に出せる代物ではないわよ。

理事長と私達は、あの球体の元へと歩み寄った。理事長はテンキーの前に手をかざすと

「その数字、まずは分子から言いたまえ」

「桁を言うとわかりづらくなるので・・・　数字をそのまま言います」

「わかった」

「２２４４０３５１７７０４３３６９６９９２４５５７５１３０９０６６７４８６３１６０９４８４７２０４１」

自分で言ってて、どんな単位かもわからない。後で部長から聞いたら【極（ごく）】って単位なんだって。そんな単位、聞いた事無いんだけど？

理事長はその数字を打ち込み、【／】（スラッシュ）キーを押した。

「では、分母を」

「８９１２３３２２６８９２８８５９５８８０２５５３５１７８９６７１６３５７００１６４８０８３０　です・・・」

それにしても、この【ｘ】・・・　無限にあるらしい。最も簡単な解でも、これだけの恐ろしい有理数が出てくる。ならば、他にある無限個の解は・・・

考えるの、ヤメておこう。

「・・・　・・・・」

理事長は慎重に数字を打ち込んでいく。そして・・・

【Ｅｎｔｅｒ】キーを最後に押した。

「・・・　・・・・」

「・・・　・・・・」

「・・・　・・・・」

緊張の時が流れる。そしてその時はきた。

音も立てず、その球体のテンキーの下側・・・

大きな円の穴が開いたのだ。

「・・・　・・・・」

その場にいた全員、息をのむ。

正面から見ると球体の横側・・・　といっても球だから、どこが横っては言えないんだけど・・・

テンキーの下側が半径１ｍぐらいの円となり、穴が開いている。誰が見ても入り口だ。そこから球体の中を覗くと・・・　小さなパネルみたいなのが見えるだけで、イスもなければ柱なんかも見あたらない。

「や・・・　やった！！！」

ようやく声をあげたのは私。

「す、すごいです～　はわわ～」

「・・・　・・・・」

「・・・　・・・・」

部長と理事長は沈黙していたけど・・・　難しい数学の問題を１つ解いたというのは、私にとって素直に嬉しい。

ひとしきり喜んだ後は・・・　あの言葉が気になった。

【この機械が動けば、ルブラン君が生き返る】

部長は確かにそう言った。もうすぐ、その言葉の真相がわかるはずだ。

「で？　理事長、この後は？」

私は理事長に声をかける。

「・・・　・・・・」

球体を呆然と見つめている。

「理事長?」

「え!?　あ、あぁ・・・　この後だな・・・」

放心状態だった理事長が、ようやく私の声に応じた。

「・・・　・・・・」

左手の拳を丸め、それを鼻っ柱にあてる。

「・・・　・・・・」

そして、何かを悩んでいるようだ。迷っているような表情を見せた後・・・

私に視線を合わせ、こう言った。

「我が子を・・・　救って欲しい・・・」

な・・・

「何ですって!?」

「何ですって!?」

「はわわ～」

デカルトちゃんだけは、ハモれなかった。

「我が子、ルブランを・・・　君達なら救えるはず・・・」

ちょ・・・　まさかの衝撃の事実。ルブラン君は、サンジェルマン理事長の子供!?

「ル、ルブラン君の・・・　お父さん?」

呆然とする私は、理事長に聞いてみる。

「そうだ。ルブランは、私の子だ」

「・・・　・・・」

それを理解するのに、私達3人はしばしの時間を要した。

「ルブラン君を・・・　救ってくれ?」

何とか親子関係を受け入れた私は、次の質問をする。

「あぁ」

「ちょ、ちょっと待ってください、理事長。
すでに死んだルブラン君を救えっていわれても・・・」

混乱の極みにいる私の言葉を遮って、部長が声をかけてきた。

「ピタ子、まだわかんないの？」

「な、何が？」

「デカちゃんも、何が何だか～」

部長だけは・・・　【何か】がわかってるようだ。

「コレに乗ってさ・・・　２日前に戻るのよ」

そして、あたかもそれが当たり前のように言ってのけた。

「ですよね？　理事長？」

部長が理事長に言葉をかけると・・・

「・・・　・・・」

理事長は無言で頷いた。

「え？　え？　何？　２日前に戻るって？」

って事はまさか・・・　この球体って・・・

「タイムマシン！？」

「タイムマシン！？」

最初で最後・・・

私とデカルトちゃんは、綺麗にハモった。

（第２０話へ続く）

第１９話　【x】、そして球体の正体（後書き）

〜〜

次回予告

あの球体がタイムマシン！？　そんな事、信じられるわけがない。
まずは乗ってみようと、部長が言った。過去へ行けなければそれでおしまいとい諭され、私達はその球体の中へと入って行く。

そして・・・

次回　「　第２０話　　時空を超えて　」

〜〜

第２０話　時空を超えて（前書き）

〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えないのに、なんで！？

そして私達は・・・　理事長室で、ある球体の前に立つ。

何とそれは・・・

〜〜〜

第２０話　時空を超えて

第２０話　時空を超えて

私とデカルトちゃんは・・・

その球体がタイムマシンという事を、受け入れる事がなかなか出来ない。

ただ、タイムマシンの存在を認めてしまえば・・・

これまでの不可解な事は、説明がつくような気がする。

「つまりこのタイムマシンで、過去に戻り・・・
交通事故に遭うはずのルブラン君を・・・　助けろと?」

まだ半信半疑の私。いつからか敬語を忘れている。

「その通りだ」

理事長は言いきった。

「はわわ～　デカちゃん、思うんですけど～」

タイムマシンを受け入れられないもう1人・・・　デカルトちゃんが声をかけてくる。

「ルブラン君のお父さんが理事長なら～
理事長自身が、子供を助けに行くべきでは～

ないでしょうか～？」

冷静に考えれば、もっともな意見だ。だが理事長はクビを横に振る。

「出来る事ならそうしたい。だが私は・・・

２日前、君達を見た。ルブランが車にひかれる日の朝・・・

君達３人が、学校の屋上で楽しそうに話しているのを・・」

そういえば理事長・・・　一昨日部室の前で会った時、そんな事言ってた。

「しかしその日の午後、君達に会った時・・・

朝に３人でいた事実はないという」

実際、その朝はみんなバラバラに登校している。

「デカちゃんは、お昼過ぎに登校しました～」

「朝には、いるはずのない君達を見て・・・　昼にはそれが届いた・・・」

理事長の視線の先には、あの球体・・・　タイムマシン？　がある。

「そしてその日の夕方には・・・

私は手紙を渡すピタゴラス君にも出会っている」

えっと・・・

「【ｆｒｏｍ　θ】の手紙だ。下手な変装をした君が渡した」

あ～・・・　あれか。

「あの時、私はこう思った。
きっと君達３人は・・・

我が子を救うため、未来から来たのだと・・・」

「なるほど・・・」

部長だけが頷いている。私とデカルトちゃんは、今なお理事長の話を飲み込めない。飲み込めないけど・・・

「えっと・・・　２日前、未来から来たであろう私達を見たから・・・
今からコレに乗って、過去へ戻れと・・・

おっしゃってる・・・　んですね？」

この乗り物がタイムマシンという前提で、私は理事長に聞いた。

「・・・　・・・・」

理事長は無言で頷く。

「で、でも・・・」

「あのさ～」

私の言葉を、部長が遮る。

「ピタ子、言ってたじゃん」

「え？」

「ほら、ラブレターの件で・・・・」

【私が盗まなければ・・・
ルブラン君は公園に行っていた。交通事故にも遭わなかった！！！】

「ってさ」

た、確かにそうは言ったけど・・・

「チャンスじゃない？　自分の過ちを正す。
愛しのルブラン君をこの世に戻す・・・　ね？」

「う、う～ん・・・　それは、そうなんだけど・・・」

私の視線は【タイムマシン】とやらを捉える。

「まずは乗ってみようよ。
デカ子もピタ子も、タイムマシンに懐疑的なんでしょ？」

「う・・・」

理事長のいる前で【うん】とは言いづらい。

「まぁ、表情見てりゃわかるって。
だからまず、コレに乗ってみてさ・・・
過去へ行けなければ、僕らにできる事は無い。
その時点で、この話は終わりって事でいいじゃん」

「・・・　・・・」

部長の言う事、一理ある。

「デカちゃん、難しい事嫌いです～。だから部長に賛成します～！
まずは、この乗り物に乗ってみるです～」

「そ、そうね。過去に行くなんて、考えられないけど・・・
まずは乗って、ダメならそこまで・・・　よね・・・」

「じゃ、ピタ子からどうぞ」

え？　わ、私？

「ルブラン君のラブレターを盗んだの、ピタ子でしょ？」

「う・・・」

で、でもさ・・・　自分で自分のラブレターを盗ったって事になるのよね？

それがルブラン君の死に繋がったって・・・　何か変じゃない？

「・・・　・・・」

考えれば考えるほど、余計わからなくなる。

「わ、わかったわよ・・・」

もし過去に行くことが出来れば、全ての謎が明らかになるのかもしれない。

「行けばいいんでしょ」

まずは行動してみよう。思考はその後。

「ほら、リュックも忘れずに」

部長がリュックを手渡した。

「・・・　・・・」

それを背負った私は、理事長と視線を合わせる。

「これを持って行くといい」

理事長が1本の鍵を渡してくれた。

「本校のマスターキーだ。校内なら、どの部屋も開ける事が出来る」

「・・・　・・・」

鍵を受け取った私は・・・　球体の横に開いた円から中に入る。

「・・・　・・・・」

直立だと頭がぶつかっちゃうけど・・・　ちょっとかがむ程度で、立ったまま中に入る事が出来た。

「わ・・・」

外からは銀色の表面だったけど、中から見ると・・・

「外が見える・・・」

何て言うか、全面ガラス張りみたいな感じ。

「お!?　マジックミラー号みたい！　いいね～
興奮するね～　らっせる　らっせる～！」

セクハラオヤジが2番目に乗り込む。

「はわわ～　中からは外が丸見えです～　不思議です～」

そして3人目はデカルトちゃん。直径1．5mぐらいの球の内部・・・　狭いけど、3人ぐらいなら入れる。無理すれば、あと2人ぐらいは入れそうだ。

「どれどれ・・・」

球体の中にある物といえば・・・　中央にある小さなディスプレイと、その下にあるキー群。キーの横や球体上部には、いくつかパネルのようなボタンのような物もある。

【7】【8】【9】
【4】【5】【6】
【1】【2】【3】
【0】【↑】【↓】
【±】【−】【×】
【／】【※】【Ｅｎｔｅｒ】

球の外にあったのと同じヤツだ。興味津々の部長が、まっさきにパネルに触れる。

「なるほどね。シンプルでいいわ・・・」

【□□□□□】【□□】【□□】【□□：□□：□□】

小さなディスプレイの1番上には、こんな表示がある。

「・・・　・・・」

それらを見つめる部長。

「こういうのはね、説明書なんかなくても操作出来るってのが基本なのよ・・・」

「根拠は？」

「ない。けど、難しい機械ほど、それがあるべき姿。
数学だってさ・・・

難しい記号に見えて、実は一番シンプルな記号を使ってるもんね。

デカ子、扉閉めて」

「は、はい～・・・」

デカルトちゃんは、開いた扉を閉めようとするが・・・

「スイッチがないです～」

「・・・　・・・」

私は天井にある小さなボタンを見つけたので

「こ、これかな・・・？」

押してみた。すると音も立てずに、扉が閉まった。

「はわわ～　Pちゃん、正解です～」

なるほど。直感に従えば・・・　それが正しいのか。

「さて。今日は3月16日だから、2日前だと・・・」

パネルを操作した部長は

【□★▲■●】【□3】【14】【□□：□□：□□】

今年の西暦と、月日を入力する。

「時間、どうする？」

部長は自信満々だが・・・　そんな入力でいいのだろうか？　まぁ、２日前に行けるなんて、未だに半信半疑だけど。

仮に行けたとして

「・・・　・・・」

ルブラン君を助けるには・・・

「何をすれば正解なんだろう？」

「僕もわからない。その場の状況で判断するしかないね、今のトコは。

ピタ子。２日前、何時に登校した？」

「えっと・・・　朝の６時４５分ぐらい」

「はわわ～　デカちゃん、爆睡中の時間です～　そんな時間に登校なんて～」

【□★▲■●】【□３】【１４】【□６：３０：００】

そう入力した部長は

「多分コレで・・・」

【Ｅｎｔｅｒ】キーを押した。

「ちょ・・・　心の準備が・・・」

【Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？　（Ｙｅｓ　／　Ｃａｎｃｅｌ）】

ディスプレイにそう表示され、【Ｃａｎｃｅｌ】の方が暗転している。ＰＣなんかでよく見る画面だ。

「そ、そうよね・・・　確認画面出るのが普通よね。
ねぇ、部長。少し深呼吸してから・・・」

私のセリフの途中で部長は・・・

【↑】【Ｅｎｔｅｒ】と、押した。

「ちょ・・・」

「・・・　・・・」

「迷いは禁物！！　過去へＧｏ！！！」

「・・・　・・・」

「・・・　・・・」

何も感じない。

「あれ？　慣性の法則的なもの、感じないわね？」

部長がポツリという横で・・・

「はわわ～　失敗です～」

「何にも動いてない・・・」

この乗り物の中からは、外が丸見えだけど・・・　外の様子も全く変わり映えしない。

「失敗ね」

そう言った私は、天井のボタンを押した。音も立てずに扉が開く。

「う～ん。おかしいな～。
グラヴィトンだけは、ブレーンを飛び越えるから・・・

絶対【G】が、かかるはずなんだけど・・・」

ソーカルちゃんみたいな事を言う部長を置き去りにして・・・　私とデカルトちゃんは、球体の外に出た。

【やっぱりダメでした、理事長】　そう言おうと思ったのに・・・

「あれ？　理事長は？」

「はわわ？　どっか行っちゃいましたです～」

理事長室の出入り口に目をやると、ドアが閉まっている。いや・・・

「鍵、かかってる・・・？」

「はわ？　何か変です～」

チュンチュン・・・

「そう言えば・・・　電気が点いてない・・・」

窓から差し込む強い日差しのおかげで気づかなかったけど・・・
いつの間にか室内の電気が消えていた。

「スズメの声が聞こえるです～」

何かがおかしい。私は窓際へ歩み寄ると、カーテンを開け・・・
外を見る。

「太陽が・・・」

低い位置にある。まるで今は・・・

「朝？」

「な～んだ。ちゃんと2日前の朝に来てるじゃん～
ラッセル　ラッセル～♪」

いつの間にか後ろに立っていた部長が、嬉しそうに笑っていた。

「嘘・・・」

今が2日前の朝？　嘘よ・・・　でも、どう見ても外は朝・・・

「ど、どうやって・・・　2日前の朝だと証明するの？」

思わず数学者のセリフを言った私。

「そんなの簡単よ。ピタ子、携帯持ってるでしょ？」

「う、うん・・・」

背負っていたリュックから、携帯を取りだした。

「表示、見てみなよ」

「・・・　・・・」

【3月14日（Wed）　06：31】

「な・・・」

思わず声をあげた。

「はわわ～！　デカちゃんの携帯も、一昨日の表示になってます～
しかも、午前6時31分です～」

「な・・・」

何てこと・・・？

「じゃ、じゃぁ・・・　私達は今・・・
過去の世界にいるって事!?」

「はわわ～」

「ラッセル　ラッセル～♪」

（第２１話へ続く）

第２０話　時空を超えて（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした私達。

部長は相対性理論の創始者、アインシュタインちゃんと仲が良く・・・

タイムトラベルに関しても、色々議論しているという。

私達はそんな部長のアドバイスを聞いて、行動する事にした。

次回　「　第２１話　　バタフライエフェクト　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２１話　バタフライエフェクト（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

3月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、目の前には何とタイムマシンが！

私、以下2名は・・・　ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２１話　バタフライエフェクト

第２１話　バタフライエフェクト

「えっと・・・」

一昨日と昨日と今日・・・　いや、今が１４日なら今日と明日と明後日になるのか？

１４，１５，１６日の着信履歴やメール内容が、全て携帯から消えている。

って事は完全に・・・

「過去に・・・　来た？」

まだ信じられないけど・・・

「ルブラン君が死んだ日の・・・」

朝？

「はい、みんな。集合～！」

部長が私とデカルトちゃんに声をかけた。例のタイムマシンの前に集まる私達。部長は表にある方のディスプレイを指さす。

【２３：５７：４３】【２３：５７：４２】【２３：５７：４１】・・・・・・

何？　カウントダウンしてる？

「は～い！　この意味は？」

「・・・　・・・・」

しばらく考える私。

「ひょっとして・・・　過去にいられる時間かしら？　２４時間？」

「ピタ子、ピンポーン！　多分だけどね。
つまり、僕たちがこの世界にいられるのは・・・　約２４時間」

「はわわ～・・・」

「僕、中も確認したけどさ。
中のディスプレイも、同じカウントダウンしてた」

「そ、そうよね。いつまでも過去にいるってワケには・・・
いかないって事よね」

「ただね～　それ以前に元の世界に帰ろうと思ったら、帰れそうだよ。
なんか、元の世界に戻りましょうみたいなボタンあったし。
だからこの世界にいられるのは、【最高で２４時間】って事だと思う」

「なるほど。最悪、明日の午前６時半までには・・・

タイムマシンには戻ってないと・・・　って事ね？」

「はわわ～　リミット付きのタイムトラベルです～」

ちょっと緊張気味の私とデカルトちゃんだけど、部長はけっこう明るい。

「まぁ、ジャックバ●ワーも２４時間あれば、国を救えるんだし。大丈夫っしょ！」

「あの、部長・・・　そういう固有名詞は、あまり出さない方が・・・」

「え？　何で？」

大人の事情です。

「質問です～　もしそのリミットまでに戻らないと～デカちゃん達、どうなるんですか～」

「さ～？　死ぬかも・・・」

部長はあっさり言った。

「は、はわわ・・・　し、死んじゃうんですか～？」

「ハッキリはわからない。
今いる過去の世界に、取り残されるかもしれないし・・・
時空の摂理を乱したという事で、存在自体消えるかもしれない」

「・・・　・・・・」

「タイムトラベルは、いろんなパラドックスを含んでるからさ。とにかく、事は慎重に運ぶべきね。

僕たちがこの世界にいること自体が、すでにありえない事だし」

う、う～む。過去や未来へ行き来するって・・・　映画やアニメみたいに、単純なものじゃないのね。

「はわ！？」

窓の外を見たデカルトちゃんが声を上げた。

「どした？　デカ子？」

「ぴ・・・　Pちゃんです～」

窓の外を指さすデカルトちゃん。部長と私はすぐにその方向へ視線を移した。

「わ、私・・・？」

1階にある理事長室の奥の窓からは、広いグラウンドが見える。そして視線の先には・・・　リュックを背負った私が、無表情で校舎に向かう姿が見えた。

「・・・　・・・・」

「お～　ラブレター渡す為に、超早起きしたんだね～　ピタ子、偉い！」

腕組みした部長は、窓の向こうの私を見ながら頷く。

変な感覚だった。私はここにいるのに・・・

視線の先にいるのも、明らかに私。とても現実世界とは思えない。

あ。

過去だから現実ではないのか？　もう、よくわかんない。

「そ、それで？　私達、どうすればいいの？」

まさか過去に来るとは思って無かったから、何をどうしたらいいのかわからない。頼れるのは部長だけだ。

「そうね。まずは確認しておくべき事を。
ルール1。なるべく過去の事象を乱さない」

「はわ？」

「どういう事？」

「バタフライエフェクト・・・　知ってる？」

知ってる。

「デカちゃん、知ってます～。

蝶の羽ばたきが、台風起こす～　みたいなヤツです～」

「デカ子、ピンポーン！
　小さな出来事が、未来の事を大きくかえてしまうってヤツね」

例えば何気に目の前に飛んできた蚊を、パチンと叩いて殺してしまったとして・・・　殺した蚊がメスだった場合を考えてみよう。蚊は1回の産卵で３００個ぐらいの卵を産み落とす（蚊の種類によっても違うけどね）。

と、いう事は・・・　このメス蚊を1匹殺したことで、近い未来産まれる予定だった３００匹の蚊も全て殺した事になるわけだ。それだけではない。

産まれる予定だった３００匹のうち、メス蚊も多く含まれるわけで・・・　それらたくさんのメス蚊が産む予定だった、2世代先の（３００匹）×（産まれる予定のメス蚊の数）だけの蚊も全て・・・

さらに3世代先の蚊、４世代先の蚊・・・

蚊の寿命は3～4週間程度だから、数世代先といっても遠い未来じゃない。1匹のメス蚊を殺した事で、未来に産まれる予定だった天文学的数値の蚊を殺した事になる。

これは現実的な例ではない事を注意しておくね。蚊やそれをとりまく世界はそんな単純ではないし、上のようなかけ算が簡単に成り立つわけじゃない。あくまでもバタフライエフェクトを説明するための極端な例だって事。

1つの小さな事が未来には大きな影響となって現れる・・・　それ

がバタフライエフェクトだ。

「僕たちの目的は、ルブラン君の事故を防ぐこと。でしょ？」

「うん」

「だからそれ以外の事で、過去を乱さない。
ちょっとの事が、のちのち収集がつかなくなる可能性もあるからさ」

「はわわ～　具体的には～　どうすればいいんでしょ～」

「ルブラン君の事以外では・・・
この世界の住人と、なるべく接触を持たない。とりあえずね」

何せ過去に来た経験なんて・・・　当たり前だけど、ない私達。

意外かも知れないが【タイムトラベル】も、立派な哲学の対象だと部長は言う。これまで哲学者だけでなく、物理学者や数学者なんかの間でも多くの議論がなされてきたし、今もなおそれは続いている。

「どんなルールが存在し、僕たちの行動1つがどれだけ未来・・・
僕たちにとって現在だけど、それにどれだけ影響を与えるかわからない。

だから極力・・・
僕たちはこの世界で、周りとの接触を最小限にするべきだと思う」

「うん・・・」

「わかりましたです～」

「でも部長・・・　タイムトラベル、くわしいのね？」

「そりゃそうよ。だって僕、アインシュタインちゃんと超友達だもん！」

【現代組】所属、物理の大天才アインシュタインちゃんは・・・
部長とすっごく仲がいいらしい。アインシュタインちゃんといえば、
【相対性理論】や【光量子仮説】で有名な超天才児。【光速度普遍の原理】から、【ブラックホール】【タイムトラベル】の事まで・・・

とにかくそんな部長がいるのは、とっても心強いって事。

【ルール1：過去の世界で、周りとの関わりを極力避ける】

「そしてもちろん・・・」

【ルール2：過去の状況を、なるべく変えない】

「ルブラン君を救うこと以外でね」

「うん」

「わかったです～」

「で？　これからどうすれば？

過去の私は、教室にリュック置いた後・・・

ルブラン君の靴箱に向かうわよ。あと１０分ぐらいで」

もともとルブラン君が、交通事故に遭うきっかけは・・・

「私が、ルブラン君の靴箱に入っていたラブレターを盗って・・・

あれ？」

待ってよ？　そういえば・・・

「ルブラン君の靴箱に・・・

私より先に、あの手紙入れたのって・・・　誰？」

「・・・　・・・」

部長が黙っている。

「多分・・・」

多分？

「ピタ子、あなたよ。今の・・・

この世界からしたら、未来のピタ子が・・・

過去のルブラン君の靴箱に、手紙を入れたんだよ」

え？　おかしくない？

「だってルブラン君の靴箱に、あのラブレターが入ってなければ・・

・」

過去の私は、普通に自分のラブレターを入れるだけ。

「先にラブレターが入ってたから、思わず盗って逃げて・・・
靴箱は空っぽになった」

結果、ルブラン君は手紙で指示したポール公園には現れず、自宅近くで交通事故に遭った。

「だったら、未来から来た私が・・・　過去の自分を邪魔したって事？
それって、パラドックスじゃない？」

「デカちゃんもそう思います～」

「・・・　・・・」

部長は眉をひそめた。

「かといって・・・　このまま何もせず、現在に戻っても・・・
ルブラン君が生き返っているハズがない・・・」

この謎には・・・

「何かの答えがある。
僕達は、その答えを探さなければいけない・・・
そんな気がする」

「・・・　・・・・」

エロセクハラキャラは微塵も見せない部長。

少なくとも今の私達は、その答えが何なのかはわからない。それ以前に、本当に答えとやらがあるのか・・・　それさえもわからない。

「早速、タイムトラベルパラドックスに直面か・・・」

部長は悩んだ表情を見せたが

「でも、過去の状況をなるべく変えてはいけない・・・ルールに従おう。

ピタ子・・・　手紙をルブラン君の靴箱に入れるべきよ」

そう言った。

「でも・・・」

「でなきゃ、僕たちがここにいる理由がない。おそらく僕たちは、色々試される。

場面場面で、どこまで適切な判断が出来るか。ある意味、哲学者として試されている気もする・・・」

ホントに？

「とにかく、まずは手紙を靴箱へ！　急いで、ピタ子！！」

「う・・・　わ、わかった・・・」

真剣な部長の迫力におされた私。リュックから【ｆｒｏｍ　Π】の手紙を取り出した。

「そっちじゃない。１番最初に、ピタ子が書いた方の手紙よ」

「え？　どして？」

「今ここで、１番最初の手紙の裏に【ｆｒｏｍ　Π】を書くの。でなければ、２番目の手紙・・・

【ｆｒｏｍ　Π】の存在自体がおかしくなる」

「はわわ～？」

つまりこういう事だ。今、私の手元には2通のラブレターがある。

１つは最初に私が書いた大元のラブレターで、裏には何も書かれてない。もう１つはルブラン君の靴箱で見つけて、思わず盗(と)っていった・・・　裏に【ｆｒｏｍ　Π】の書かれているラブレター。

中身は全く一緒だけど・・・

そのまま2番目の【ｆｒｏｍ　Π】を出しちゃうと、誰が【ｆｒｏｍ　Π】を書いたのかという話になる。いわば誰もそれを書いておらず、パラドックスが生じるわけだ。

だから、裏に何も書かれてない方の手紙に・・・

「こ、これでいいのよね？」

今、【ｆｒｏｍ　Π】を書いた。

そうすればつじつまが合う、というのが部長の主張だ。正直私、部長にそう説明されても混乱してる。

「うん、それでＯＫ。さっきも言った通り僕らは・・・
時空の狭間で、色々試されていると思って行動しなきゃいけない。
１つ１つ正しい道を考えていかないと・・・
取り返しがつかなくなるかもしれないからさ」

「はわわ・・・」

「・・・　・・・」

深く考えず過去に来たけど・・・　そんな単純なもんじゃないんだ。

「そうよ。何故、このタイムマシンが・・・
僕たちの目の前にあるか、もっと深く考えるべきね」

「え？」

この時の部長の言葉。本当はとても意味深な言葉なんだけど・・・

「説明はあと。もうすぐ過去ピタが靴箱に着く。
その前にその【ｆｒｏｍ　Π】を、ルブラン君の靴箱に入れるわ

よ」

過去ピタ？　まぁ、意味はわかるけど・・・

「うん・・・」

急いで私達は、靴箱へと向かおうとした。

「あ・・・」

部長が声をあげる。

「どうしたの？」

「このタイムマシン・・・　隠しとかなきゃ」

タイムマシンの位置は、過去に来る前と変わっていない。私達はそれのある場所・・・　理事長室の奥のカーテンを閉めた。

「こ、これでいいのかな？　でも過去の理事長がこれ見たら、どうなるの？」

とりあえずこのカーテンを開けない限り、タイムマシンが見られる事は無い。

「今は靴箱が先決。行くわよ！」

「う、うん・・・」

（第２２話へ続く）

第２１話　バタフライエフェクト（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

私はルブラン君の靴箱に、自ら書いた【ｆｒｏｍ　Π】の手紙を入れる。

ところが・・・　デカルトちゃんが、とんでもない大失態を！

次回「第２２話　ノールールか！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２２話　ノールールか！（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。

それを盗み見た私は、これを書いた人物（犯人）は数学倶楽部の部員と確信した。同じ数学倶楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃんと共に、犯人を探し出そうとする。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまった。

気になっていたあのラブレター。何とびっくり！　書いたのは私である事を部長が証明した。身に覚えないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、衝撃の事実を２つ知る。１つはルブラン君が、サンジェルマン理事長の子供だった事。もう１つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

私、以下2名は・・・　ルブラン君が死んだ日にタイムスリップした。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２２話　ノールールか！

第２２話　ノールールか！

「・・・　・・・・」

ルブラン君の靴箱、その前に立っている私。向こう側の柱の影に、部長とデカルトちゃんがいる。

「・・・　・・・・」

この【ｆｒｏｍ　Ⅱ】のラブレターを入れなければ、うまく行くような気がするんだけど。

しばらく迷った私。ここはタイムトラベルにくわしい部長の指示に従おう。

私はドキドキしながら靴箱の扉を開けた。

「・・・　・・・・」

上履き以外、何も入っていない。

「よかった・・・」

もしまた別の手紙入っていたら、どうしようかと思っちゃった。

「・・・　・・・・」

私は【ｆｒｏｍ　Ⅱ】の手紙をそっと置く。そしてすぐに、部長達

のいる反対側の柱の影へと走っていった。

しばらく影で靴箱を見守っていると・・・　反対側から、過去の私が現れた。

「・・・　・・・」

「過去ピタ、登場～」

「はわわ～　Pちゃんが2人～　やっぱり変です～」

視線の先にいる過去の私・・・　靴箱の前で、乙女のためらいの表情を浮かべている。

「・・・　・・・」

客観的に見ると・・・

「キモいな、私」

「そんな事ないって。
いいね～　いい表情してるよ～　過去ピタ。

そのまま脱いじゃおうって感じ～　ラッセル　ラッセル～」

AV監督か！！

やがて過去の私は、靴箱の扉を開き・・・　驚きの表情を見せる。

「あれ？　デカルトちゃん？」

いつの間にかデカルトちゃん・・・　過去の私のすぐ近くで、その様子を観察していた。

「はわわ～　ドッキドキです～」

その目は野次馬根性丸出しだ。見てるこっちが恥ずかしい。

リーン・・・　ゴーン・・・　カーン・・・　ゴーン・・・

7時ちょうどのチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「!?」

学生用入り口が開く音だ。そして・・・

「カントちゃん・・・」

そうだ・・・　思い出した!

【近代組】の彼女は必ず同じ時間、午前7時に登校してくる。この日もそうだった!

靴箱の方に視線を移すと、過去の私も焦った表情を見せている。いや、それよりも・・・

「デ、デカルトちゃん!?」

彼女の背後に、カントちゃんが近付いている。なのに気づいてない・

・・・

「あら～　こんな朝早く、珍しいわね～　・・・　デカちゃん」

カントちゃんは、デカルトちゃんに声をかけた。

「はわ？　カントちゃん～　おはようです～」

デカルトちゃんは、ステキな笑顔でカントちゃんに挨拶した。

「あのバカ・・・」

部長がそれを見て悪態をつく。それもそのはず。過去の人物との接触は、極力避けろと言われたばかりなのに。

すぐに部長はカントちゃんに姿を見られないよう、デカルトちゃんの所へ走っていく。同時に私の視界には・・・　あの手紙を握りしめた過去の私が、階段を駆け上っていく姿が見えた。

部長はすぐに靴箱の影から、手だけを伸ばしてデカルトちゃんの首を捕まえる。

「はわ？」

そして思いっきり首根っこを引っ張り上げ・・・　カントちゃんに背を向け、逃げるように走っていった。

「ピタ子、他の子も登校してきた！　行くわよ！」

デカルトちゃんを引っ張りつつ、私に声をかける部長。

「う、うん・・・　でもどこへ！？」

「屋上！！」

確かに学校の外へ出るのはマズイ。

「わかった！」

こうして・・・

首根っこを捕まえられたデカルトちゃんと、私、部長の３人は屋上へと走っていった。

・・・　・・・。

屋上へ来た私達。

「この・・・　バカデカ子！　ノールールか！！」

珍しく部長が怒鳴り散らす。

「あんだけ注意したのに・・・
何、カントちゃんに笑顔振りまいてんのよ！！」

「はわわ～　ごめんなさいです～　ちょっと不注意でした～」

「過去をいじくり回しすぎると・・・
私達３人の存在だって、危ういんだからね！！」

「はわわ～　考えが甘かったです～　以後、気をつけます～」

いきり立つ部長の肩に、ポンと手を置いた私。

「まぁ、デカルトちゃんも反省してるみたいだし。
もういいんじゃない？」

「ルール無用の甘党に・・・　正義のパンチラぶちかます！！
ほら・・・　伊達直●にパンツを見せろ～」

そう言うと部長は・・・　デカルトちゃんのスカートをめくり始めた。

あれ？　さっき、あんなにマジ怒りしてたのに？

「虎柄か！？　タイガーパンツか～？　ラッセル　ラッセル～」

ストレスでエロオヤジキャラが出た？

「それにしても・・・」

昭和世代にもわかりづらいボケをかましてるな・・・　このエロオヤジ。

「あの・・・　部長・・・
伊達直●とか、わかりやすい固有名詞はヤメようよ・・・」

さっきも言ったけど、大人の事情。なんつーか、普通にマズいっしょ？

「ほ～れ～　パンツじゃ～　虎柄じゃ～」

人の話、聞いてないし。

「きゃ～」

何故か2人とも楽しそうだ。

「ちょっと部長・・・」

とはいえ、今は生徒が登校中。校内を歩くわけにもいかないので・・・

しばらく私は、2人のセクハラごっこを眺めていた。

そんな屋上の私達に・・・

唯一気づいていたのが、校庭裏の駐車場に車を止めたサンジェルマン理事長だった。

「・・・　・・・」

私達は理事長に、全然気づかなかったけど・・・　理事長はこちらを、じーっと見つめている。

「・・・　・・・」

・・・　・・・。

現時点で、2日前とは何ら変わりはない。このままじゃルブラン君、交通事故に遭ってしまう。それを防ぐため、どう行動すればいいのか・・・　私は考えた。

過去の私はこの後、ポール公園に行くわけでしょ？

ルブラン君は公園に行くわけないし・・・

「じゃぁ今の私が、過去のルブラン君をポール公園に向かわせる？」

そうした場合、ルブラン君が来ないと思ってる過去の私と遭遇し・・・　ややこしい事になりそうだ。

「だったら・・・」

過去の私は完全無視。今の私がルブラン君を別の場所に呼び出し・・・　ラブラブになる？

「よし！」

私はもう1枚残っている【ｆｒｏｍ　Π】の手紙を取り出した。中の便せんを取り出し、【ポール公園】の部分を消す。

「・・・　・・・」

ポール公園とは反対側にある

「楕円野商店（だえんのしょうてん）に来てもらおうかな」

その商店にルブラン君を呼び出すことにした。

「呼び出した後は・・・」

ここは思い切って、映画に誘ってみよう。

【シネマ・花冠館（かかんかん）の前で、お待ちしています】

そうね～、恋愛映画よりホラー映画よね。今上映中の「環（リング）」なんか、いいかも。

きゃーって言いながら、ルブラン君にしがみついちゃったりして・・・

きゃは～。

「ピタ子。その手紙、どうするつもり？」

わ！　びっくりした！

「ぶ、部長、いつの間に・・・」

背後に？

「だからさ。その手紙、どうすんの？」

「そりゃ、放課後までにルブラン君の靴箱に入れて・・・」

「はい、なっせる～」

なっせる？

「とにかく初めてのタイムトラベルだからね・・・
その手紙は、僕たちにとっての現在に持ちかえるべきだね」

「ど、どうしてよ？」

「うん・・・」

部長の説明はこうだ。

私達が今いる過去の世界には、ルブラン君宛のラブレターが３通存在する。

１通は過去の世界の私が書いたラブレターで、過去の私のリュックにそれは入っている。残り２通は、いわゆる現在の私が持ってきたもの。うち１通は、過去の私がさっき持っていった。

そして今、手元に残っている【ｆｒｏｍ　Ⅱ】だ。これを過去に世界に残してしまうと、パラドックスになる・・・　と、部長は言う。

「過去、現在、未来・・・
ピタ子が書いた手紙は、それぞれの世界に１通ずつあるべき」

らしい。だんだんめんどくさくなってきたけど・・・　ここは従っておいた方が安全かな。

「わかった。部長の言う通りにする」

2日前に続き、今回の新ラブレター作戦は頓挫した。

「じゃぁまた、作戦を練り直さないと・・・」

手紙に頼らず、どうやってルブラン君を救うべきか・・・

「・・・　・・・」

「まぁ、あと23時間もあるんだし。
滅多に出来ないタイムトラベルも堪能しながら・・・

ピタ子の未来の恋人、救う方法を考えましょう」

慎重だけど、楽天的な部長。未来の恋人ってのは、ちょっと嬉しい響き。

「・・・　・・・」

私は屋上から校庭を見渡していた。四方は全て金網で囲まれている。
その金網を両手で握りしめ・・・

「ルブラン君・・・　早く登校してこないかな?」

乙女ちっくな事を呟いた。

「あ、ピタ子。その右側の金網、気をつけてね」

「え?　どして?」

「確か3日前の夜・・・　だから、この世界では昨夜になるのか。

何たら流星群の隕石が、この屋上に落ちてさ。

そこの金網ぶち抜いたのよ。ほら・・・

手前のコンクリ、盛り上がってるでしょ？　そこに落ちたの」

部長は右側の金網と、手前のコンクリートを交互に指さす。

「ホントだ・・・」

金網の一部に、大きな穴が空いていた。ヘタしたら人一人落ちてしまうほど、大きな穴だ。

「隕石自体は直径５ｃｍ程度だったんだけどね・・・」

たった５ｃｍで、こんな大きな穴があくものなの？　コンクリも結構粉々になってるんだけど？

私は、穴の空いた金網から離れた場所へ移動する。がっちりした安全な方の金網を握りしめ、遠くを見つめた。

「ルブラン君・・・　早く登校してこないかな？」

・・・　・・・。

その頃。

サンジェルマン理事長は、理事長室の扉の前に立っていた。

「・・・　・・・」

扉の鍵が開いている。

（「鍵を閉め忘れた？　あり得ん・・・」）

警戒しながら理事長室に入り、中を見渡す。

「・・・　・・・」

いつもと変わらぬ整然とした部屋だが・・・　違和感を感じる。

「・・・　・・・」

ふと奥にあるカーテンに視線を合わせた。カーテンの向こうには・・・　私達が乗ってきたタイムマシンがある。

「・・・　・・・」

そのカーテンに向け、歩き始めた時・・・

リリリリーン・・・

デスクの電話が鳴った。

「・・・　・・・」

歩（ほ）を止め、踵（きびす）を返すと・・・　デスクの受話器を取る。

「はい。あぁ、国立数理科学研究所の・・・
ええぇ、私がそうです。」

視線は、カーテンの方に向いたまま。

「えぇ。アララト山で発見した【箱船】の件ですね。
いえ、あいにく１０時からは聖メンデレーエフ学園にて・・・

【錬金術、特別公開講座】がありまして・・・」

コンコン・・・

電話中、理事長室を何者かがノックする。

「失礼します」

スーツを着けた、メガネ姿の女性が入ってきた。理事長の秘書だ。

「わかりました。ではまた、後ほど」

ちょうど受話器を切った理事長。

「どうした？」

「はい。製薬会社の方がいらっしゃってます」

「あぁ、【ＲＤＮＤ】の論文関連だな。通してくれ」

ネクタイを緩めながら、ふ～っと溜息をつく。

（「今日は、タフな日になりそうだ・・・」）

「わかりました。では、こちらへ」

秘書は、廊下に立っていた2人の男達を理事長室へ招き入れる。

「失礼します」

スーツ姿の男達が入ってきた。秘書は入れ替わるように部屋を出て行く。

「・・・　・・・・」

理事長は、カーテンを一瞥（いちべつ）した後・・・

「どうぞ、ソファへかけてください」

入ってきた男達に声をかけた。

・・・　・・・・。

午前8時過ぎ。

「はわわ～　見てください～　ラッセルちゃんです～！
2日前のラッセルちゃんが登校してきました～」

「ホントだ。過去の僕を見るってのも・・・　変な感覚ね・・・・」

「現在のラッセルちゃんが～　過去のラッセルちゃんと遭遇すると～
どうなるんでしょうか～？」

「恐ろしい事、言わないでよ・・・　デカ子。
完全にパラドックスだし・・・

過去の僕が、今の僕を認知したら・・・
どちらかの僕、あるいは両方消えちゃうかも」

「はわわ～」

「ドッペルゲンガーの伝説って・・・
ひょっとしたら、タイムトラベラーのパラドックスなのかもね・・・」

「・・・　・・・」

デカルトちゃんと部長の会話をよそに・・・

ず～っと、屋上から校庭を見ている私。

「おかしいな・・・　いつも8時前には登校するハズなのに・・・」

授業開始は8時半。まぁ授業といっても、ほとんど自習なんだけどね。

「どした？　ピタ子？　愛しの君（きみ）は、現れない？」

「うん・・・　もう登校している時間のハズなのに・・・」

「はわ？　Pちゃん、ルブラン君待ってるんですか～？」

「うん・・・」

「デカちゃん、同じクラスだからわかるんですけど～」

デカルトちゃんも、ルブラン君も【近代組】だ。

「デカちゃんの記憶では確か～・・・
ルブラン君、この日は学校お休みでしたよ～」

「えーーー！？」

（第２３話へ続く）

第22話　ノールールか！（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

その日、ルブラン君は学校を休んでいた！？

衝撃の事実に、私は驚きを隠せない。

私達はルブラン君の自宅に向かおうとするが・・・　屋上に別の生徒がやってきた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回「第23話　タレスちゃんの危機」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２３話　タレスちゃんの危機（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。思わずそれを盗みとった。

でも私がラブレターを盗んだせいで・・・

ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

ただ、私が盗んだラブレターは・・・　私が書いたと、数学倶楽部の部長・ラッセルちゃんは言う。身に覚えないのに、なんで！？

理事長室に呼ばれた私、衝撃の事実を２つ知る。１つは、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう１つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・　ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。そこでデカルトちゃんの口から、その日ルブラン君が学校を休んでいた事を聞いた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２３話　タレスちゃんの危機

第２３話　タレスちゃんの危機

ル、ルブラン君が・・・　お休み？

「じゃ、じゃぁ・・・
どのみち、靴箱の手紙なんか・・・　元々知らなかった？」

だって、学校にすら来てないんだから。

「この・・・　バカデカ子！！　なんで、それ、早く言わないの！！」

「はわ？　別に、聞かれなかったし・・・」

「デカ子・・・　僕たちとずっと行動を共にしてて・・・
マジ、何もわかってないの！？」

「はわわ？　何かデカちゃん・・・　マズい事、しましたか～？」

した。

「・・・　・・・」

絶句する部長。

ルブラン君を事故に遭わさまいと動いていたのに・・・　これじゃぁ今までの行動、全く無意味じゃない。

「デカルトちゃん・・・　そういう大事な情報はもっと早く・・・」

「タイムマシンに乗って、【超】のつくドまぬけカマすなんて・・・」

部長がマジ怒りしてる。

「デカ子!!　あんた、ドラ●もんのの●太か!!!」

だから、そういう固有名詞は・・・　たまにある部長の【例えツッコミ】は、大人の事情にひっかかる。

「はわわ～　とにかくごめんなさいです～」

部長がデカルトちゃんのお尻をペンペン・・・　いや、揉み始めた。

「きゃ～　です～」

「の●太くん!　ノールールなお前は、ドジでノロマなカメだ!!　おら、おら～」

基本、部長も・・・　ノールールだよね。

「さて・・・」

私は考える。

デカルトちゃんの情報によれば、この日ルブラン君は学校に来ていない。ならば私が、彼の靴箱からラブレターを盗った事実は・・・

彼の死の原因ではない。
って事でいいのよね？
確かにデカルトちゃんのヘマは痛いけど・・・　私の心の負担はだいぶ減った。
「とはいえ・・・」
今日、彼は死ぬ。そしてそれを阻止するため、私達は過去の世界へやってきた。
「だとしたら、どうするべき？」
「そうね～　僕だったら～」
デカルトちゃんのお仕置き（セクハラ）を終えた部長が、いつの間にか背後に立っている。
「過去ピタと、ルブラン君をくっつける。
そしたら、現在に戻った時・・・　今のピタ子の彼氏になってるかも」
え？　マジ！？　それは超嬉しい！！
「でも、どうすれば・・・」
「まず、ルブラン君の家に行こう。
病気で休んだのか、別の理由で休んだのかを知りたい」

「そ、そうね」

「彼は学校を休んでるのに、自宅前で交通事故に遭ってる。
過去ピタとルブラン君をくっつけるには・・・
まずはルブラン君の情報収拾から」

なるほど。エロがなければ、心から頼りになる部長だ。

「はい！　はい！　デカちゃんも行くです～！」

勢いよく手を挙げるデカルトちゃん。

「・・・　・・・」

正直、足手まといにならいかしら・・・　というのが本音だ。

「まぁ、デカ子はルブラン君と同じクラスだし。
学校で貰ったプリントを渡すとか・・・
口実をつけて、ルブラン君の家に侵入させる作戦もアリかな。
何かしら役には立つかもね」

「デカちゃんは～　名誉挽回のため、頑張りますです～！」

「そうとなれば、すぐに」

「ピタ子。あわてない、あわてない」

両手の人差し指で頭に円を描く部長・・・　●休さんのつもりか？

「ほら」

その人差し指を、校庭に向けた。

「あ・・・」

たくさんの登校する生徒達が見える。

「今は・・・　動けない・・・」

過去の世界の住人と、なるべく接触を持たないようにするってのも・・・

なかなか大変だ。

・・・　・・・。

午前9時半まで屋上で待機した私達。遅刻者も含め、この時間なら登校してくる生徒は、ほとんどいない。

「部長。そろそろいいんじゃない？」

「うん。じゃ、非常口から行こうか・・・
くれぐれも、人との接触は避けるようにね。

特に自分自身とは！」

「うん」

「デカちゃんは～　自分自身と会う事は無いです～
何故なら～　過去のデカちゃんは、まだ自宅で睡眠中です～」

いや、そこで胸をはられても。

バタン！！

突然、屋上出入り口の扉が開いた。

「・・・　・・・」

「・・・　・・・」

「はわわ～・・・」

とっさに、大きな給水タンクの影に身を隠した私達。チラリと音のした方に目をやると・・

「タレスちゃん！？」

私と同じ【古代組】のタレスちゃんが、上を向いて金網のほうへ歩いていた。

「さ～て。
この時間でも、乙女座流星の運行なら調べられるわね・・・」

何やらボソボソつぶやいている。なんていうか、薄手でスケスケの

ネグリジェみたいな・・・　胸元のVゾーンが大胆な衣装を着けてる。

「昨夜も隕石が落ちたようだし・・・　この軌道なら・・・」

ノートと鉛筆を持ち、上を向きながら何かをメモってるようだ。

「ちょっとピタ子。あの子、あんたのクラスメイト・タレスちゃんって子でしょ？
何やってんの？」

「た、多分・・・　星の動きとか、いろいろ調べてるんだと思う。
彼女、天体とか観察するのが趣味で・・・
日食とかも、いつ起こるのかわかるんだって・・・」

「ふ～ん。でも、これじゃ僕達が出られないわ。
早く出て行ってくれな・・・！？」

急に部長の目が大きく見開いた。

「・・・　・・・」

かと思うと、部長はタレスちゃんの所へ向かって走っていく。

「ちょ・・・　部長！？」

「はわわ～　タレスちゃんが・・・」

タレスちゃんは上を向いて歩き続け、そのまま・・・　あの、破れ

た金網の所へ一直線。

「た、タレスちゃん！！！」

思わず私は声をかける。

「え？」

タレスちゃんが反応して、こちらを向いたと同時に・・・　彼女はあの粉々になったコンクリにけつまづき、何と破れた金網の所へ転ぼうとした。

「え！？」

私が声をかけたから？

「おら！！」

そのタレスちゃんの腰巻きを、部長が掴むと・・・　思い切りこちら側へ引き寄せた。

「あ～　れ～」

タレスちゃんは悪代官に帯を解かれる遊女のような仕草で・・・

ドスン。

「あいた！」

平らなコンクリに尻餅をつき、事なきを得た。

「ふぃ～・・・　ちょっとタレスちゃんとやら・・・
あんた、もうちょっとで投身自殺よ！」

危機を救った部長は、タレスちゃんに声をかける。

「な・・・　何？」

お尻をさすりながら、タレスちゃんは立ち上がる。まだ状況が飲み込めてないようだ。

「ったく・・・　あんたさ！！
遠い星の事はわかっても、足下の事は全然わかんないのね！」

部長がタレスちゃんの危機を救ったのは間違いない。

ただ・・・　過去の人間と関わった事も間違いない。まぁ、人の命がかかってたんだから、仕方ないわよね。

「ピタゴラスちゃん？」

思わず身を乗り出した私と、タレスちゃんの視線がバチッと合う。

「やば・・・」

すぐに給水タンクの影に身を隠す。

「ピタ子・・・　もういいよ。出てきな・・・」

完全に顔見られたし・・・

私はタレスちゃんの前に出てきた。デカルトちゃんも私に続く。

「やっぱりピタゴラスちゃんだ。でも、ついさっき・・・
教室いなかった?」

「い、いたけど・・・　ほら、何て言うの?　走って屋上に・・・」

しどろもどろで応える私。

「あんた、星に夢中になりすぎてさ・・・
屋上に来たピタ子に、気づかなかったってわけ」

「あら。そう・・・」

ナイスフォロー。

「じゃ、僕たちは校舎に戻るから。
頑張って星に願いを叶えてもらってね。

さ、行こ。デカ子、ピタ子!」

「う、うん・・・」

「はいです~」

「ちょっと待って!」

タレスちゃんが、部長の腕を掴んだ。

「あなた、還元水に興味ない？」

「は？」

ポカンと口を開ける部長。

「還元水・・・　体に良いわよ？」

「興味ないから」

部長が手をふりほどいた。しかしタレスちゃんも詰め寄ってくる。

「あなた見た所・・・　おっぱい無いわね？」

その言葉に反応した・・・

「・・・　・・・」

部長の眉間にしわがよる。

「無い？　小さいとかじゃなくて、無い？」

「還元水は体にいいのよ～。飲み続ければ、おっぱいだって・・・
今よりもっともっと成長するわ」

「・・・　・・・」

タレスちゃんの胸は、推定Eカップ。

「あんたさ・・・　ブラ、とってよ」

出た。いらつきながら部長が、あの言葉を浴びせる。

「ほ～っほっほっほ。私、ブラはつけない主義なの～」

なんか、お高くとまった笑い方をするタレスちゃん。スケスケの衣装とはいえ、胸の所はフリルがついておっぱいは直接見えない。そのチラリズムは、エロオヤジの部長にはたまらないだろう。

「だからお胸の無いあなた・・・　還元水、買わない？
今なら安くしておくわよ」

そういえばタレスちゃんは【健康は金になる】と言って、クリーンな水を買い占め・・・　それを商売にして、お金持ちになったって聞いた事ある。

ある意味、水商売で成功したというわけか？

「ふん。おっぱい大きくて、金持ちで、ブラをつけない・・・
哲学界の、叶恭●ってわけか・・・」

いや、だから・・・　リアル名前は口にしないでってば。

「はわわ～　部長の目に炎が宿ってるです～」

「ぶ、部長？」

部長は人差し指をタレスちゃんに向ける。そして・・・

「僕と勝負だ！！」

勝負を申し込んだ。え？　何？　勝負って？

「私と勝負？　あらあら・・・　血気盛んなお嬢さんだ事。
私、争い事には興味ございま・・・」

「あんたが勝ったら、その還元水・・・　1年分買う！」

「なんですって！？」

お？　タレスちゃんがくいついた。

「その代わり僕が勝ったら・・・」

「あなたが勝ったら・・・？」

生おっぱい揉ませろ？

「生乳、揉む！！」

正解。

「面白いですわ！　その勝負、受け・・・」

バタン！！

何とこのタイミングで、もう1人屋上に現れた。

「ラ、ラマヌジャンちゃん！！」

美しい黒髪に、綺麗な黒目・・・　思わず私は声をあげた。

「・・・　・・・・」

ラマヌジャンちゃんは、私に視線を合わせると・・・　優しく笑った。

「どちら様で？　記憶力には自信ありますが・・・
あなたとはお会いした事、ありませんわ」

口調も優しい。でも、そうだ！　私が会ったのは・・・　この日のお昼、部室に本を取りに来た時。そして明日【ナマギーリ女神の、おかげです】を取りに来るラマヌジャンちゃんに、会ったんだ。それ以前は、会った事がない。

「あ、ほら。インドの魔術師って噂を聞いた事あって・・・
わ、私はあなたの事、よく知ってるわ・・・」

「・・・　・・・」

神秘的な黒目で私を見つめている。

「ラ、ラマヌジャンちゃんは、何故ここに？　お、屋上に用事でも？」

「えぇ。ちょっと体調が悪くて・・・
外の空気にあたろうかと・・・」

「そ、そう。お大事にね・・・」

ラマヌジャンは首をふった。

「嘘・・・」

え？

「今、私は嘘をつきましたわ。これでお互い様ね・・・」

え？　え？　何かを見透かしたような黒目で・・・　それでいて優しい黒目で、じっと私を見つめる。

「な？　どういう事？」

部長からは不思議ちゃんと聞いていたけど・・・　私もつかみ所が見つからない。

「本当は私・・・　ナマギーリ女神によばれて、ここへ来たの」

へ？

「あ、そう。よ、よかったわね・・・」

「・・・　・・・」

ラマヌジャンちゃんは、私をじっと見つめている。

「た、体調はどう？　最近、体調悪いって・・・」

沈黙に耐えられず、私は声をかけた。

「・・・　・・・・」

彼女は黙ったままだ。

「あ・・・　引っ越しするんだよね？」

「・・・　・・・・」

しばらく沈黙を保ち続けていたラマヌジャンちゃん、ようやく

「あなたは・・・　神を信じるかしら？」

私に口を開いた。

「え？　あ、いや・・・　別に・・・
いてもいいかな、とは思うけど・・・　１００％信じてるわけじゃ・・・」

「・・・　・・・・」

またしても沈黙を保った後・・・

「あなたは・・・
【ナマギーリ女神】のおかげで、未来を歩む事になる・・・」

「は？」

何？　魔術師って、占い師か何かなの？

「な、何で・・・
私の知らない神様のおかげで・・・　未来を歩むわけ？」

だんだんと、あまのじゃくな私が出てきたその時・・・

バタン！！！

何と何と・・・　このタイミングで、さらにもう1人屋上に現れた。

何でよ！？　みんな授業、サボリまくり？　まぁ、授業はほとんど自習なんだけどさ・・・

新しく屋上に現れたその子は・・・　ちょっとウェーブがかかった銀色の髪。目をつり上がらせ、見た目は意地悪そうな女の子だけど・・・　誰？

「はわわ～・・・　フェ、フェルマーちゃん！？」

え？　【ピタゴラスの定理】と二分して有名な【フェルマーの最終定理】の？

「おや？　ルネ・・・　君も教室のスペースが狭すぎて、屋上に？」

デカルトちゃんのフルネームは【ルネ・デカルト】だ。

「はわわ～・・・」

デカルトちゃんは、私の背中に隠れた。そういえば、フェルマーち

ゃんを苦手にしていたっけ。

「おやおや・・・　また、余から逃げるのかえ?」

どうやらこのフェルマーちゃん、老婆みたいなしゃべり方をするようだ。

「ふぉえっ　ふぉえっ　ふぉえっ」

笑い方は、老婆そのもの。

だんだん状況がややこしくなってきたので、今一度確認しよう。

今、この屋上にいるのは・・・

まず過去の世界の住人、タレスちゃん、ラマヌジャンちゃん、フェルマーちゃん。そして、タイムトラベルでこちらの世界に来た、部長、私、デカルトちゃん。合計6人だ。

「面白いですわ!!」

この状況でタレスちゃんが声をあげた。右手の人差し指を上にあげている。

「何やら因縁のありそうな、3組6人が集結したようで・・・」

「ナマギーリ女神のお導き・・・」

「ふぉえっ　ふぉえっ　ふぉえっ」

「あまり過去とは接触持ちたくないけど・・・　おっぱいを・・・」

「えっと・・・　ルブラン君は？」

「はわわ～・・・」

タレスちゃんの人差し指が、私達に向いた。

「決闘ですわ！！　３ｏｎ３・・・　団体戦で決闘を申し込みますわ！！」

「ナマギーリ女神のお導きなら・・・」

「ふぉえっ　ふぉえっ　ふぉえっ　余は構わぬぞ」

「喧嘩上等！　その生乳・・・　絶対、揉みしだいてやる！！」

「え？　な、何？　決闘って・・・」

「はわわ～・・・」

こうして・・・

【タイムトラベラー代表３人】ＶＳ（ブィエス）【過去組代表３人】

「意外と真面目な、哲学バトルが始まるのであった！

ラッセル　ラッセル～♪」

あの・・・

ルブラン君は？

（第２４話へ続く）

第２３話　タレスちゃんの危機（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

次回、突然２人の新キャラが初登場。

哲学者達のプライドをかけ、３ＶＳ３のバトルが開始される！？

次回「第２４話　爆哲！　オンエアバトル」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２４話　爆哲！　オンエアバトル（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそのラブレターを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つは、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう１つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私のクラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけで・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２４話　爆哲！　オンエアバトル

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２４話　爆哲！　オンエアバトル

『さぁ、今宵もやって参りました。【爆哲、オンエアバトル】ｓｅａｓｏｎ２！
実況はお馴染み・・・

何故（Ｎａｚｅ）、人は（Ｈｉｔｏｈａ）、考える？（Ｋａｎｇａｅｒｕ）
ＮＨＫの茂木ちゃんです！　Ａ～ＨＡ～　そして解説は・・・』

『この世に哲学者として生を受けたのならば・・・
歩き通せよ、哲学の道。こんにちは、実況の西田幾多郎です』

『さぁ、西田先生。久しぶりにやってきました！　哲学バトル。
今回は春の特番、スペシャル企画ということで・・・

団体戦でのバトルとなります！　まずはルール説明をお願いします』

『はい。今回は【タイムトラベル組の３人】と・・・』

『ちょ、ちょっと待ってください・・・　西田先生。
我々は、彼女たちがタイムトラベルしてきたという事を・・・
知っているのでしょうか？』

『はい。脚本に書かれてあります。事前に読んでませんか？』

『A～HA～　失礼しました。
では、そのタイムトラベル組3人の視点に立った場合・・・
我々の存在は、どう捉(とら)えられるのでしょう？』

『私達は、まぁ、いわゆる・・・
パラレルワールドにいて、彼女たちを見てるようなものです。
私達は彼女たちを見る事が出来ますが、あちらからはこちらが見えない。
番組上、そういう設定です』

『A～HA～　よ～くわかりました。
じゃぁ、我々は勝手にこちらで実況&解説するだけの存在ですね？』

『その通りです。あちら側とは一切、コンタクトは取れません』

『では、西田先生。改めてルール説明をお願いします』

『はい。今回はですね～
【タイムトラベル組】ピタゴラス、デカルト、ラッセルに対し・・・

【過去組】タレス、フェルマー、ラマヌジャンによるチーム戦となります」

『A～HA～　決着はどのようにつくのでしょう？』

『チーム戦では1対1の哲学バトルを、最大3試合行います。

1試合1試合に引き分けはありません。

先に2勝すれば、そのチームの勝ちというルールです』

『A～HA～　と言う事は、西田先生。

1戦目2戦目を連勝したチームは・・・

3戦目を待たずに勝利！　という事でよろしいですね?』

『その通りです。個人個人の哲学力はもちろん大事ですが・・・

チーム内で、いかにプラスの哲学的連鎖を作っていけるか。

スポーツ同様、哲学にもいい流れ・悪い流れがありますからね。

哲学的総合力と哲学的流れ。この2つが、勝利を引き寄せるカギです』

『A～HA～　ではもう1つ。

1つ1つの試合はどのように展開され・・・

どのように勝敗がつくのでしょう?』

『えぇ。まずは対戦相手のうち、1人がサイコロを振ります』

『サイコロ・・・　ですか?　西田先生?』

『えぇ。各面には【真実】【愛】【存在】【神】【根源】【☆】・・・

・

この6つの文字が書かれています。

出た目をテーマに・・・　お互いの哲学を語り合うわけです」

『なるほど。
西田先生、サイコロの目にある【☆】の説明をお願いします』

『【☆】はテーマフリー。既存の目をテーマにしてもいいですし・・・
・
例えば【知】とか【認識】とか・・・

サイコロの目にないテーマを選んで、バトルしても構いません』

『わかりました～。決着方法は？』

『時間無制限、引き分け無し！
相手が言葉を失うか、ギブアップで勝負ありです』

『Ａ～ＨＡ～　しかし、あのサイコロ・・・
どこかで見た事あるようなサイコロですね？』

『小堺●機の【ごきげん●う】ですよ、茂木ちゃん先生』

『あの・・・　西田先生。そういうストレートな固有名詞は・・・
ＮＨＫという事もありまして、今後控えてください』

『何が出るかな～♪　何が出るかな～♪』

『・・・　・・・』

『お？　茂木ちゃん先生。第１試合が始まりそうですよ！
第１戦は・・・　ラッセルちゃんＶＳタレスちゃんです』

『A・・・　A～HA～　では、気を取り直して。
西田先生、この第1戦。ズバリ、どこに注目ですか？」

『はい、茂木ちゃん先生。人類史上、最初の哲学者と言えば？』

『タレスちゃんです』

『その通り。彼女は7賢人の1人としても有名ですよね』

『あ、西田先生。残り6賢人について、お聞きしてよろしいでしょうか？』

『ウィキペディアで調べてください』

『いや、ウィキペディアって・・・
西田先生も、ノールール系キャラのようです・・・』

『お！？　じゃんけんで勝ったタレスちゃんがサイコロを振りましたよ！
何がでるかな～♪　何が出るかな～♪』

『・・・　・・・』

『おお！？　何と・・・
茂木ちゃん先生！　なんて書いてます？　私、目が遠くて・・・』

『えっと・・・　出た目は【根源】です！』

『はい。これは【アルケー】と読んでください。

非常に面白い対決になりそうです！』

『ほ～。西田先生、どの点が面白いのでしょう？』

『人類史上、最初に物の根源とは何か・・・
それを考えたと言われるのがタレスちゃん。

一方、ラッセルちゃんは・・・』

『そう言えば西田先生は・・・
ラッセルちゃんの所属する【現代組】、その担任ですよね？』

『はい。私、ラッセルちゃんの担任をしています。
彼女はあのアインシュタインちゃんと仲が良く・・・

現代物理学の【素粒子論】にもくわしいんですよ。
まさに物の根源についての、最新知識があるんですね～』

『A～HA～　万物の根源を最初に考えたタレスちゃんと・・・
最新物理学における物の最小単位、素粒子にくわしいラッセルちゃん。

この2人の対決というわけですね～。非常に楽しみです！』

『ラッセルちゃんは、ご存じ数学倶楽部の部長もしています。
哲学者ながら現代数学や現代物理学、それに文学等にも精通しています』

『A～HA～　ラッセルちゃんはかなりの博識のようです。
この勝負、ラッセルちゃん有利と見てよろしいでしょうか？』

『えぇ。片や人類最古の哲学者。片や現代科学の最新知識を有する博識者。
知識ではラッセルちゃんの方が上ですが・・・
タレスちゃんには、ファースト哲学者としてのプライドがあります。
いい試合を期待しましょう』

『はい、わかりました。
では第1試合・・・　西田先生、ゴングをお願いします」

『わかりました。では・・・』

カーン!!

『ゴングが鳴りました!　第1試合開始です!!』

（第25話へ続く）

第２４話　爆哲！　オンエアバトル（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

哲学バトル、第１試合は・・・　ラッセル部長　ＶＳ　タレスちゃん

部長が勝てば、タレスちゃんの生乳を揉む権利を得て・・・　タレスちゃんが勝てば、部長は還元水１年分を買う事に。

お互いの哲学を賭け、熾烈なバトルが始まる！？

次回「第２５話　ラッセル　ＶＳ　タレス」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２５話　ラッセル　ＶＳ　タレス（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそのラブレターを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つは、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう１つは、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私のクラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達３人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジャンちゃんの３人で・・・哲学バトルが始まった。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２５話　ラッセル　ＶＳ　タレス

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２５話　ラッセル　ＶＳ　タレス

第１試合は、部長とタレスちゃんの対決。

「・・・　・・・・」

「・・・　・・・・」

お互いのにらみ合いが続く。最初に口を開いたのは部長だった。

「タレス（Ｔｈａｌｅｓ）、ラマヌジャン（Ｒａｍａｎｕｊａｎ）、フェルマー（Ｆｅｒｍａｔ）・・・【ＴＲＦ】か・・・　小室ファ●リーには負けないわよ！」

いや、だからさ・・・　小室●哉さんも微妙な時期だから、名前を出さないであげて。

「テーマは【根源（アルケー）】。これはもう【水】ね！　反論あるかしら？　ＴＰＰさん？」

部長に続き、タレスちゃんが口を開く。

「何、その・・・　ＴＰＰって？」

「ツル（Ｔｓｕｒｕ）・ペタ（Ｐｅｔａ）・ピッタンコ（Ｐｉｔｔａｎｋｏ）・・・」

「ぬぅ！？」

あ、部長の気にしてる事を。いつもならブラを外せと反論するけど、タレスちゃんはノーブラだし・・・

『お～っと！　出ました！　ＴＲＦに返す言葉が、タイムリーなＴＰＰ！
西田先生、今の返しはポイント高いのでは？』

『茂木ちゃん先生。今のは何１つ、哲学的な事を捉えてません。もっと本質的な【根源】が出てきてからですよ、哲学バトルは』

『Ａ～ＨＡ～　失礼しました。では、今一度バトルに注目しましょう～』

「ふふ。万物の根源はズバリ【水】！　何か反論はありまして？ＴＰＰさん～」

挑発的なタレスちゃんの攻撃・・・　口撃だが、部長が負けるハズない。

「ふ・・・　水はＨ２Ｏ。水素と酸素で作られているのよ！そしてそれら原子や分子は・・・　素粒子で構成されている。
僕にとって万物の根源は・・・　ズバリ【素粒子】よ！！」

『出ました、素粒子！　これはもう・・・
彼女の言う通り、ズバリど真ん中じゃないですか？　西田先生？』

『いきなり確信で来ましたね、ラッセルちゃんは。
タレスちゃんの、少し後に出た【デモクリトス】ちゃんは・・・
原子の語源である【アトム】を万物のアルケーと言いました。
しかし素粒子は、その原子を構成する最小単位なんですよね』

『A～HA～　これはもう、ラッセルちゃんの勝利でしょう～
やはりタレスちゃんでは、知識の差が・・・』

『いえいえ、茂木ちゃん先生。まだわかりませんよ～。
さぁ、今度はタレスちゃんの反撃です』

「ふふ、TPPさん。私達生きとし生けるものは・・・　水があっての事。
水なくして生きてはいけない。
こうやって私達が、アルケーディスカッションしている事だって・・・
とどのつまり、水のおかげよ！」

「・・・　？」

「つまり、人類が高度なディスカッションするにまで進化したのも・・・
水のおかげでなくって？

元を正せば、生き物の起源は水。それ、すなわち・・・

万物を認識する私達・・・　その根源としていきつく先は、水よ！！」

『何と！　掟破りの進化論発言ですよ、西田先生！』

『えぇ。【古代組】のタレスちゃんから・・・
【進化】という言葉を聞けるのは意外でしたね～』

『【古代組】は、その概念を習っていないはずですよね？』

『おそらくですが・・・
【現代組】の子達とディスカッションをして、得た知識でしょうね。

そういう意味じゃ、ラッセルちゃん。
タレスちゃんは、簡単に勝てる相手ではないですよ～』

「ふん・・・　そんなの詭弁（きべん）よ！　僕には通じないわ！」

『西田先生。詭弁とは？』

『えぇ。ま、簡単に言うとですね。
あたかも論理的な事を言ってるんだけど・・・
実はそれらしい事を言ってるだけで・・・
中身は根拠のないのへりくつ・・・　そういうものです』

『もう少し、視聴者にわかるようにお願いしてよろしいでしょうか？』

『では、具体例を。茂木ちゃん先生、人は卵を産みますか？』

『まさか！　人類は【ほ乳類】ですよ。卵を産むわけがないです』

『ではもう1つ。茂木ちゃん先生は、カモノハシをご存じですか？』

『名前ぐらいは・・・』

『カモノハシはオーストラリアに生息する【ほ乳類】で・・・
卵を産むんです』

『え？　ほ乳類なのに・・・　卵を産む？』

『ですから、同じほ乳類である我々人類も・・・
卵を産む体の機能は持ってるんです』

『え・・・　えぇ？』

『茂木ちゃん先生。今、一瞬【そうかな？】って思いましたよね？』

『お、思いましたね・・・
あの・・・　カモノハシのくだり、嘘ではないですよね？』

『えぇ。カモノハシは卵を産むほ乳類、それは間違いありません。
ほ乳類の学術的な説明は長くなるので、割愛しますが・・・

人が卵を産むことはありません。
これはちょっとしたニセ論理を展開して、あなたにそう思わせたんです』

『は～・・・　まだ、よくわからないですが・・・』

『【詭弁】を言う者は、今のように・・・
間違ってる論理を展開したり、相手の知識の曖昧さにつけ込みます。

紀元前のギリシァでは、詭弁で人を惑わす・・・
まぁ、今で言う詐欺師のような輩（やから）があふれていた時代があったんです』

『A～HA～』

『【知、ある者】と称する、いわゆる詭弁者。
後に【何も知らない】と称するソクラテス。

ここからまた、哲学は発展していくのですが・・・
まぁ、この話は次回。今は彼女たちのバトルを見守りましょう』

『くわしい解説、ありがとうございました、西田先生。
では、バトルはどうなっているでしょうか？』

「全ての生命の起源は水！　水がなければ、人は地球に存在しなかった。
万物の根源を考える人間の存在は・・・　水があっての事！

どうかしら？　ツルペタピッタンコさん。おっと失礼、ＴＰＰさん？」

『西田先生。詭弁だとしても・・・　なかなか正論に聞こえますね』

『えぇ。相手を説き伏せる、説得力のある語り口も・・・
哲学者のスキルの１つですから』

「み、水は・・・　水素原子２個と酸素原子１個で・・・
その原子も、中性子と電子と・・・」

「もう１度聞くわ、ＴＰＰちゃん。この地球に水がなかったら・・・
万物の根源どーのこーのと、議論する機会はあったかしら？
アルケーを考えるには・・・　水は絶対必要でしょ！？」

「ぐ・・・」

『おっと～　当初の予想に反し・・・
ラッセルちゃん、追い込まれています。
意外な展開ですね？　西田先生！』

『えぇ。しかし、タレスちゃんの論理には矛盾があります。

その矛盾をつけば、形勢は逆転しますよ』

『ほ～　矛盾がある？　そうは思えませんが？』

『一見するとスジが通っているように思える。
それこそが詭弁の大きな特徴なんです。

まぁ、ラッセルちゃんは・・・　クラスの中でも、かなり優秀。
彼女も、その矛盾に気づいているはず』

『その矛盾とは何なのか？
さぁ、担任・西田先生の期待に添え、ラッセルちゃんの反撃なるか？

バトルの方に注目しましょう～』

「はわわ～　ラッセルちゃん・・・　劣勢です～」

「だ、大丈夫よ・・・　部長は・・・　私達の部長なんだから・・・」

とはいえ、あのタレスちゃんのアルケーロジック。私なら、負けてるかも・・・

「・・・　・・・」

追い詰められたかに見えた部長だったが・・・

「ふ・・・」

ニヤリと笑った。

「おや、ＴＰＰちゃん。
その笑顔は、負けを認めたという事でよろしくって？」

余裕の表情を浮かべるタレスちゃんに対し、部長は・・・

「ふふ。あなたの術中にはハマらないわよ～」

意外な言葉を口にした。

「万物の根源は・・・　太陽よ！！」

え？

「え！？　何を言い出すかと思ったら・・・　太陽？」

タレスちゃんは、面食らった感じだ。

「・・・　・・・」

しばらくして・・・

「お～ほっほっほ。素粒子から一転、万物の根源が太陽？
そんな事を言った哲学者・・・　過去にいたかしら？

素粒子の方が、まだ勝ち目があると思いますわ～」

タレスちゃんは、勝ち誇った表情を浮かべた。

「太陽がなければ・・・　僕たちは生きていられない。
ミミズだって、オケラだって・・・　アメンボだってね」

「ふふ。高度な議論から・・・
急に小学生レベルになったように感じるのは、気のせいかしら?」

「太陽がなければ、僕たちは生きていけない。
それすなわち、アルケーについてディスカッションできるのも・・・

太陽なくしてはありえない！　どう?　僕に反論できる?」

「・・・　・・・」

「僕たちが生きているのは太陽のおかげ。
万物を認識する時、その根源としていきつく先は・・・　太陽よ!!」

『お～っと!　先ほどタレスちゃんが言った事そのまま・・・
水を太陽に置き換えて、ラッセルちゃんが言い放ちました!』

『さすが私のクラスの生徒。そう、タレスちゃんの詭弁の矛盾点は・・・
【万物の根源は太陽である】といった場合でも、ニセ論理が通ること。

つまり水が根源である必要はなかった点なんですね～』

『A～HA～　万物の根源を【酸素】とかにしてもいいわけですね？』

『その通り。
ただあくまでもタレスちゃんの、詭弁的論理では・・・　という事です。

相手の詭弁を逆手にとる攻撃、実に見事ですね～』

『A～HA～　詭弁というものが、わかったような気がします！』

「く・・・」

「ふ。叶恭●さんは・・・
妹の美●さんがいなければ、何も出来ないかしら？」

いや、何もそこまで言わなくても・・・　部長はS体質ね。

「タレスちゃん！
あなたの主張ではアルケーが【水】でなくてもいい事を、僕は示した！

でもあなたは僕のアルケー・・・　【素粒子】を否定できるかしら！？」

「う・・・」

「言い返せないのなら・・・　勝負は僕の勝ちね！！」

「くく・・・　な、何でも・・・　還元水・・・」

『おっと。ラッセルちゃんの勝利宣言に対し、反論できないタレスちゃん。
西田先生、これは・・・』

『えぇ。哲学者にとって、己の哲学を表現するのは言葉のみ。
言葉は哲学者にとっての命です。

それが出てこないとなると・・・』

カン　カン　カン！！

『出ました！　西田先生がゴングを3回鳴らしました！
それすなわち・・・』

「負けを・・・　認めるわ。ＴＰＰ、いや・・・　ラッセルちゃん」

ついさっきまで、上から目線だったタレスちゃんが・・・

「はわわ～　負けを認めたです～！」

「や・・・　やった！　部長！！」

「ラッセル　ラッセル～♪」

『いや～、西田先生。第1戦、振り返っていかがでした?』

『ラッセルちゃんのカウンターパンチ炸裂。本当に見事だったと思います。
ただ、少しばかり補足しておきます。根源に対する議論は・・・

哲学の学派や宗教によって、とらえ方が微妙に違う場合もあります。
今回は物質の根源という視点で、バトルが繰り広げられました』

『なるほど』

『今回はルール上、試合自体は1対1のバトル。
ラッセルちゃんはタレスちゃんに対し・・・

ディスカッションで打ち負かしたという事で勝利した』

『A～HA～』

『ラッセルちゃんの言う【素粒子】は、物理的な側面での解釈の1つ。
そう思ってください。

必ずしもそれが・・・　100%の答ではないという事です』

『A～HA～・・・　色んな視点での解釈の仕方がある。
哲学も奥が深いですね～』

給水タンク側が私達のコーナー。そこに戻ってきたラッセルちゃんに、笑顔で迎える私達。

「よっし！　まずは1勝！　ラッセル　ラッセル～♪」

「はわわ～　デカちゃんは～　ラッセルちゃんの事、尊敬します～」

ハイタッチをかわす私達。

「ホントに・・・　負けるかと思っちゃったわ・・・
あんな見事に逆転するなんて～」

「あー・・・　まぁ、最初からタレスちゃんの矛盾点は気づいてたからね」

「え？　ヤバそうに見えたのに？」

「僕は集合論研究してるもん。
集合と論理は密接につながってるって、言ったでしょ？

だからタレスちゃんの論理の矛盾は・・・
実は速攻見抜いてたんだよね～　ラッセル　ラッセル～♪」

ガッツポーズに満面の笑みを浮かべる部長。

「さ、最初から・・・　タレスちゃんの矛盾を知ってた？」

「いや、ほら。あーいう、上から目線の高ビーなヤツはさ・・・
勝てると思わせて、奈落の底に突き落とすのが・・・

僕的には、最高に気持ちいいのよ！　ラッセル　ラッセル～♪」

「・・・　・・・・」

Ｓじゃない。超ドＳだ・・・

こうして私達は・・・　哲学バトル団体戦、初戦を

「僕の活躍により、１勝をあげたのであった～　ラッセル　ラッセル～♪」

（第２６話へ続く）

第25話　ラッセル　VS　タレス（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

哲学バトル、第2試合は・・・　デカルトちゃん　VS　フェルマーちゃん

デカルトちゃんが勝てば、第3試合を待たず団体戦勝利が決まる。

デカルトちゃんといえば・・・　哲学史に残る名言【我思う、ゆえに我あり】。

この言葉をひっさげ、これまた数学史に名を残すフェルマーちゃんに挑む！

次回　「　第26話　　デカルト　VS　フェルマー　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２６話　デカルト　ＶＳ　フェルマー（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。もう１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。クラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達３人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジャンちゃんの３人で・・・

哲学バトルが始まった。第１戦はラッセルちゃんが、タレスちゃんに勝利！

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２６話　デカルト　ＶＳ　フェルマー

第２６話　デカルト　ＶＳ　フェルマー

「ほら・・・　デカ子、次はあんた」

部長はデカルトちゃんの背中を押した。

「はわわ～　心の準備がまだです～」

「相手は・・・」

「ふぉえっ　ふぉえっ　ふぉえっ。ルネが出るなら・・・
余(よ)が、相手をしてしんぜよう」

銀髪のフェルマーちゃんだ。

『さぁ、西田先生。もうすぐ第２試合が始まります。
どうやらデカルトちゃんと、フェルマーちゃんの対決のようですね～』

『同世代対決です。これもまた、見物ですよ。
因縁の対決と言っていいでしょう』

『因縁？　この２人は何か・・・？』

『そうなんですよ、茂木ちゃん先生。
まず２人の担任である、パスカルちゃんについて少し・・・』

『【人間は考える葦である】・・・　で、有名な?』

『そうです。パスカルちゃんは2人の担任なんですが・・・
デカルトちゃんと【神】に関して対立しています』

『【神】ですか。これまた、重いテーマですね』

『まぁちょっと長くなるので、この対立のいきさつは割愛します。
パスカルちゃんとデカルトちゃんは、溝がある事を覚えておいて下さい。

そしてフェルマーちゃんは、パスカルちゃんのお気に入りです』

『ほう・・・　もう少し、くわしくお願いします。西田先生』

『フェルマーちゃんは、性格的に一癖(ひとくせ)ある生徒なんです。
なんていうか・・・　数学の問題を、他の生徒にだしまくって・・・

それを解けないと、バカにするみたいな』

『・・・　ぶっちゃけ、クラスに絶対1人はいる【ヤ】な生徒ですね』

『ただ、フェルマーちゃん。仕事は出来る子。
そしてパスカルちゃんは、先生のくせにギャンブル好き。

何とフェルマーちゃんと共に、確率論を研究しています。
えぇ、ギャンブルに勝つためにです』

『担任は担任で・・・　教師なのにギャンブル好きですか。
しかも生徒を巻き込んで、ギャンブルに勝つ研究をしている？』

『さらにフェルマーちゃんとデカルトちゃんも、すっごい仲が悪いのです』

『今回は登場してないパスカルちゃん先生ですが・・・
とにかくパスカルちゃんとフェルマーちゃんは仲が良く・・・

2人は、デカルトちゃんと対立関係にある・・・
と、いう事ですね？　西田先生』

『はい。わかりやすくいうと・・・』

『あ、なんか【ヤ】な予感がしますね・・・』

『【小公女セ●ラ】です。ミンチ●先生と生徒のラビ●アが・・・
セ●ラをいじめる関係だと思ってください。

いわば今回は、ラビ●アＶＳセ●ラですね。
まぁ、デカルトちゃんもお人形さんでなく、亡霊さんに話しかけ・・・』

『さぁ！！　第2試合！　西田先生、ゴングをお願いします！！』

『え？　まだ、サイコロ振ってませんよ？』

『じゃ、私が・・・』

カーン！！！

『茂木ちゃん先生・・・　それ、私の仕事・・・』

「さぁ、デカ子。勝てば、ここで僕たちの勝利が決まるわよ！」

「は、はいです～　でも・・・　フェルマーちゃん、苦手です～」

「デカ子、いつも言ってるじゃん。
【あの、いまいましいフレンチマドモアゼルめ】って！」

「こら。聞こえてるぞ、そなた達・・・」

すでに屋上の中央・・・　バトルが行われる地点で、フェルマーちゃんは待機している。

「それはウォリスちゃんの言葉です～。デカちゃんが言ったのは～
【フェルマーちゃんは、大ボラふき！】です～」

「こらこら。余(よ)にも聞こえてるって・・・」

向こうで、ボソッとフェルマーちゃんが呟(つぶや)いているけど・・・

「あれ？　そうだった？　僕の記憶じゃ・・・
【お前のおでこ、広いんだよ。ホントはハゲだろ？】じゃなかった？」

「違います～。【担任とつるんで、ギャンブルしてんじゃねーよ】です～」

「おい・・・　だからそなたたち・・・」

「あれれ？　確か【死ねばいいのに】だったような？」

「違います～。【宇宙一の嫌われ者】です～」

「こらーー！！！」

『おっと・・・バトル前に、激しい舌戦。
でも、これは哲学内容を含んでいないので・・・
バトルの勝敗には関係ありません。ですよね？　西田先生』

『はい。ただ、デカルトちゃんはフェルマーちゃんをかなり嫌っている。
それは伝わりますね～　この勝負、どうなるか私にもわかりません』

『おっと！　業を煮やしたフェルマーちゃんが、サイコロを振りました。
出た目は・・・　【存在】！　【存在】です！！

デカルトちゃんは【我思うゆえに我あり】で一躍名を残しましたよね？
このテーマは、デカルトちゃんに有利に思えますが・・・　西田先生？』

『いえ。必ずしも・・・　彼女に有利とは言えません』

『と、言いますと？』

『確かにデカルトちゃんも・・・
【存在】について、自分なりの論理を持っています。
ただ、その論理も完全ではないんですよ。
まぁここは・・・　バトルを見守りましょう』

『わかりました。では【存在】をテーマに・・・　第2試合開始です！』

「ふぉえっ　ふぉえっ　ふぉえっ。余も、ルネも・・・　存在しておる。
トリビアルではないかね？」

『西田先生、トリビアルとは？』

『この場合は【自明】【あきらか】という意味。
数学用語の1つです』

「デカちゃん達が存在している？　それはどうかしら!?
実は誰かの夢の中で、実際には存在してないかもしれないじゃない！」

「ふぉえ？　公理的だと思うのだが・・・　ルネは賛同しかねると？」

『【公理】というのも、説明お願いしていいでしょうか？　西田先生』

『これも数学用語です。
証明や論証の必要がない、明らかで根本的な命題の事ですね。
簡単に言えば・・・　【私達が存在している事を、疑う余地ある？】』

と、フェルマーちゃんは言ってます』

『なるほど。まぁ、我々がいる・・・
存在するのは当たり前のような気がしますが？』

『ところがですよ、茂木ちゃん先生。
デカルトちゃんは、ここからなんですよ・・・』

『ここから？』

「これで、どうじゃ？」

フェルマーちゃんが突然・・・

バチン！！

デカルトちゃんの頬（ほほ）を平手打ちした。しかも結構、思い切り。

「ほれ？　痛かったじゃろ？　それこそルネが・・・
存在している証（あかし）じゃ」

「・・・　・・・・」

頬を赤くはらし、涙目のデカルトちゃんだが・・・

「まだわからないもん！　デカちゃんがイタイと思ってるだけで・・・

・本当は、痛みなんてのも【まやかし】かもしれないもん！！」

相手に対し、屈しない。

「・・・　痛いんじゃろ？」

「痛いけど・・・　それは・・・

亡霊さんがそう思わせてるかもしれないもん！」

「・・・　・・・・」

しばらくデカルトちゃんを見つめていたフェルマーちゃん。溜息をついた。

「ふぉえっ　ふぉえっ。ルネよ・・・　では、お前はこう言うのか？

この世に存在しているものなど・・・　何も無いと？」

「違うもん！　存在する事はトリビアルなんかじゃない！

証明が必要だって・・・　そう言ってるもん！！」

「ほう・・・　存在する事を証明とな？　では聞くが・・・　どうやって？」

『存在を証明ですか・・・　難しいと思うのですが？　西田先生？』

『えぇ、彼女は独自の理論で、例えば【神】の存在を示していますが・・・
パスカルちゃんから【幾何学的精神】と批判を受け・・・
対立するきっかけの1つになってます』

『ふ～む。今回は何の存在を・・・？』

『おそらく【自分】、もしくは【相手】の存在でしょうね』

「デカちゃん的には・・・　疑う事は萌え～」

突然のデカルトちゃんの【萌え】発言に・・・

「　？　」

フェルマーちゃんは首をかしげる。

「デカちゃんは、今・・・　全てを疑ってます！
でも、1つだけ疑えないものがあります！」

「ふぉえ？　それは、何ぞよ？」

「【疑っているデカちゃん】です！」

「ふぉえ？　よくわからんの～」

「デカちゃんは・・・　全てを疑いました！！
自分の存在すらも・・・

でも・・・　でも・・・
【疑ってるデカちゃん】だけは・・・　疑えない！！」

「ふぉえ？」

「【疑ってるデカちゃん】の存在を・・・
疑おうとした瞬間、またデカちゃんは疑ってるわけで～
どうやっても疑えない【疑っているデカちゃん】はいるんです～！」

『えっと・・・　西田先生、解説お願いしていいでしょうか？』

『いやです』

『え？　え？　まさかの解説拒否ですか？』

『ま、ぶっちゃけ言いますけど。私、西田もですね・・・
あまりデカルトちゃん、好きじゃないんですよ』

『お～っと！！　何とデカルトちゃん・・・
純粋無垢の天然系ボケキャラなのに・・・　何故か嫌われ者ですか！？』

『まぁ、西田哲学の中には【デカルト批判】があるんです。
実はこのバトル。冒頭からフェルマーちゃんの話はしましたが・・・

デカルトちゃんの話は、極力最小限に抑えてたんです』

『言われてみれば・・・』

『【デカルト批判】をする哲学者、結構多いですよ。
てなわけで、デカルト理論の解説は・・・

主役のピタゴラスちゃんに任せましょう』

『まさかの仕事放棄！
同時に、【デカルト批判】は広範囲に渡っていると・・・

意外な事実を知る事になりました！』

『1つだけフォローしておきましょう。
たいした理論でなければ、批判自体が出てくる事はありません。

無視されるだけですからね』

『まぁ、そうですよね』

『つまりデカルトちゃんの理論は・・・
周りに影響を与えるだけのものだった。

それは私も認めていますので。

はい！　これ以上、彼女には触れません！』

『なるほど～　果たしてデカルトちゃんの哲学はどう展開されるのか？
その解説は、ピタゴラスちゃんに譲りましょう～』

「我思う・・・　ゆえに我ありよ！！
この事実だけは、どんな亡霊さんも太刀打ち出来ないわ～！！」

デカルトちゃんなりに色々考えた結果、【疑っている自分の存在】だけは疑えない事を導いた。彼女の言う【我思う】っていうのは、【我疑う】という意味で捉えていい。

【私は全てを疑ったが、疑っている自分の存在だけは疑えない。
疑おうとした瞬間、疑う自分が存在するからだ】

＝【つまり疑う自分はいる】

＝【我思う、ゆえに我あり】

まぁ、こんな論理展開で彼女は・・・
【疑う自分は存在する】事を証明したと主張するわけだ。

「さぁ！　どんな亡霊さんも・・・　かかってきなさ～い！！」

妄想力はなかなかのものだと付け加えておく。

「ふぉえっ　ふぉえっ　ふぉえっ　なかなか面白い理論じゃが・・・」

フェルマーちゃんは、まだまだ余裕といった表情だ。

「ルネの論理は間違っておるぞ・・・」

「何ですって!?」

「【我思う】と【我あり】の間には・・・
【思う者は存在する】という命題の証明が必要じゃ。

ルネの論理は、三段論法を無視しておる」

『西田先生？　三段論法の説明だけでも、お願いできますか？』

『【A→B】かつ【B→C】が成り立つとき、【A→C】も成り立つ。
これが三段論法です』

つまりフェルマーちゃんの反論はこう。

？【私は疑う】　？【疑っている者は存在する】　？【私は存在する】

デカルトちゃんは、この真ん中？の命題を証明する必要があるという。でなければ【私は疑う】から、【私は存在する】を導いた事にはならないというのだ。

「そ、そんな事ないもん！

疑ってる私・・・　いるもん！」

「それも亡霊の仕業かも・・・　ふぉえ？」

「だって・・・　だって・・・　デカちゃん、疑ってるのよ！
疑ってる自分は・・・　疑えないでしょ！？

疑った時点で、疑う自分がいるんだから！！」

「どうやってそれを証明するのじゃ？」

「どうって・・・　私、疑ってるもん！　それは当たり前でしょ！
！」

『勝負ありましたね・・・　デカルトちゃんの負けです』

『え？　西田先生・・・　まだ決着は早いのでは？』

『第1試合とは逆の立場になりました。まぁ、見ててください・・・
』

「ルネよ・・・　気づかぬか？
【疑ってる私】を、証明無しに認めるという事は・・・

余が最初にトリビアルといった事と同じじゃぞ？」

「はわ！？」

「つまりルネは、余と同じ方法で存在論を語った。
それすなわち・・・　ルネ、お前の負けじゃぞえ？」

「ぐ・・・」

言葉に詰まるデカルトちゃん。とうとう・・・

「うわ～ん・・・」

泣き出しちゃった。

『なるほど。これは勝負ありですね、西田先生』

『はい。では・・・』

カン　カン　カン！！

『ここでゴング！　試合終了！　勝者はフェルマーちゃんです！！
何と専門は法律学で、数学を趣味としているフェルマーちゃん。

哲学を専攻していないにも関わらず・・・
デカルトちゃんを見事破りました！！　西田先生、感想を！』

『まぁ、存在する事についてに結論を得たわけではありませんが・・・

デカルトちゃんを泣かせたんです。

つまり、己の哲学を語るための言葉を奪った。
１対１の勝負としては、決着ありですね』

『第1試合同様・・・
フェルマーちゃんが、カウンターパンチを食らわせた形になりました～』

『さっきもチラっと【デカルト批判】について言いましたが・・・
カントちゃん、ニーチェちゃん、ハイデガーちゃんなどなど・・・・

【デカルト批判】の上で、近代哲学が発展していくわけです。
そういう意味で、やっぱりデカルトちゃんの哲学的業績は大きいですよ』

『おや？　西田先生。急にデカルトちゃん擁護する発言をしますね？』

『まぁ、私も・・・
【デカルト批判】で、少しばかり名をなしましたからね。はっはっは』

『というわけで・・・
これで【タイムトラベル組】、【過去組】ともに1勝1敗。

決着は、第3試合・・・
ピタゴラスちゃんVSラマヌジャンちゃんで決まります！！』

（第27話へ続く）

第２６話　デカルト　VS　フェルマー（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

１勝１敗で迎えた第３戦。私は、ラマヌジャンちゃんと相対（あいたい）する。

ラマヌジャンは完全にペースを掴み、私は防戦一方。

そしてラマヌジャンちゃんの予言通り、私は・・・

次回「第２７話　ピタゴラス　VS　ラマヌジャン」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２７話　ピタゴラス　ＶＳ　ラマヌジャン　（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。クラスメイト・タレスちゃんが屋上から落ちそうになり、部長はそれを救う。それがきっかけとなり私達３人と、【過去組】タレスちゃん、フェルマーちゃん、ラマヌジャンちゃんの３人で・・・

哲学バトルが始まった。第１戦はラッセルちゃんが、タレスちゃんに勝利！
しかし第２戦はデカルトちゃんが、フェルマーちゃんに敗北。
１勝１敗で向かえ、勝負の行方は・・・

第27話　ピタゴラス　VS　ラマヌジャン

第27話　ピタゴラス　VS　ラマヌジャン

「ふえ～ん・・・　負けちゃったです～」

「お～　よしよし。デカ子は頑張ったよ。
大丈夫、大丈夫・・・

あとはピタ子が何とかするから・・・」

「う・・・」

大きなプレッシャーがのしかかる。だって、ラマヌジャンちゃん・・・

「この子、【インドの魔術師】って異名を持ってるからね。
僕の知る限り、数字の感覚は世界一だわ」

って、部長言ってたし。

「・・・　・・・」

わ。ラマヌジャンちゃん、こっち見てる。

「ほら、ピタ子。早く行って、勝ってきて！
もうお昼過ぎよ。とっととバトル終わらせないと。

ルブラン君、何とかしなきゃいけないんだし」

「うん・・・」

そう。バトルは主要なポイントだけ描かれているけれど・・・　実際は1試合1~2時間で繰り広げられていた。

「もう12時過ぎ・・・」

過去の世界にきて5時間以上。なのにルブラン君を救う事に関して、全く進展がない。

「イ、インドの魔術師だろうと・・・」

哲学者ピタゴラスとして

「哲学バトルでは負けたくない！　い、いざ!!」

私は屋上の中央に歩み寄り・・・　インドの魔術師に相対(あいたい)する。

「どうぞ」

ラマヌジャンちゃんが、私にサイコロを渡してきた。私に振れと言ってるのね。上等。

「・・・　・・・」

私は無言で受け取り、サイコロを振る。

「ほし・・・」

サイコロが止まる前に、魔術師は言い放った。そして・・・

『出ました！　最終戦のテーマは【☆】！
テーマフリーです！！　それにしても西田先生。

今、ラマヌジャンちゃんは・・・
確かサイコロが止まる前に、目を言い当てましたよ？』

『う～ん。今のは、私にもわかりません。
とにかく彼女は、常人の脳とは別の・・・

神がかり的な何かを持ってますから。
我々では理解し得ない展開が・・・　待ってるかもしれません』

「な、なんでわかったの！？　【☆】が出るって！！」

「・・・　・・・」

ラマヌジャンちゃんは優しい目でこう言った。

「ナマギーリ女神のおかげで・・・」

またそれか。いや・・・

「未来は、決まっているから・・・」

何ですって！？

『おっと！　【未来】も、哲学のテーマの1つではありますが・・・

はて？　西田先生、彼女の発言の真意は？』

『う～ん。【ニュートン力学】的なものなのか・・・

あるいは【因果律】の事を言っているのか？

はたまた【ラプラスの魔物】なのか？』

『難しい言葉が、たくさん出てきましたね～』

『正直、言います。ラマヌジャンちゃんだけは、私も解説が難しいです。

とりあえず言葉の説明は置いといて・・・

バトルに注目しましょう～』

「未来が・・・　決まっている？」

ちょっと。

「えぇ。ナマギーリ女神が、そう言っています」

冗談じゃない。私はこの世界からしたら、未来から来たのよ。未来が決まってるなら、この世界でもルブラン君が死ぬって事になっちゃうじゃん。

「未来は・・・　決まってなんかいないわ！　さぁ、勝負よ！」

「ふふ。あなたはナマギーリ女神のおかげで・・・
未来を歩むのよ・・・」

ま、また・・・。だんだん頭に血が登ってきた私。

「な、何とでも言いなさい！　さぁ・・・」

って、どうやって勝負すんの？　何をテーマにすれば？

「あなた確か・・・　万物の根源（アルケー）は【数】だと言ってた子よね？
間違ってたら、ごめんなさい」

む！？　部長の時と同じテーマ【根源（アルケー）】か！？

「例えば時間、例えば位置、例えば元素だって・・・
全て数字で表すことが出来る！

万物の根源は、ズバリ【数】！！　文句ある！？」

部長の受け売りだけど。

「逆に数字がなければ・・・
私達はこの世界を表現することなど出来ないわ！」

反論できるかしら！？　ラマヌジャンちゃん！

『Ａ～ＨＡ～
ピタゴラスちゃんといえば、【万物は数なり】の言葉で有名。

いいセンついてると思いますが・・・　どうでしょう、西田先生？』

『かつてガリレオは・・・
【宇宙は数学の言語で書かれている】という言葉を残しています』

『A～HA～　深い言葉ですね～』

『数学を理解出来なければ・・・
宇宙に限らず、この世界に関して理解することは難しい。

ガリレオはそう言っていたんですね。なかなか哲学的だと思います。
ピタゴラスちゃんの攻撃は、ガリレオを彷彿とさせます』

『A～HA～　まずはピタゴラスちゃんの先制攻撃といった所でしょうか』

『でも、このままラマヌジャンが引き下がるとは思えません。
バトルに注目です・・・』

勝ち誇る私に、ラマヌジャンが口を開く。

「では・・・　あなた達が別世界から来たとしたら？」

え？

「それを、どうやって説明するのかしら？　【数】で説明できるの

？」

な・・・　今、私達が別世界から来たって・・・　そう言ったわよね？

『何と、西田先生!!
ラマヌジャンちゃんから、不思議な発言が飛び出しました。

まるでピタゴラスちゃん達が、未来から来た事を知っているような？』

『う～ん・・・　たまたまなのか、あるいは何かを知っているのか？

真意は分かりませんが、ひょっとしたら・・・』

『ひょっとしたら？　何でしょう、西田先生』

『最近世界的に研究が進められている・・・
【統一理論】についてちょっとお話を』

『統一理論？』

『４つの力を統一しようと試みる理論で、まだ未完成の理論です。
現在の物理学が、完成を目指している究極の理論なんですよ。

その候補として、数学の【超ひも理論】などがあります。
我々の住むこの世界を、物理・数学で説明しようとしていますが・・・』

『何やら、難しい話が出てきましたね』

『えぇ。我々の住む世界は、薄い膜のようなものだとして・・・
いくつもの膜が重なった世界とみなすんです。

その膜はブレーンワールド・・・
いわゆるマルチバースの中のパラレルワールド、別世界です』

『そういえば冒頭でも・・・
パラレルワールドどうこうと言ってましたが・・・

ちょっと、わからないですね～　西田先生』

『では結論だけ。数学的・物理的に矛盾のない理論だったとしても・・・
それが観測できないのなら、それが実在するともしないとも言えない。

素粒子の動向観測だけでは・・・
ブレーンワールドの存在を１００％示せないと言われているんです』

『それは、どういう・・・？』

『数学や物理にも限界があるという事です。つまり・・・』

『つまり？』

「この世界は、神なくして語り得ないって事ですわ。

断言します。

あなたのいう【数】では・・・
この世の全てを語る事は出来ない」

『ラマヌジャンちゃんの攻撃！
これは、ピタゴラスちゃんの【万物は数なり】を真っ向否定です！』

『えぇ。確かに【数】は、この世の多くの事を我々に教えてくれます。
でも【数】だけでは、この世を語るに限界がある・・・
神でしか語れない事がある・・・
それがラマヌジャンちゃんの主張かと思われます』

『A～HA～　さぁ、このラマヌジャンの哲学攻撃。
ピタゴラスちゃん、どう動くか？』

「ぐ・・・」

まるで私達が、未来から来た事を知ってるようなその口ぶり。

確かに・・・

何がどうなって、私達が過去の世界にいるのか・・・

今の私には説明できない。

『おっと・・・　ピタゴラスちゃんが言葉に詰まってますよ、西田先生?
これは早くも勝負ありか?』

「このまま勝負がつくのも・・・　興ざめだわ。
いいわ。あなたの土俵で戦ってあげる」

『むむ!?　何と・・・
勝利目前と思われたラマヌジャンちゃんから・・・』

「あなたの代名詞は確か・・・　【ピタゴラスの定理】よね?
いいわ。直角三角形で勝負してあげる!」

『何と、直角三角形での勝負の申し入れが!!　に、西田先生・・・
直角三角形で・・・　何をどう、勝負するのでしょう?』

『さぁ?　私にもわかりません。
ラマヌジャンちゃんも私のクラスの生徒ですが・・・

正直、彼女は私にも掴めない所が多くて・・・
ただ、神に選ばれし天才・・・　それだけは間違いないと思います』

『何と、神に選ばれし者が・・・　私達の目の前にいるわけですね』

『えぇ・・・　ただ・・・』

『ただ?』

『・・・　いや、勝負を見守りましょう』

「直角三角形の3辺のうち・・・　底辺が12345としましょう。

高さと斜辺が1つ違いの整数になるなら・・・

それらの長さは何かしら?」

「・・・　・・・」

面白い。私にそんな簡単な問題を出すなんて。

【a＾2＋b＾2＝c＾2】を満たす【a，b，c】をピタゴラス数と言う。それを求める手順は、すでに確立されている。

私は自分のリュックから、紙と鉛筆を取り出し・・・　計算を始める。

数分後

「12345＾2　＋　761995 12＾2　＝　761995 13＾2

すなわち、残り2辺の長さは・・・

７６１９９５１２と７６１９９５１３よ！」

「・・・　・・・」

しばし沈黙のラマヌジャンちゃん。

「ちょっと時間がかかり過ぎだけど・・・　正解を認めるわ」

よし！！　自信はあったけど、一安心！！

「今度はあなたが・・・　何か問題を出して。
直角三角形でも、何でも構わないわ。

私が答えられなければ・・・　あなたの勝ちでいい」

え？　それでいいの？

「じゃ、じゃぁ・・・　とびっきり難しいの、出すわよ？」

「どうぞ・・・」

最近本で読んだの。オイラー予想ってのを・・・

「ｘ＾４＋ｙ＾４＋ｚ＾４＝ｗ＾４　・・・　これを満たす自然数はあるかしら？」

私の定理と似ていたから、ついつい覚えちゃったのよね～。数学界の大天才と言われるオイラーちゃん。オイラーちゃんは【フェルマーの最終定理】に挑戦していく中で、この問題に直面したという。

そして上式を満たす自然数はない・・・　そう予想したんだけど。

「そんな・・・　簡単な問題でいいの？」

「え？」

実はオイラー自身、この問題に対し・・・　正しいという証明も与えられず、反例（正しくない例）を見つけることも出来ずにこの世を去った・・・　そう、本に書かれてあった。あの大天才ですら、証明出来なかったのよ。

「９５８００＾４　＋２１７５１９＾４＋４１４５６０＾４　＝４２４８１＾４
どう？　その方程式を満たす例よ・・・」

「な・・・」

あ、当たってる・・・

「せ、正解・・・」

この反例が見つかったのは・・・　オイラーちゃんが亡くなって、実に２００年以上経ってからの事。それを・・・

ラマヌジャンちゃんはあっさり？

「な・・・　なんで？」

彼女も、その本を読んだの？

「ナマギーリ女神のおかげ」

う・・・　続けてラマヌジャンちゃんは言う。

「私・・・　今日のお昼、3時までに病院へ行かなくちゃいけないの。

だから2時には、学校を早退する事になっているわ。

時間がないから、今から私が出す問題・・・

それが最後の問題という事にしていただける？」

「え・・・　えぇ、いいわ・・・」

つ、次が最後の問題・・・

「あなたが答えられたら、あなたの勝ちでいい・・・」

「の・・・　望む所よ！！」

あぁ、言っちゃった。もし、オイラー予想みたいな問題出されたら・・・　負けちゃうよ～。

「じゃぁ、問題。

【世界全ての人がナマギーリ女神を信じていないならば、人類は滅びる】

この命題は正しいかしら？　答えは【真】か【偽】の2択。

当たればあなたの勝ち。ハズれれば私の勝ち・・・」

「・・・　・・・」

『おっと～、西田先生！　答えは２つに１つの、最終問題。
しかも【神】がらみです！
果たしてこの勝負の行方は！？』

『・・・　・・・』

『西田先生？』

『あ、失礼。やっぱりラマヌジャンちゃんは・・・
ピタゴラスちゃんに勝たせようとしていますね～』

『え？　そ、そうなんですか？　でも確かに・・・
勝利目前、いきなりピタゴラスちゃん得意の直角三角形問題を出したり・・・

思えば、途中の数学の問題は・・・　全く、哲学に関係ありません。
不思議ちゃんキャラとはいえ、勝つ事にこだわってないような気がしますね？』

『えぇ。ラマヌジャンちゃんは、勝とうと思えばとっくに勝ってます。
間違いありません。ピタゴラスちゃんの勝利を・・・

彼女は願ってます』

『では・・・　ピタゴラスちゃんは、この問題に答えられると？』

『もちろん。ところで茂木ちゃん先生は・・・
【世界全ての人がナマギーリ女神を信じていないならば、人類は滅びる】
この命題の真偽、わかりますか？』

『世界全ての人がその女神を信じなくても、人類が滅びるとは思えません。
よってその命題は・・・　偽です。
どうです？　西田先生？』

『まだまだですね～　茂木ちゃん先生』

『え？　間違いですか？』

『さぁ、どっちでしょう？』

「そんな・・・　簡単な問題でいいの？」

さっきのラマヌジャンちゃんのセリフを奪った私。

「【真】よ！　間違いない！」

『おや？　【真】なんですか？
じゃぁ、全ての人がナマギーリ女神を信じなければ・・・

人類は滅びると？　とてもそうは思えませんが・・・　西田先生？』

『解説は・・・　ピタゴラスちゃんに預けます。
茂木ちゃん先生も・・・　彼女から学んで下さい』

「前提の【世界全ての人がナマギーリ女神を信じていない】・・・
実は、これ自体が【偽】。

【全て●●】の否定は、【少なくとも1人は●●でない】。
ラマヌジャンちゃん、あなたはナマギーリ女神を信じているんでしょ？」

「えぇ・・・」

彼女は嬉しそうに笑った。

「あなたがナマギーリ女神を信じている時点で・・・
前提は【偽】って事よね？」

「えぇ・・・」

ラマヌジャンちゃんは、さらに嬉しそうに笑った。

「【pならばq】という命題は・・・
前提のpが偽の時点で、【真】になる。

だからあなたの言った命題は【真】！！　どう？」

「うん・・・」

笑顔のまま、頷くラマヌジャンちゃん。

「あなたの勝ちよ。おめでとう・・・」

『おっと！　何とラマヌジャンちゃん・・・　自ら敗北を認めました！』

カン　カン　カン！！

『ピタゴラスちゃんの完璧な解説。私の出る幕、ありませんでしたね～』

『って事は・・・　今回の【爆哲、オンエアバトル】団体戦は・・・

2勝1敗で【タイムトラベル組】の勝利です！！

西田先生、最後・・・　まとめてください』

『今回バトった6人は全て・・・　著名な数学者でもあります。そのせいでしょう。

全ての勝敗は、論理（ロジック）のスキをついて決まりました。

哲学と論理は密接に繋がってます。視聴者もいい勉強になったのでは？』

『私も勉強させて頂きました～』

『数学や化学、物理学や科学などなど。それら学問の発展と共に・・・
・
新しい思想や論理が導入され、哲学自体も大いに発展してきました』

『A～HA～』

『学問だけでなく、全てのものは哲学に通じ・・・
哲学もまた、全てに通じます。

視聴者の皆さんも・・・
日常にあふれる哲学に触れてみてはいかがでしょうか？』

『ステキな言葉、ありがとうございます、西田先生。では・・・
来週のこの時間も、お楽しみに～♪』

「・・・　・・・」

握手を交わした私とラマヌジャンちゃん。彼女の手はとても冷たかった。

「おめでとう」

「ありがとう・・・」

勝った事は嬉しいけど、ちょっと複雑な気分。

「ね？　ナマギーリ女神のおかげで・・・
未来を歩いていけるんでしょ？」

ラマヌジャンちゃんのいう【ナマギーリ女神】を信じてないのに・・・

「うん・・・」

ある意味その女神のおかげで、勝利する事が出来た私。

「なんで・・・　私に勝たせてくれたの？」

彼女が私を勝たせてくれた・・・　それは私自身が1番感じている。

「・・・　・・・」

しばらくの沈黙の後

「その理由は・・・　もうすぐあなた自身、わかる事になる・・・」

「・・・　・・・」

相変わらず不思議なオーラを放っている。

「じゃぁ・・・　私、病院に行くから・・・」

そう言うと彼女は・・・　笑顔のまま、屋上の出口に向かった。

「今度は・・・　負けませんわよ～」

タレスちゃんも

「ルネも・・・　もっと成長せんとな～　ふぉぇ　ふぉぇ・・・」

フェルマーちゃんも、ラマヌジャンちゃんに続いて屋上を後にした。

「はわわ～　Pちゃん、勝利おめでとうです～！」

「とりあえず団体戦、僕達の勝利～！！」

「う、うん・・・」

この時の私達は気づいていなかった。

ラマヌジャンがついていた1つの嘘を・・・

・・・　・・・。

10分後。

学校を背に、歩道を歩くラマヌジャンちゃん。

「・・・　・・・」

ある人物と遭遇する。

「ありがと・・・」

その人物は、お礼の言葉を口にした。

「あれで・・・　よかった？」

優しい笑顔のラマヌジャンちゃん。

「うん。ホントに・・・　ありがとう」

その人物は・・・　冷たい彼女の手を、しばらく握り続けた。

（第２８話へ続く）

第２７話　ピタゴラス　ＶＳ　ラマヌジャン　（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

部長がたてた作戦で、私達は二手（ふたて）に分かれて行動する事に。

私はポール公園に行って、過去の私をルブラン君の家に向かわせるように。

そして部長とデカルトちゃんは、ルブラン君の家に行って・・・

次回「第２８話　作　戦」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第２８話　作　戦（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

屋上にいた私達。哲学バトルに勝利し、ようやくルブラン君を救うために動き出す。

第２８話　作　戦

第２８話　作　戦

「生乳(なまちち)～！！　この僕が哲学に夢中になって・・・
生乳忘れるとは～！！」

いや、哲学に夢中になれたんなら・・・　哲学者として、いい事では？

「そ、それよりさ。もうすぐ昼の２時よ？
全然、ルブラン君の事・・・　進展してないんだけど？」

「確かに～　デカちゃん達、この世界に来て～
ルブラン君の為に、何１つ行動起こしてないです～」

「そだね～　う～ん・・・」

しばらく悩んだ部長。

「ここは二手(ふたて)に分かれよう」

「二手？」

「僕とデカ子は、ルブラン君の家に。ルブラン君の様子を探ってくる。
ピタ子は・・・　なんとか過去ピタを、ルブラン君の家に連れてきて。

過去ピタと、過去ルブラン君をくっつけてあげるから」

それは嬉しいけど・・・

「私が過去の自分に遭遇すると・・・　マズいのよね？
部長やデカルトちゃんが、過去の私を連れてきた方がいいんじゃない？」

「過去の僕やデカ子も、過去ピタと一緒に行動してるわけだし・・・
みんな、過去の自分と遭遇する可能性はある。リスクは同じよ」

それもそうか・・・

「まぁ、ピタ子のルブラン君なんだからさ。
過去ピタの件は、ピタ子が頑張ってよ。

デカ子は、ルブラン君のクラスメイトって事で・・・
彼を呼び出すのに必要だからさ」

「わ、わかった・・・」

とにかく過去の私に直接会うことなく、過去の私をルブラン君の所へよこせばいいわけね？

「デカ子は、私と行動する事。絶対１人になっちゃダメよ！」

「はいです～」

デカルトちゃんだけは絶対１人にしちゃいけないタイプ。

「デカ子の役目は、ルブラン君を家に閉じ込めておくか・・・
あるいは家から引きずり出して、交通事故の起きない場所へ案内する！
とにかく事故の遭った場所から遠ざける事！　それがデカ子の使命！」

「了解です～」

部長と別行動ってのは心細いけど・・・

「必ず過去の私を、ルブラン君の家によこすから・・・
絶対くっつけてよ！！」

現在に戻った時、ルブラン君の彼女になっていると信じて！

「任せて！　僕、恋のキューピッドになってみせるから！」

「デカちゃんも～　Pちゃんの恋の成就のため、頑張るです～」

私達3人は右手を下に向け重ねた。

「携帯は通じるからさ。何か動きあったら、こまめに連絡し合う事」

「うん」

「はいです～」

「あと最初に言ったように・・・
あまり、ここの世界の住人と接触しない、過去を変えない！

ただし、ルブラン君を救う事だけは例外ね」

まぁ、ついさっきまで・・・
がっつり過去の住人とバトってたけどね。

「絶対・・・　絶対ルブラン君、助けるわよ!!
頼んだわよ、部長！　デカルトちゃん！」

「ラッセル　ラッセル～」

「はいです～」

こうして・・・

私は、ポール公園へ。部長とデカルトちゃんは、ルブラン君の家へと向かった。

・・・　・・・。

非常口から校舎を出て、裏口から学園の外へ出た私。まず最初に楕円野商店に向かい、変装用のコートと帽子を買う。その後、ポール公園へと向かった。

「・・・　・・・」

しばらくトイレの前のベンチに座る私。携帯の時計を見ると午後４時過ぎ。過去の私がここに現れるのは、今から１時間後だ。

「・・・　・・・・」

タイムスリップから9時間以上が経過している。この世界にいられるリミットは２４時間。その3分の1が過ぎているのに・・・

「まだ、何の進展もない・・・」

沈みかけた私は深呼吸する。ここで焦ってはいけない。過去の私がここへ来るまで、心を落ち着かせなければ。

「・・・　・・・・」

もし、ルブラン君が私のラブレターを受け取って・・・　ここに来てくれたなら？

私はどんな気持ちになって、このベンチに座っていただろう？

そんな妄想は、私の中の使命感を増幅させる。

「よし・・・」

何が何でもルブラン君を助ける！！

私はリュックからレターセットと筆記用具を取り出し、便せんの上にペンを置く。

「・・・　・・・・」

ここはやはり・・・

・・・　・・・。

「ふ～・・・」

携帯の時計を見ると、５時ちょっと前。あっという間に１時間近くが過ぎていた。そろそろだと思った私は、過去の私がやって来る方向と反対側へ移動する。

大きな木の陰に隠れた私。楕円野商店で買ったブカブカの帽子をかぶり、黒い大きめのコートを着ける。そして待つこと数分。

向こう側から、２日前の私達が姿を見せた。

「過去の・・・　私・・・」

何度見ても、自分自身を見るのに違和感がある。

「・・・　・・・」

私の視線の先・・・　３人はトイレへと向かった。２日前と全く一緒だ。

「・・・　・・・」

携帯の時計を確認すると、５時１１分。

「・・・　よし・・・」

１分後。

ドキドキしながら、私はベンチに向かった。トイレからこちらを見ている過去の私に、顔は見えないよう・・・

あのベンチに座る。そしてコートのポケットの中にある手紙を、さりげなく置いた。

過去の私が慌ててトイレから出てくる。私はその自分に捕まらないよう・・・　公園を走り去っていった。

過去の私は【犯人】（つまり、現在の私）を追いかけようとするが・・・　やがて歩を止め、ベンチの上の手紙に釘付けになる。

その手紙にはもちろん・・・

表に【ピタゴラスに告ぐ】、裏には【ｆｒｏｍ　Ｕ】と書かれている。

・・・　・・・。

「はぁ、はぁ・・・」

公園から少し離れた通りまで走ってきた私。

今頃、過去の私達は

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ!】

という内容を確認しているはず。そして過去の私はこう思っている。

犯人は私の性格を全くわかってない。【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私・・・　とね。

２日前の私、残念ね。そう書けばあなたは、絶対ルブラン君の家に行く・・・　でしょ？

１０分程歩き、駅前まで来た私。携帯を取り出すと部長に電話した。

「あ？　部長？　こちらはうまくいった！
過去の私、そっちに向かうわよ。そちらの状況は？」

「ピタ子・・・　それが・・・」

（第２９話へ続く）

第２８話　作　戦（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ルブラン君の家で合流した私達。ルブラン君は家にいなかった。

通りの向こうからルブラン君がやってくる。事故に遭ったその時間直前に。

部長の指示で私達は、ルブラン君に包囲網をしくんだけど・・・

次回「第２９話　過去を変えろ！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２９話　過去を変えろ！（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

私はポール公園に向かい、過去の私をルブラン君の家に向かわせる。そして・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２９話　過去を変えろ！

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２９話　過去を変えろ！

午後６時２０分。

ルブラン君の家・・・　すなわちサンジェルマン理事長の家から、少し離れた場所で部長達と合流した。

「わ・・・　ピタ子、何？　その、怪しい格好？」

過去の知人に会った場合の事を考え、ずっと変装していた私。

「私の格好なんてどうでもいいから！　いったい、どういう事？」

「はわわ～　ルブラン君、家にいなかったんです～」

部長の話はこうだ。

午後４時過ぎ、デカルトちゃんがクラスメイトという立場を利用してルブラン君の家を訪ねた。だけどロジェさんという執事が出てきて、ルブラン君は病院に行ってまだ戻らないと言ったらしい。

「ピタ子。ルブラン君が車にひかれたのって、何時頃？」

「えっと・・・　確か６時半ぐらい」

私は、向こう側の交差点を指さす。

「確か、あの交差点でひかれてたって聞いたわ」

「今、6時22分です～。あと8分ちょっとで・・・
ルブラン君、車にひかれちゃうです～」

「・・・　・・・・」

過去に来て、約12時間。

「思えば・・・」

私は・・・　思っていた事が素直に口から出た。

「？」

「12時間も過去にいるのに・・・
何1つ、この世界を変えていない」

そう。この世界は、2日前私達が体験した過去と・・・　今のところ何ら変わりがない。

「ホントに・・・　私達は過去を変えられるのかしら？」

弱気な発言だ。

「・・・　・・・・」

「はわわ～」

しばらく沈黙の時が流れる。

「大丈夫！」

突然、部長が大声を出した。

「タイムトラベルの弊害は・・・　多くの科学者の間でも議論されている。
代表的な3つの問題があってさ。
その1つが【時間順序保護仮説】。ホーキングちゃんの仮説よ！」

「時間順序保護仮説？」

「過去に戻って歴史を変えることは、様々なパラドックスをうむ。
だから、ホーキングちゃんは・・・
量子論的に、タイムトラベル自体が不可能だと言ってたの」

量子論的に・・・　不可能？

「でも僕たちはちゃんと過去に来た！
ホーキングちゃんの仮説は否定されたのよ！

じゃぁ、何故？　何故、僕たちは過去に来たの！？」

「・・・　・・・」

確かに私達は過去にいる。それは・・・　ルブラン君を救うため。

「過去を変えるため・・・」

「そう！　だから僕たちがここにいる！
過去を変えなきゃ、ここに来た理由がないっしょ！」

「その通りです～　デカちゃん達は～　この世界を変えるんです～！」

「・・・　・・・」

部長とデカルトちゃんに励まされ・・・　マイナスからプラス思考になってきた私。

「そ、そうよね・・・」

右手拳を握りしめる。

「ルブラン君を助けないと・・・」

「今までは確かに2日前と同じ世界だったかもしれない。
でも、これからルブラン君はあの道路に現れ・・・」

部長は、ルブラン君が交通事故にあった数m先の交差点を指さした。

「僕たちが何もしなければ、彼は車にひかれて死ぬ。
でも僕たちが事を起こせば・・・」

「ルブラン君は、死なないです～！！」

「う、うん。わかった・・・　絶対、ルブラン君を助ける！！」

5分後、ルブラン君はあの交差点に現れる。
どんな事があっても、私はルブラン君を助けてやる!!

「き、来ましたです～！」

え？　ちょっと早いわよ。

「Pちゃんです～！
過去のPちゃんが、ルブラン君のおうちに向かってるです～」

私達は電信柱の影に隠れ・・・　ブレーメンの音楽隊のように、過去の私が通り過ぎるのを見つめた。

過去の私は、しばらくルブラン君の家の周りをウロウロしている。

「ピタ子さ・・・　リアルストーカーだよね・・・」

「デカちゃんも～　ストーカーPちゃんには、ひいちゃいます～」

「ふん。ストーカーの何が悪いの？」

開き直る私。

「いや・・・　犯罪だし・・・」

ルブラン君の家の前、過去の私はその電信柱に隠れ・・・　じっと家の方を見つめている。

「・・・　・・・」

確かに・・・　客観的に見ると・・・

「イタイでしょ？　過去ピタ？」

「べ、別に・・・」

「エリ●様か！」

なんて、ふざけてるうちに・・・

「はわわ～　ルブラン君。やってきたです～！！」

「・・・　・・・」

息をのむ私。一気に緊張が増してきた。過去の私からは見えない位置・・・　愛しのルブラン君が交差点に向かって歩いてくる。

「はわわ～　胸抑えて、ちょっと苦しそうです～」

「病院の帰りよね？　何かの病気かしら？」

「デカ子！　ルブラン君に声をかけて、あのコンビニの中に入りなさい！」

突如部長が指示を出した。

「彼と接触するなら、面識のあるデカ子が自然。
車が入ってこない建物の中に入れるのよ！」

「は、はい！　デカちゃん、ルブラン君を助けるです～」

そう言うとデカルトちゃんは、ルブラン君の元へ走っていった。

「た、頼むわよ！　デカルトちゃん」

「ピタ子！　僕達も近くに行くわよ！
不測の事態があれば、すぐ対応できるよう！」

「わ、わかった・・・」

さすが部長。的確な指示。私達はルブラン君に気づかれないよう、彼に近付いていく。

「僕はコンビニの中で待機しておく。ピタ子は、コンビニの外で・・・
何か危険がないか、目を光らせといて」

「わ、わかった・・・」

1分後。私達が何もしなければ、ルブラン君は死ぬ。

「この1分が全て・・・」

・・・　・・・。

「ルッブランく～ん！！」

「あ・・・　デカちゃん・・・」

ちょっとたれ目で、高い鼻が特徴のルブラン君。線は細く、女の子と間違えられる事もしばしば。

「ルブラン君～　偶然です～　ほら！　このコンビニ～
アイス、3割引やってるです～　一緒に行くです～」

少し離れた位置で2人の様子を見ている私。

「デカルトちゃん、かなり無理のある誘い方・・・」

とにかく彼を建物の中に入れて！

「え？　と、突然？　それに今、3月だよ？　さむ・・・」

まるで女の子のような仕草で、デカルトちゃんに言葉を返すルブラン君。

「男はつべこべ言わず～　アイスクリームを豪快に食べるです～！
出ないと～　車にひかれちゃうかもです～」

デカルトちゃんが、ルブラン君の腕を強引に引っ張っている。

「・・・　・・・」

それを見ていた私。ちょっとジェラシー。でも建物の中に入ってしまえば、車にひかれる事は無いわよね。

「・・・　・・・」

反対側に視線を移すと・・・　交差点の赤信号で、1台のタクシー

が止まっている。

「あのタクシー・・・」

あれが多分、ルブラン君をひいたタクシーだ。

何故かって？

ナンバー【17－29】に見覚えがある。ラマヌジャンちゃんから、特別な数だって言ってたのと同じ数字。偶然とは思えない。あのタクシーが、ルブラン君を・・・

「・・・　・・・」

視線をルブラン君に戻すと、デカルトちゃんと共にコンビニの中へ入って行く姿が見えた。まぁコンビニ入ってしまえば・・・　あれ？

「だめ!!　デカ子!!　中はダメ!!」

コンビニの中に先回りしていたはずの部長が、突然外に出てきた。そして中に入ろうとしたデカルトちゃんとルブラン君を通せんぼする。

「な・・・　何が？」

「ほ、包丁持った強盗・・・　デカ子!　ルブラン君!　逃げて!!」

その部長の後ろから・・・　黒いサングラスにマスクをつけ、右手

に包丁を持った・・・　あまりにもベタ過ぎる強盗が現れた。

「ちょ・・・」

想定外の出来事に、私の頭はパニ・・・

「あ・・・」

交差点の信号が青になり、あのタクシーが動き出した。

「ま、マズイ!!」

私は一直線に、ルブラン君の方へ向けて走り出す。

「は・・・　はわわ～」

何とデカルトちゃん。ルブラン君の前に立ち、包丁持った男に対し盾になる。いや・・・

「ぼ・・・亡霊さんが・・・　まも・・・まもま・・・」

足がすくんで、動けないだけだ。ガクガクと足を震わせながら、泣きそうな表情を浮かべている。

「で、デカルトちゃん!!」

「で、デカ子!!　あんたも逃げて!!」

「何だお前?　オラ!!　邪魔だ!!!」

強盗はデカルトちゃんに包丁を向け・・・

「は・・・　はわわわわわ・・・」

包丁が目に入ったデカルトちゃんは、さらに足がすくんで動けない。

「デカ子に手を出すな～！！」

部長が横から強盗にタックルをかました。すっごい勇気！　しかし・・・

「ぐぁ！！」

横からタックルされ、バランスを崩した強盗は・・・

よろけながら、ルブラン君とぶつかる。

「うわ！！」

そして事もあろうに、ルブラン君と強盗の2人は・・・

道路に飛び出してしまったのだ。

「た、タクシーが・・・」

無我夢中だった。加速始めのタクシーを全速力で追い越した私。

考えるより先に体が動く・・・　私は道路で倒れたルブラン君に、上から覆い被さった。

「ピタ子～！！！」

「Pちゃん～！！」

私は・・・

過去を変える！！！

（第３０話へ続く）

第２９話　過去を変えろ！（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ついに私は・・・　ルブラン君を、タクシーから守った！！

過去を変えることに成功した・・・　かに見えたが？

次回　「　第３０話　冷たい両手　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３０話　冷たい両手（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人で連携を組んで、過去のルブラン君を救うため・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３０話　冷たい両手

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３０話　冷たい両手

ピーポー　ピーポー　ピーポー　・・・

救急車の音が鳴り響く。

「音だけでなくさ・・・　光にもドップラー効果があるんだよ」

部長が笑顔で私に言ってきた。

「はわわ～　Ｐちゃん、無事でよかったです～」

「う、うん。何とか・・・　ね・・・」

あの時・・・

とっさにルブラン君に抱きついた私は、彼にしがみつき目を閉じていた。急に道路に飛び出た私とルブラン君、そして強盗の３人。慌てたタクシーの運転手は急ハンドルをきり・・・　強盗の右足だけをちょこっとひいたのだ。

「いでーーーーー！！！」

悲鳴をあげた強盗。もちろんその場で動けるはずもない。部長がすぐさま１１０番＋救急車を呼び出した。とりあえず強盗は救急車に押し込まれ、警察はコンビニの店員に話を聞いているところだ。

「ルブラン君も～　無事でよかったです～」

「あ・・・　うん・・・　あ、ありがとう・・・」

ルブラン君はガードレールに座って、まだ頭の整理がつかないといった感じだ。それもそのはず。突然デカルトちゃんが現れ、コンビニに入ろうとしたら強盗が包丁をもって出てきて、突き飛ばされた。

さらに道路に出て、タクシーにひかれそうになったんだから・・・
パニックになるのも当たり前よね。

「な、何か混乱しちゃって・・・　その・・・　君達は？」

女の子のようなか細い声を出すルブラン君は、部長と私を交互に見た。

「あ、僕、ラッセルっていうんだ。【現代組】なの。
あなたは、ルブラン君・・・　よね？」

「う、うん・・・」

「デカ子が、君にクラスメイトとして伝言あるからって・・・
僕たちは付き添い。初めまして！」

部長のハキハキとした声に対し

「は、初めまして・・・」

ルブラン君の声はか細い。

「そうそう。こっちは、ピタゴラスちゃん。ピタ子は・・・　初対面？」

部長がうまい事、私の事も紹介してくれた。自然な流れでナイスアシスト！

「あ。う、うん・・・　でも、ピタゴラスちゃんは・・・
名前は知ってるんだ。ほ、ほら・・・　【ピタゴラスの定理】で有名だから。

は、初めまして・・・」

わ！　私の事、名前は知っててくれたんだ！　嬉しい！！

「は、初めまして！！」

笑顔で挨拶する私。

「う、うん・・・　よろしく・・・」

何となく、照れてる感じのルブラン君。

「・・・　・・・」

部長が私に合図を出している。何？

「ちょっと・・・　何か、脈ありみたいじゃん。チャンスよ！　ピタ子！
こういう時、男の子の手を握ってやんの。

死に直面したドキドキは、恋愛のドキドキだと錯覚するんだから。

ほら！！」

「う、うん・・・」

部長にうながされた私。両手で、ルブラン君の左手を握った。

「だ、だだ・・・　大丈夫？　ルル、ルブランくん・・・」

緊張で声が裏返る。ルブラン君は右手で、自分の胸を抑えている。

「う、うん。ちょっと・・・　胸が苦しいけど・・・」

お？　胸がドキドキしてる？　いや・・・

「ルブラン君・・・　顔色、悪い・・・」

息も切れてる。

「うん。僕、心臓が弱くて・・・　いつもの事だから・・・
ちょっと休めば・・・」

「ル、ルブラン君？」

顔が青ざめていく。それにルブラン君の左手、冷たい。

「ピタゴラスちゃん、優しいね・・・
僕は・・・　大丈夫だから・・・」

そう言うとルブラン君は、胸を抑えていた右手も私の両手に重ねてきた。

「あ・・・」

ルブラン君と両手を握り合ってる。それよりも両手の冷たさの方が気になる。

「はわわ～　ルブラン君、やっぱり気分悪そうです～」

「・・・　・・・」

しばらく様子を見ていた部長。

「デカ子。あんた、ルブラン君連れて病院行って。ちょっとヤバそうだし・・・」

デカルトちゃんに指示を出す。

「はわ？」

「何かあってからじゃ遅いんで、念のためよ。僕はここで、警察の事情聴取を受ける。

強盗がコンビニ入ってきた所から、車にひかれるまで・・・僕が1番よく見てたし。ピタ子は・・・」

今度は私に指示を出す。

「ちょっと、こっち・・・」

部長は私を、離れた所へ連れて行く。

「ピタ子は・・・　過去ピタを病院に向かわせて。
手を握る伏線ははったんだから・・・

後は過去ピタとルブラン君をくっつける。
病院で恋が芽生えるなんて、ベタだけどさ」

ベタでも何でもいい！　カップルになれるなら！

「う、うん・・・」

出来る事なら、今の私がルブラン君と・・・

「ピタ子、あんたは現代に帰るんだから。
過去のルブラン君に手を出しちゃダメよ？」

「わ、わかってる・・・」

察したのか、部長が私に釘を刺す。

「少なくとも、【ルブラン君が車にひかれる】って過去は変えた。
だったら次は・・・

【ピタ子とルブラン君が恋人同士になる】よう、仕向けないとね」

「う、うん。そうね・・・」

こうして私は・・・

「じゃ、じゃぁ・・・　ルブラン君。お大事に・・・」

「あ、うん・・・」

後ろ髪ひかれながら、その場を後にした。

・・・　・・・。

すでにルブラン君が死んでしまう過去は変えた。それは私にとって、大きな心の変化をもたらしている。だって、過去を変える事が出来たのよ！

今の私なら、何だって出来る気がする。

「・・・　・・・」

とはいえ・・・

あの電信柱の影にいるストーカーに対して、直接会うのはマズイわよね？

「う～む・・・」

何で私が、過去の私を病院に差し向ける仕事を？

部長は警察の事情聴取を受ける　↓　妥当

私がルブラン君を病院に連れて行く　↓　万が一、今の私と過去の

ルブラン君がくっついたら・・・

「・・・　・・・・」

むう。そうなりたい思いは強いけど、過去の人との遠距離恋愛はマズイかな？　いや、異世界恋愛？

どのみち私はこの世界にとどまれないし・・・　やっぱ、デカルトちゃんが病院行くのが正しいのか。

結論。過去の私を病院にさしむける仕事は、やっぱり私がやるべき。

「それにしても部長は・・・」

いつも的確な指示を出してくれる。部長がいなければ、ルブラン君を助けられなかったな・・・

本気でそう思う。

「・・・　さて・・・」

大きなコートを深く羽織り直した私。過去の私から死角となる電信柱に身を隠した。

「・・・　・・・」

過去の私は、熱心にルブラン君の家を見つめている。もはやストーカーを通り越して、何か1つの真理を究めようとしている崇高な人間に見えてきた。

「さすがピタゴラス教団の教祖様」

突然過去の私が振り返った。ヤバ！　つい声を出してしまった。まぁ、過去の私に見えないよう、ポジション取りは完璧だけどね。

「・・・　・・・」

【過去の私に直接会うことなく、病院へ向かわせる】

難しいミッションだけど、公園の時だって私はそれを成功させている。作戦は同じ。私はリュックから便せんと封筒を取り出した。

【ピタゴラスに告ぐ】

封筒の表にそう書いて

【ｆｒｏｍ　θ】

裏にはそう書く。そして便せんには・・・

【今すぐ、市立病院へ行きなさい！　ルブラン君、死んじゃうわよ！】

と、書いた。車にはひかれてないし、死ぬ事はないけどね。過去の私が焦って病院へ行く様(さま)を、ここで見ておこうっと。

「ふふふ」

ルブラン君を事故から救ったおかげで、思わず笑みがこぼれる。し

かし遠くから焦る私を見つめるなんて、悪趣味かしら？

私ってS？　あれ？　でも、自分自身をイジメてるから、この場合M？

どうでもいい事を自問自答していると・・・

「きた・・・」

家の主（あるじ）、そしてルブラン君の父親であるサンジェルマン理事長が向こう側から歩いて来る。

「・・・　・・・」

おそらくこの世界で、最後の仕事をする時が来た。

私は理事長の元へ走っていき・・・

「サンジェルマン理事長！！」

帽子を深くかぶったまま、声をかける。

「これを、あの電柱の所に立っている・・・」

過去の私がいる電柱を指さした。そして

「ピタゴラスちゃんへ渡して下さい！」

あの手紙を差し出す。

「君は？」

眉をひそめた理事長だが、手紙を受け取ってくれた。

「わ、私・・・　急いでいるので、失礼します！！」

「ちょっと・・・　君！！」

理事長と一度も目を合わさず手紙を渡した後、速攻でその場を走り去ろうとする。

「・・・　・・・・」

待てよ・・・

ピタリと足を止めた私。振り返って、今一度理事長に声をかける。

「手紙を渡した後、ルブラン君と連絡をとって下さい！
さっき、気分悪くなって市立病院へ行ったので！！」

「君は・・・　ルブランを知っているのか！？」

「じゃ、私はこれで・・・」

今度こそ私はその場を走り去った。

・・・　・・・。

事情聴取を終えた部長と駅前で合流した私。

「あ、ピタ子。さっきデカ子から電話あった。
ルブラン君、点滴うってるけど別に何ともないって」

「よ、よかった・・・」

それを聞いて、笑顔になる私。

「・・・　・・・」

「ん？」

部長が私の顔を覗き込んでいる。

「何？」

「いや・・・　ピタ子の笑顔。久しぶりに見たな～って」

「そ・・・」

そりゃそうよ。ついさっきまで・・・

ルブラン君、マジ死ぬかもって思ってたんだもん。

「で？　これからどうするの？
タイムマシンに戻って、現在へ帰る？」

「・・・　・・・」

しばらく迷った表情を浮かべる部長。

「念のため・・・　病院へ。
ルブラン君、もう1度確認してから帰ろうかな」

「え？」

そなの？　てっきりもう、現在へ帰ると思ってた。

「うん。ちょっとさ・・・　僕的に気になる事あって。
それだけ確認したら、戻るから」

まぁ、リミットまで時間はあるし。

「わ、わかった・・・」

部長は携帯を取りだし、デカルトちゃんにかける。

「あ、デカ子？　今からそっち行くからさ。そこで待ってて。
うん、そう・・・　じゃぁ、後で・・・」

う～む・・・　過去の私も、サンジェルマン理事長も病院に向かうのよね・・・

「部長やデカルトちゃんは大丈夫だろうけど・・・
過去の私も病院に向かうのよ。私が行って、大丈夫？」

「ピタ子は、とにかく過去ピタに会わないようにする。
それだけ守ってくれれば大丈夫よ」

う、う～ん・・・　出来ればルブラン君に会いたいけど・・・

「さ、行こ」

「うん」

この時の私達・・・

まさかこの後、あんな事が起こるなんて想像すらしてなかった。

そう・・・

まさか病院で、ルブラン君が・・・

（第３１話へ続く）

第３０話　冷たい両手（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ルブラン君を見舞いに行った私達。

顔色の悪い、ルブラン君を元気づけようとするが・・・？

次回　「　第３１話　静寂の時　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３１話　静寂の時（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人で連携を組んだ私達。見事過去のルブラン君を、交通事故から救った！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３１話　静寂の時

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３１話　静寂の時

「あ、Ｐちゃんにラッセルちゃん～」

ルブラン君のいる市立病院。その待合室から少しハズれたところで、私達３人は合流した。

「デカ子。ご苦労！　で？　ルブラン君、大丈夫？」

「はいです～。ルブラン君は～　最近、疲れ気味だったらしくて～　今、点滴うってるところです～」

「よかった・・・」

私達は過去に来て、ルブラン君の命を救った。

「大丈夫そうね。ねぇ、ピタ子。あんた2日前、病院に来たんでしょ？

過去ピタや、理事長が病院来るの・・・　何時ぐらいだった？」

「え？　私は・・・　確か、９時過ぎぐらいに病院に着いた。手紙受け取ってすぐタクシー乗ったんだけど・・・

間違って別の病院に行っちゃったから」

「あらあら。ルブラン君の事となると、ピタ子もドジ子になるわけか～。

理事長は？」

「私が病院に着いた時には、すでにいたわ。
何時に病院に来たのかはわからない」

「は～い！　デカちゃん、わかります～！
さっきルブラン君の携帯に～

お父さんからメールが来たって、言ってました～
９時頃、病院に来るそうです～」

「今、８時半か・・・　よし！
２０分ぐらいルブラン君見舞って、僕たちの世界に戻ろう」

ん～。見舞いたいけど、過去の住人とあまり関わっちゃいけないんじゃないの？

「僕、ルブラン君の様子を確認したいからさ」

この時の私は、部長が【ある事】を気にしているのに気づいていなかった。

「賛成です～！」

「わ、私も・・・　見舞っていい？」

「大丈夫だと思う。すでに僕たち３人・・・
過去のルブラン君と関わっちゃったしね」

「じゃ、じゃあ・・・
過去とはいえ、ルブラン君に・・・　また、会えるのね！」

笑顔になる私。だってついさっき、ルブラン君と初めて言葉を交わしたばかりよ。そしてまた彼を見舞う事が出来るなんて・・・

うん。いい感じで過去を変えている気がする。私とルブラン君、絶対くっつく運命にあるような気がする！

私達はデカルトちゃんを先頭に、ルブラン君が点滴を受けている病室へと向かった。

・・・　・・・。

「個室？」

「ルブラン君は～　時々～　短期入院する事があるって言ってました～
理事長が専用の個室を作った～　みたいです～」

「は～　億万長者は違うわね～。僕も錬金術師になろうかな～」

「２７１号室・・・」

ルブラン君の個室だ。そこに入っていった私達は・・・

顔色のよくないルブラン君を目にした。

「ルブラン君～　元気に点滴、うってます～？」

「あ、デカちゃん。また・・・　あれ？

ピタゴラスちゃんに、ラッセルちゃんも？」

「・・・　・・・・」

部長はじっとルブラン君を見つめ

「あ・・・　ルブラン君、大丈夫？
あまり顔色・・・　よくなさそうだけど？」

私は心配そうに声をかける。

「う、うん。いつもこうなんだ、僕。
でも・・・　何故、ここに？」

「そりゃあんた。胸を抑えたルブラン君を心配して・・・
３人でお見舞いにきたってわけよ～。手ブラだけどね」

言いながら部長は、両手で自分のおっぱいをわしづかみする仕草をした。

「・・・　・・・・」

多分、【手でブラジャー＝手ブラ】ってつもりのギャグだと思うんだけど・・・

「あ、ありがとう・・・」

苦笑いのルブラン君には通じてないようだ。

「はわわ～　でも、ルブラン君。やっぱり元気なさそうです～。

明日、ちゃんと学校来られますか～？」

「わからない・・・　子供の頃から、体弱いから・・・」

「よっし！　ルブラン君！
今からデカ子が、一発ギャグやるから！」

大きめの声をあげた部長が、デカルトちゃんの背中を叩く。

「はわ？」

「それ見て、ちょっと元気出してよ～！」

デカルトちゃんに・・・　一発ギャグなんて、あったかしら？

「はわわ～？」

「ほら、デカ子！　大爆笑のあれ、やってみせて」

「ちょ・・・　ちょっと待ってです～」

デカルトちゃんは部長を連れて、部屋の片隅に移動する。

「デカちゃん、ギャグなんてないです～
オヤジギャグは～　ラッセルちゃんの専売特許です～」

「僕、オヤジギャグなんて言った事ないし！」

あるわよ。

「ほら。僕やピタ子は・・・　彼にとって、あまり面識ないからさ。
ギャグやっても、さっきみたいに反応薄いのよ」

言いながら部長は、さっきの手ブラの仕草をする。いや、面識ある私とデカルトちゃんの反応も薄かったわよ?

「顔見知りのデカ子がギャグやればさ、うけるって・・・
弱ってる時は、笑いのツボが甘いから。絶対、大爆笑する!

ルブラン君を元気にしてやって!」

説得する部長に対し、デカルトちゃんは大きく頷いた。

「はわわ～　わかりました～
そ、それじゃ・・・　頑張ってみるです～」

ルブラン君の側に戻ってきた2人。

「今から～　デカちゃんが～　一発ギャグやるです～」

そう言うと、ラジオ体操のように深呼吸を始めたデカルトちゃん。
いや・・・　ギャグ言うのに、そんなに大きな深呼吸必要?

「ルブラン君～　いきますよ～」

選手宣誓のように右手を挙げるデカルトちゃん。

「あ・・・　うん・・・」

案の定、ルブラン君も困った表情だ。

「デカちゃんの～　数学ギャグ！
やっぱ座標はね・・・
こーでぃねぇと！！」

ドヤ顔のデカルトちゃんだけど・・・

「・・・　・・・・」

「・・・　・・・・」

人類史上、最高に静寂な時が流れた。

「デカ子・・・　それはちょっと・・・・」

おいおい。部長がギャグをふったくせに、フォロー無しでダメだしするの？

「ギャグってのは・・・　人を選ぶって事か・・・
また１つ【知】が増えたわ」

部長が残念そうに言い放つ。デカルトちゃんの名誉のため、私はルブラン君に説明を始めた。

「座標ってのは、英語で【ｃｏｏｒｄｉｎａｔｅ】。コーディネイトって言うの。
デカルトちゃんはこう見えても、直交座標を創始した子なのよ」

「へ・・・　へ～　す、すごいね。デカちゃん」

「いや、ピタ子。ギャグの説明をするのってはさ・・・
芸人をどん底に突き落とすようなものだから・・・」

え？　そ、そうなの？　でも、デカルトちゃんは芸人じゃないし・・
・

「はい！　次！　次！　もう１つ、鉄板があるです～！」

デカルトちゃんが勢いよく手を挙げた。めげずに次のギャグを言う
つもりらしい。

「関数君がくしゃみをしました。
ふぁ・・・　ふぁぁ・・・

ふぁんくしょん！」

・・・　・・・

人類史上、２番目の静寂の時が流れた。

「あ・・・　あはは・・・　面白いよ・・・
デカちゃん、最高だよ・・・」

乾いた笑いを浮かべたルブラン君。誰が見ても無理してるのがわか
る。

「ルブラン君、大丈夫？　なんか、顔色が悪くなってるような・・・
」

私は気遣いの言葉をかけた。

「はい！！　はい！！！　じゃぁ、３つめのギャグいくです～」

三度（みたび）手を挙げたデカルトちゃんの腕を、部長が掴む。

「はわ？」

そして部長はルブラン君に声をかけた。

「ルブラン君。点滴中、邪魔してごめんね。僕たち、もう行くから」

「はわわ？　デカちゃんのギャグは～？」

いや、これ以上やるとルブラン君にとどめを刺しちゃう。

「デカ子のギャグはさ、ちょっとディメンジョンがね・・・」

言いながら部長は、デカルトちゃんの手を握ったまま病室の出口へ向かう。

「ほら、ピタ子も。行こ」

「うん。じゃぁ、ルブラン君。お大事に・・・」

過去のルブラン君にかけた・・・

私の最後の言葉だった。

（第３２話へ続く）

第３１話　静寂の時（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

携帯を忘れた事に気づいた私は、再びルブラン君の病室へ向かう。
病室の中には、サンジェルマン理事長がいた。
携帯を取り、１階に戻った私は２人と合流する。
ところが・・・　大変な事が起こっていた。
次回　「第３２話　事態急変」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３２話　事態急変（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人のチームプレーで・・・　見事過去のルブラン君を、交通事故から救った！

体調の悪いルブラン君は病院へ。

ルブラン君を見舞った私達は、現在へ戻ろうとするが・・・？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３２話　事態急変

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３２話　事態急変

病院１階のロビー。

「あれ？」

「はわ？」

「どした、ピタ子？」

「・・・　・・・」

体中をまさぐる私。背負っていたリュックの中身もチェックする。

「ごめん、携帯忘れた！」

携帯を持ってない事に気づいた。

「え？　ピタ子、マジ？　どこに忘れたかわかる？」

「多分・・・　ルブラン君の病室の前。
ほら、【電子機器等はこちらへ】ってロッカーあったでしょ？

あそこで間違いないと思う」

踵（きびす）を返した私。

「2分で戻ってくるから、ロビーで待っててて！」

「すぐ戻ってきてよ！　もうすぐ過去ピタ、来る時間だからさ！」

「わかってる！！」

私は再びルブラン君の病室へ向かう。

「あった・・・」

すぐにロッカーから、目当ての物を見つけた私。思わず扉の小さなガラス窓から、病室を覗き込んだ。だって、過去のルブラン君・・・これで見納めになるし。

「あれ？」

サンジェルマン理事長だ。9時に来るって聞いてたけど、もう来てたんだ。早めに出て正解ね。

「ん？」

理事長が・・・　ルブラン君の点滴の管に、何か注射してる？

私は病室の扉に自分の耳を押しつけた。

「これで・・・　すぐよくなる・・・」

え？　よくなる？　確かにそう聞こえた。理事長は化学のスペシャリストで、薬剤師の免許も持ってるって聞いた事があるけど・・・

「ルブラン君・・・」

再びガラス窓から中を覗き込む。スヤスヤ寝てるようだ。

きっと理事長は、元気になる薬を与えたんだろう。でも、勝手にそんな事していいのかしら・・・？

なんて、思いながら私は部長達の元へ走っていった。

・・・　・・・。

「お待たせ。さぁ、戻ろ」

「あ・・・　うん・・・」

部長もデカルトちゃんも・・・　ナースステーションの方を見ている。

「・・・　・・・」

私もそこへ視線を移した。何やら、慌ただしく看護婦さん達が動いている。1人の看護婦が、受話器の向こうの誰かに大声をかけた。

「先生!!　271号室の患者さんの容態が急変しました!!
急いで来て下さい!」

え？

「271号室って・・・」

ルブラン君の病室じゃん。

「ピタ子・・・　今、271号室行ってきたんだよね？」

「う、うん」

「何か変わった事、あった！？」

「いや・・・　理事長がすでに来てて・・・　ルブラン君は普通に寝てたけど・・・」

「はわわ～　過去のPちゃんが現れたです～」

病院の入り口。2日前の私が、手紙を握りしめて現れた。

「やば・・・」

私達3人は、すぐに大きな柱の影に隠れる。

「・・・　・・・」

しばらく過去の私を見ていると、ナースステーションで何やら情報を聞き入れ・・・　取り乱した感じで、奥へと走っていった。多分、ルブラン君の病室に行ったと思うけど・・・

「僕、様子見てくる。デカ子とピタ子は、ここで待機していて・・・」

そう言うと部長は、周りを警戒しながら過去の私の後を追っていっ

た。

・・・　・・・・。

15分後。戻ってきた部長に、すぐ声をかける。

「どうだった!?　どうなってるの!?」

「今・・・　ルブラン君、集中治療室に運ばれたって。
なんか・・・　ヤバそうだった」

「はわわ～　ついさっきまで、デカちゃん達と話してたのに～・・・」

「な、何で!?　何でよ!?」

まさかの事態に動揺する私。

「ぼ、僕にも・・・　何が何だか・・・」

「いったい・・・　どうして!?」

呆然としながら私達は・・・　病院のロビーで立ち尽くした。

・・・　・・・・。

午前2時過ぎ。

過去の私や理事長に遭遇する可能性もあるため、ルブラン君の近くへ行けない私達。

何も出来ず、救急患者の待合室でずっとウロウロしていた。

「はわ？　Pちゃんが・・・」

過去の私が、向こう側の病棟から歩いてくる・・・　デカルトちゃんが気づいた。

「・・・　・・・」

かなり泣いたんだろう、目を真っ赤にした過去の私。その肩に手を添えている理事長の姿もあった。2人は外に出ると、何やら少し会話を交わし・・・　過去の私は、やってきたタクシーに乗り込んだ。

「・・・　・・・」

その様子を見ていた今の私。

「2日前と・・・　同じだ・・・」

失われていた記憶が甦ってくる。そう、あの時私は・・・

病院でルブラン君の死を知らされ・・・　理事長と共にその死に顔を見る事になった。

泣き崩れ・・・　泣いて、泣いて・・・　泣きまくって・・・

タクシーで自宅に戻ったんだ。

つまり・・・

「ルブラン君・・・　死んだんだ・・・」

思わず私の口から出た言葉に

「ピタ子！　そんな事言わないで！！　縁起でもない！！」

部長が反応する。

「そうです～！
デカちゃんのクラスメイト、勝手に殺さないで下さいです～」

2人がどう言おうと・・・　私はルブラン君の死を確信した。

「まだルブラン君は戦ってるはずよ！　僕たちが過去に来たのは・・・」

「デカちゃんも信じてるです～！　だってルブラン君は・・・」

ごめん。

あなた達がどう言おうと、耳に入らない。私にはわかるんだ。ルブラン君が死んだって・・・

だってあの時と全く同じ状況だもん。

「・・・　・・・」

理事長は、再び病院の中へと戻っていった。白衣を着たお医者さん

や、看護婦さんが神妙な面持ちで、理事長に頭を下げている。

その場面を見ていた部長・・・

「まさか・・・」

そしてデカルトちゃん。

「はわわ～・・・」

お悔やみを申し上げている場面にしか見えない。

「ホントに・・・」

「死んじゃったですか～？」

部長もデカルトちゃんも・・・　状況は察してきたようだが、まだ信じられないといった表情だ。

「・・・　・・・」

理事長の背中を見ながら私は・・・　思わず呟く。

「理事長だ・・・」

「え？」

「はわ？」

「理事長が・・・　ルブラン君を殺したんだ！！」

そうだ・・・

私はハッキリ見た。理事長がルブラン君の点滴に・・・　何か注入しているのを。

直後、ルブラン君の容態が急変し・・・　亡くなった。

つまり・・・

「ルブラン君を殺したのは・・・　理事長だ！！」

（第３３話へ続く）

第３２話　事態急変（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

ルブラン君は・・・　息をひきとっていた。

私は過去の理事長に問いただす。

ルブラン君を殺したは・・・

次回　「　第３３話　因果律　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３３話　因果律（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人のチームプレーで・・・　見事過去のルブラン君を、交通事故から救った！

体調の悪いルブラン君は念のため病院へ。ルブラン君を見舞った私達は、現在へ戻ろうとするが・・・

ルブラン君の容態が急変し・・・　死んでしまった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３３話　因果律

第３３話　因果律

私は・・・

過去の理事長と、話(はなし)をする！

「ピタ子。本気で理事長が・・・
ルブラン君を殺したと思ってるの？」

「ありえないです～」

「だって・・・　私、見たもん！　理事長が、ルブラン君の点滴に・・・
何か注射みたいなの、うっているのを！！」

「多分、栄養剤か何かだと思うよ・・・
まさか毒を入れるとは思えないし・・・」

「そうです～。親が我が子を殺すなんて～　あり得ないです～。
理事長は～　見た目厳しそうですけど～

そんな人じゃないです～」

そう言われても納得いかない。直接話がしたい！！

「いい！　私１人で・・・　理事長を問い詰めてくる！
絶対彼が犯人よ！！」

私達が過去に来て救ったはずのルブラン君・・・　その彼が死んだ。
その事実は私の冷静な判断力も奪っている。

「ピタ子！　過去の住人と接触するのは・・・」

私は部長を無視して、足早に理事長がいるであろうルブラン君の病室へ向かった。

「ま、待ってよ、ピタ子・・・　落ち着いて・・・」

「落ち着かない！！」

「Pちゃん！　過去にいられるリミットが～　４時間きってます～」

わかってる。わかってるけど・・・　今、ここで理事長に問いただ
さなければ・・・

「私達の世界に戻っても、真実がわからないままなのよ！！」

私は知りたい。哲学者としてではなく・・・　１人の人間として真
実が知りたい。そんな私に、部長が背後から声をかけてくる。

「【理事長。あなた、息子を殺しましたか？】って・・・　そう聞
くの？」

「もちろん！」

薄暗い病棟、私は２７１号室へ向け足音を響かせ・・・　その病室
に辿り着いた。

バタン！！！

勢いよく扉を開けると・・・　ベッドの上、顔に白いハンカチをかぶせられた・・・

「ルブラン・・・　君？」

息を引き取ったであろう、彼がいた。

そしてこちらに背を向け、座ったままの理事長の姿も見える。

「・・・　ピタゴラス君・・・」

理事長はゆっくりこちらを振り返った。

「君は・・・　家に戻ったはずでは？」

それは過去の私。今の私は・・・

「理事長！！　ルブラン君の点滴に注射していたのは・・・何ですか！？」

この疑問を解決するためにいる。興奮気味に、理事長へストレートを投げた。

「・・・　・・・・」

「何故、黙ってるんです！？」

「なるほど・・・　未来から来た方だな・・・」

え!?

「ならばラッセル君と、デカルト君も・・・　そこにいるんだろう？」

「・・・　・・・」

「はわわ・・・」

病室の外に隠れていた部長とデカルトちゃん。

「安心しなさい。入ってくるがいい」

「・・・　・・・」

「・・・　・・・」

しばらく沈黙を保っていた2人。

「私はタイムマシンの事も知っている。大丈夫だから・・・」

理事長の声かけに対し

「・・・　は、はい・・・」

「はいです～」

やがて2人は、病室の中に入ってきた。

「・・・　・・・・」

「はわわ・・・」

2人は呆然としながら、理事長に視線を合わせる。

「理事長!!」

私達がこの世界にとっての未来から来た・・・　それを理事長が知っていたのは驚いたが・・・

「私の質問に応えてません!!」

私は真実を知りたい!

「何か勘違いしてるようだが・・・　まずは落ち着いて欲しい。あの注射は、ルブランの心臓病の薬。

血管を広げるためのものだ」

「嘘!　あの注射の後、ルブラン君は容態が急変した!　そして・・・」

私の視線は、白いハンカチを捉える。

「そして・・・」

涙がボロボロとこぼれ落ちてきた。もはや私の視界は、完全に全てがボヤけている。

「ルブラン君は死んだ!!　理事長が・・・　理事長が・・・」

「ピタ子・・・」

部長が背後から私の右手を掴んだ。私は、部長に抱きつき・・・

「わーーーー!」

大声で泣き出した。

「は、はわわ・・・」

立ち尽くす私達3人、そしてルブラン君の遺体の前にいる理事長。

やがて理事長は口を開いた。

「君達は・・・　あと、どれだけこの世界にいられるんだ?」

泣き崩れる私にかわって、部長が応える。

「あと、3時間ちょっと・・・　です」

「そうか・・・」

チラリと白いハンカチに目を向けた理事長。

「手短にで構わない。君達がどうやってこの世界へ来て・・・
どう動いたかを教えて欲しい」

「・・・　はい・・・・」

そう言うと部長は、泣いている私をデカルトちゃんに預け・・・

この世界に来た経緯を端的に話し始めた。

・・・　・・・。

「なるほど。君達からしたら2日前・・・
すなわち今日、ルブランは交通事故で死んだのか」

「えぇ。だから僕達・・・　彼を救うために動いたんです。
最初デカ子が、ルブラン君をコンビニに入れて・・・
でも強盗がいたから、慌てて僕が2人を外に出して・・・」

「ふむ・・・」

「そしたら、2日前ルブラン君をひいたタクシーがやってきて・・・
ピタ子がルブラン君にかぶさって・・・
何とか交通事故は回避したんです」

「なるほど・・・」

「デカ子がいなければタクシーにひかれ・・・」

部長はチラリとデカルトちゃんの方を見た。

「ラッセル君。君がいなければ、強盗に刺されていた・・・」

理事長は部長に指さしながら声をかける。

「ピタ子がいなければ・・・
やっぱりタクシーにひかれるか、強盗に刺されたか・・・
でも結局・・・」

部長の視線は、白いハンカチへ。

「・・・　・・・」

しばらくルブラン君の方を見ていた部長。

「多分、【因果律】・・・　ですね・・・」

「さすがは【現代組】の優秀生徒。タイムトラベルもくわしいな・・・」

「は、はわわ～　【因果律】って～　何ですか～?」

私の肩を抱いているデカルトちゃんが・・・　部長に質問した。

「僕達が過去へ来られたのは・・・　どうして?」

部長は悲しい目で、デカルトちゃんに声をかける。

「それは～　タイムマシンのおかげです～」

「でも、そのタイムマシンは・・・　元々使える状態じゃなかったでしょ？
どうしてタイムマシンは起動したの？」

「それは～　Pちゃんが～　起動するための数字を求めたからです～」

「何故、ピタ子はその数字を求めたの？
つまり・・・

どうしてピタ子は、タイムマシンを動かそうと思ったの？」

「それは～　Pちゃんにとっての～　愛しのルブラン君を救うためです～」

「それよ！！」

部長はデカルトちゃんを力強く指さした。

「はわ？」

「ルブラン君が生きてたらさ・・・
ピタ子はタイムマシンを・・・　動かせたと思う？」

「・・・　無理だと思います～　なぜなら～
起動するために必要な数字は～　スパコンでも求められない数字でした～

Pちゃんの～　ルブラン君を救いたいという気持ちが～

タイムマシンを動かしたんです～」

「さすがデカ子。最高の答えをありがとう。それが・・・
ルブラン君がどうやっても死んでしまう原因よ」

「はわわ？」

「もしルブラン君が生きてたら、タイムマシンは起動しなかった。
起動したタイムマシンに乗ってきた時点で・・・

ルブラン君は死んでいなければならないって事よ・・・」

クビをかしげるデカルトちゃん。

「デカちゃん、よくわからないです～」

「【因果律】よ。【タイムマシンが起動する】という結果は・・・
【ルブラン君が死んだ】という原因が必要。

もしこの世界で、僕達がルブラン君を救ったら・・・」

「救ったら～？」

「タイムマシンは起動してない。
つまり僕達がここにいる事自体が矛盾・・・」

「【自己矛盾の原理】だ」

理事長が会話に加わった。

「【因果律】・・・　これを破ると、様々な矛盾が生じる。
【タイムマシン起動】の原因となった【ルブランの死】は・・・
絶対に覆らない。それへの介入は、自然的摂理で許されない。
それが・・・　【自己矛盾の原理】だ」

「は・・・　はわわ～・・・
じゃぁ、ルブラン君は・・・

どうやっても死ぬ運命なんですか～」

「あぁ。タイムマシンが動いた時点で・・・」

理事長はそう言ったが・・・

「・・・　・・・」

部長は黙っていた。

「だったら・・・」

泣きはらした私は声をあげる。

「だったら何故!?　理事長は私達にこう言ったの!?
タイムマシンに乗って・・・　ルブラン君を救ってくれと!

その・・・　【因果律】が破れないなら・・・
何故、そんな事を私達に言って、過去に行かせたの!?」

「・・・　ピタ子・・・」

納得いかない！！　全然納得いかない！！

「ピタ子・・・　僕が言った事、覚えてる？
タイムトラベルには・・・　代表的な問題が３つあるって」

覚えている・・・

「１つは【時間順序保護仮説】・・・」

量子的にタイムトラベルが許されないっていう説。でもそれは否定された。

「もう１つが今の【自己矛盾の原理】・・・」

【因果律】を破る事はできないという説。

「あと１つは・・・　【多世界解釈】。
量子論では有名な説よ」

「多世界・・・　解釈・・・？」

（第３４話へ続く）

第３３話　因果律（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

私がタイムマシンを動かした。それはルブラン君が死ぬという事に他ならない。

理事長は【多世界解釈】に賭けて、私達を過去に送り込んだらしいが・・・

結局それはかなわなかった。

理事長と言い争いかけた時・・・　私は理事長のルブラン君に対する愛の深さを知る。

次回　「　第３４話　　愛を知る時　」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３４話　愛を知る時（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人のチームプレーで・・・　見事過去のルブラン君を、交通事故から救った！

体調の悪いルブラン君は念のため病院へ。ルブラン君を見舞った私達は、現在へ戻ろうとするが・・・

ルブラン君の容態が急変し・・・　死んでしまった。部長が言うには、因果律のせいだって・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第３４話　愛を知る時

第３４話　愛を知る時

「多世界・・・　解釈・・・？」

「うん。この世界は、いくつもの膜が重なり合ったような世界。
マルチバースっていうんだけどね。

僕達はその１つの膜の中にいる・・・　という、量子力学の考えの１つ。
そして因果律を打破する解釈の１つなんだ」

「・・・　・・・・」

「僕達は過去へやってきた。
その時は、同じ膜の世界での時間移動だけだったかもしれない。

でも交通事故に遭うはずだったルブラン君を救った。
その時点で、別の膜の世界へ移動したのよ」

部長は身振り手振りで説明してくれるが・・・　よくわからない。

「今、僕達がいるのは、過去の中の違う膜の世界なのよ。
ルブラン君が交通事故に遭わなかった世界。

同時に、別の膜の世界では・・・
ルブラン君は交通事故に遭って死んだ世界も存在する」

「ルブラン君が・・・

事故に遭った世界と、事故に遭わなかった世界が・・・　ある？」

「うん。しかも同時にその世界は存在している。
【シュレディンガーちゃんの猫】みたいなものね。
ただ、別の世界の事は・・・　僕達は見る事が出来ない」

「・・・　だ、だから？」

「つまり・・・」

部長は理事長に視線を合わせた。

「現在の理事長は、この【多世界解釈】があると信じた。
僕達が過去に戻り、ルブラン君を救えば・・・

現在に戻った時、ルブラン君が生きている世界になっている。
そう信じて、僕達を過去に行かせた・・・　と、思う」

「でも結局・・・　ルブラン君は死んでしまった・・・」

「僕達は、因果律を打ち破れなかった。それはつまり・・・
【多世界解釈】を否定する、１つの事例になるかもしれない・・・
」

「・・・　・・・」

混乱する頭で必死に考える。

【時間順序保護仮説】【自己矛盾の原理】【多世界解釈】・・・

【時間順序保護仮説】はタイムトラベル自体が出来ないという説で、因果律は保護される。【自己矛盾の原理】はタイムトラベルは出来ても、過去を変える事はできないという説で、因果律は保護される。

【多世界解釈】は同時に存在している平行世界があるという説で、他の世界同士の過去と未来は因果関係はなく・・・　ルブラン君を救う世界に行けた可能性があった。

「結局・・・」

私は1つの結論に辿り着いた。【多世界】なんてなかったんだ。

「私が・・・　タイムマシンの【x】を求めた時点で・・・
ルブラン君はどうやっても死ぬ・・・

そういう運命だった・・・　って事よね？」

「・・・　・・・」

「はわわ・・・」

部長は否定しない。そして

「その通りだ。ピタゴラス君」

理事長は肯定した。

「嘘・・・」

じゃ、じゃぁ・・・　私がタイムマシンを起動させなければよかったの！？

でも起動しなかったら・・・　やっぱりルブラン君は交通事故で死んでしまったまま。起動させて、ルブラン君を事故から救ったのに・・・

タイムマシンを起動したという理由で、結局ルブラン君は死ななければならないって事！？

「ルブラン君を助ける方法は・・・
どうやっても存在しない・・・？」

混乱しながらも、私はそう理解した。

「嘘よ！！」

私はクビを横に振る。

「な・・・　何かあるはずよ！　もう1度タイムマシンで・・・」

「ピタゴラス君！！」

理事長が私の所へ歩いてきた。そして私の両肩をしっかりと掴む。

「君は・・・　我が子を好きだった。間違いないな？」

当たり前でしょ！

「間違いありません！！」

私は理事長の目を見つめ、力強く答えた。

「私は・・・　初めて見た時から・・・　ルブラン君の事が・・・」

誰よりも・・・　誰よりも・・・

私より彼を愛してた人なんて、この世には・・・

「君の１００倍・・・　私は我が子を愛している！」

「え！？」

理事長の・・・　私の両肩を掴む力が強くなった。

「私の子供は、生まれながら心臓に病（やまい）を持っていた。
産まれた時、言われたよ。

１０歳まで生きられればいい方だって・・・」

「・・・　・・・・」

「それが・・・　今日（こんにち）１７歳まで生きてくれた。
医学的にも奇跡の状態だった・・・」

「・・・　・・・・」

熱く語ってはいるが、理事長の目は冷静だ。私を諭すように優しく語り続ける。

「17年前・・・　私は双子を授かった。
だが片方は産まれてすぐ死に・・・
もう片方は心臓に重い病を持っていた。
それだけじゃない。母親も、出産直後に亡くなった・・・」

「え？」

初めて聞いた。

「双子の性別も男女とわかっていた・・・　名前も決めていたんだ。
男の子は【ルブラン】。女の子は【ソフィ】って・・・

妻と子供を失った時、物心ついてから初めて・・・　私は涙を流した。
あんなに涙が出るものなのか・・・　それぐらい泣いたよ」

悲しく笑う理事長。

「愛する家族を一気に2人も失った。
君に、この深い悲しみなどわかるまい。
いや・・・　【悲しみ】という言葉では表現できないほど・・・
私は大きな闇を背負った・・・」

「り・・・　理事長・・・」

「神を恨んだよ。あれだけ祈ったのに・・・
2人も死んでしまったのだから。

そして残った1人でさえ・・・　長く生きられない運命。
君に・・・　あの時、私が背負った辛(つら)さがわかるか？」

「・・・　・・・」

言い返せない。

理事長の目を見ていると・・・　彼がルブラン君を殺したなんて、
絶対ありえないという事がわかる。

「君達は色々な困難を乗り越えて、ここへやってきた・・・
その事は、想像に難(かた)くない。

私の子供を救うため、今まで・・・　心から感謝する」

「で、でも・・・　ルブラン君は、死んでしまった・・・
感謝される・・・　筋合いなんて・・・」

理事長の話を聞いて・・・

「ルブラン君は・・・　死んでしまった・・・」

ルブラン君の死を、受け止めようとしている私がいる。

私は理事長の両手を払い、ベッドの上のルブラン君の元へ寄っていった。

「ピタ子・・・」

「Pちゃん・・・」

そっと白いハンカチをのけると・・・

「・・・　・・・」

寝ているようにしか見えないルブラン君の姿があった。

呼吸はしていない。

「・・・　・・・」

そっとルブラン君の頬に手を添える。

「・・・　・・・」

とても冷たかった。

あの時・・・

ルブラン君の両手を握った時とは比べものにならないほど・・・

とても冷たかった。

「・・・　・・・」

何故だろう？　涙が出てこない。枯れるほど泣いたから？　それとも・・・

ルブラン君の死を受け入れたから？

「ピタ子・・・　残念だけど・・・・　帰ろう」

「そうです～　もうすぐリミットです～」

後ろから2人の声が聞こえる。

「うん・・・」

私は静かに頷いた。

「あと・・・　5分だけ・・・
5分したら帰るから・・・」

「OK・・・」

「はいです～」

それから私は・・・

1時間以上もルブラン君の死に顔を見つめ続けた。

・・・　・・・。

「ピタ子。もう午前4時だよ。そろそろ行かないと・・・」

「Pちゃん～　悲しいのはわかります～
デカちゃんも～　クラスメイトを亡くしたんです～」

「・・・　・・・・」

私はルブラン君を見ながら、ずっと考えていた。

何とかタイムマシンを使って、ルブラン君を救う方法がないかと。

「ピタ子・・・」

部長が私の手を握る。

「僕も多分・・・　ピタ子と同じ事を考えていた。
でも・・・　どうやら僕達の世界は、因果律が絶対みたい・・・」

部長は遠回しに言ってるけど・・・

【ルブラン君は、もう絶対に生き返らない】

と言っている。

「うん・・・」

この世界に・・・　このまま残るわけにもいかない。

「わかった・・・　戻る・・・」

ようやく私は、自分達の世界へ戻る決心をした。

「葬儀屋が来るのは、午前7時だ。
私が学校まで送っていこう」

理事長が言ってくれた。

・・・　・・・。

サンジェルマン理事長のおかげで、セキュリティのかかっている学園内にすんなり入る事が出来た。彼がいなければ、厳重な防犯設備の整った学園内に入る事は困難だっただろう。

私達4人は・・・　タイムマシンのある理事長室へ静かに入っていく。

「24時間近く、この世界にいたんだろ?
疲労困憊(ひろうこんぱい)だな・・・」

優しく理事長は言ってくれたけど・・・

「僕は・・・　眠くもないし、割と平気です・・・」

部長は全然元気そうだし・・・

「デカちゃんも～　体は元気です～」

1日10時間以上寝るデカルトちゃんも、まだまだ動けそう。

「・・・　・・・・」

私もそう。２４時間不眠不休だった割には・・・　眠気は全く無いし、疲労感もそんなにはない。

ただ・・・

心だけが重い。

「昼過ぎにコレを見て、確信したよ」

そう言うと理事長は、奥のカーテンを開けた。

「まぁ、薄薄（うすうす）感づいてはいたんだが・・・
まさか本当に、未来からやってくるとは・・・

直接君達に会うまで、信じられなかったよ」

カーテンの向こう側に、私達が乗ってきたタイムマシンがある。

部屋の反対側の角には、大きな段ボールがあった。まだ起動していない方のタイムマシンだ。

「君達は・・・　この【ｘ】を求めたんだな・・・」

理事長はタイムマシンの外側のディスプレイを触った。

「さ。ピタ子・・・」

「うん・・・」

部長に促された私は、背負っていたリュックからノートを取り出す。
そのノートには、【ｘ】を求めるために２４時間格闘した計算が載っている。

「２，２，４，４，０，３，５，１・・・」

ノートを見ながら【ｘ】を打ち込んでいく私。数字をうち終え【Ｅｎｔｅｒ】キーを押すと、閉まっていたタイムマシンの扉が音も無く開いた。

「あの・・・　この【ｘ】、理事長に渡しておきますか？」

私は提案した。

「必要無い。こちらの世界の君に・・・　解いてもらうさ」

「え？　で、でも・・・」

ルブラン君は生き返らないのよ。

「ルブランは生き返らない。そう思っているんだろ？」

「は・・・　はい・・・」

「この【ｘ】を求め・・・　そして過去の世界に来た君達。
哲学者として・・・　いや、１人の人間として・・・
色々貴重な経験をしたハズだ」

「・・・　・・・・」

哲学バトルとか因果律とか・・・　確かに色々学ぶ事はあったかもしれない。

でも今はそんな事、頭に入らない。ルブラン君を救えなかった事で・・・　頭がいっぱいだ。

「未来に戻ればわかる。君達がどれだけ成長したかをな・・・」

「・・・　・・・・」

私達3人は・・・　理事長に一礼をしてタイムマシンに乗り込んだ。

内部天井にあるボタンを押すと、扉が閉まる。中からは外が透けて見えるが・・・　外からは見えてない。理事長はタイムマシンの周りをウロウロしながら興味深げに、色んな所を見つめていた。

部長はあのパネルに、時間情報を打ち込む。

【□★▲■●】【□3】【16】【15：33：33】

【□★▲■●】【□3】【14】【□6：30：00】

上にあるのは、私達が来た時の時間。下は過去に来た時の最初の時間だ。

【01：21：30】【01：21：29】【01：21：28】・・・

カウントダウンしているのは、この世界にいられるタイムリミット。

「あと８０分、過去の世界にいられるけど・・・」

いる理由もない。

「多分、このボタンが現在に戻るための・・・」

部長が【１５：３３：３３】の横にある【↑】のボタンを押す。

【１５：３３：３３】　【↑】

いかにもこの時間へ戻りましょう、って感じのボタンだ。

【Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？　（Ｙｅｓ　／　Ｃａｎｃｅｌ）】

タイムトラベルの最終確認。【Ｃａｎｃｅｌ】が点滅している。

「じゃ・・・　行くね」

部長が声をかける。

「うん・・・」

「はいです～」

私とデカルトちゃんが元気なく返事をすると・・・

部長は何も言わず、【↑】【Ｅｎｔｅｒ】と押した。

過去の理事長は、目の前であのタイムマシンが突然消えるのを目撃。

「!?」

しばらく何も無いそこを見つめていた。

「・・・　・・・・」

ゴクリと唾を飲み込んだ理事長は・・・　あたりを見渡す。

「・・・　・・・・」

そして自分のデスクにある、それを見つけた。1枚の手紙と共に。

理事長は手紙を開け、中に入っている便せんを取り出す。

「・・・　・・・・」

そして

「神よ・・・」

人生、2度目の涙を流した。

（第３５話へ続く）

第３４話　愛を知る時（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

現在へ戻ってきた私達。理事長から衝撃の言葉が出る。

ルブラン君は・・・　１７年前に死んでいた！？

なんだか思ってた世界と違っているんだけど・・・　いったい、どういう事！？

次回　「第３５話　嘘　」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３５話　嘘（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人のチームプレーで見事過去のルブラン君を、交通事故から救った！

にも関わらず、彼は心臓の病（やまい）で亡くなってしまった。

落胆して現在に戻ってきた私達・・・

死んだはずのルブラン君が・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３５話　嘘

第３５話　嘘

「・・・　・・・・」

タイムマシンの中からは外が見える。過去の理事長が一瞬にして消えたかと思うと・・・

「サンジェルマン・・・　理事長・・・」

現在の理事長の姿が見えた。タイムマシンの中にいると、突然過去の理事長が消え・・・　ちょっとズレた位置に（現在の理事長が）瞬間移動した感じだ。

「僕達・・・　戻ってきたみたいね・・・」

「戻ってきたです～」

「・・・　・・・・」

私は無言で天井にあるボタンを押した。相変わらず音も無く扉が開く。

部長、デカルトちゃん、私の順でタイムマシンから降りていった。

「・・・　・・・・」

戻る直前はまだ外が真っ暗だったけど・・・　窓の外からお日様の光が差し込んでいる。

理事長が目を丸くして、私達を迎え入れた。

「失敗か？」

そう聞いてくる。

「は・・・　はい。すいません。僕達の力が足りないばかりに・・・」

部長が頭を下げ、私とデカルトちゃんも頭を下げた。

理事長は腕組みをし、困った表情を見せる。

「う～む。タイムマシンの操作マニュアルなんてないからな・・・どうすればタイムトラベルが可能なのか・・・」

腕組みしたまま、ブツブツと呟いた。

え？　え？　何か会話がかみ合ってない。

「り、理事長・・・？」

そうか！　理事長の視点に立てば・・・

私達はタイムマシンに乗り込み、すぐに降りてきたんだ。実際の私達は２３時間近く過去の世界にいたけど、理事長にはそれがわからない。

「り、理事長！　タイムトラベルは・・・　成功したんです！」

そう。理事長の言う失敗は【ルブラン君を救えなかった事】ではなく、【タイムトラベル出来なかった事】を指しているんだ。

「何!?　タイムトラベルは・・・　出来たのか!?」

興奮気味に理事長が声をあげた。

「え、えぇ・・・　ただ・・・」

私達3人は顔を見合わせる。

「そうか!!　ついに・・・　ついに時空の壁を人類は越えたのか!!」

理事長が嬉しそうに声をあげた。

「理事長!!」

部長という立場からか・・・　私達を代表して、理事長に言ってくれるつもりだ。

ルブラン君の事を。

「僕達、過去には行けたんですけど・・・
ルブラン君は救えなかったんです。

その・・・　多分・・・　因果律で・・・」

「・・・　・・・」

理事長は表情を変えず、優しい目で私達に言った。

「君達に・・・　言わなければならない事がある」

「え？」

「ルブランは・・・　17年前、すでに死んでいる」

「え？」

「は？」

「はわ？」

・・・　・・・。

1時間後。

私達3人は理事長の車に乗り、市立病院へ向かった。そして・・・

「に・・・　271号室？」

な、なんで？

理事長は病室の前で立ち止まり、ドアノブに手をかける。

「君達に・・・　1つだけ嘘をついていた。

心苦しかったが・・・

それだけが唯一、我が子を救う方法だと思っていたから・・・」

ドアノブをカチャリと横に回すと・・・

「許してくれ・・・」

扉を開けた。

そして私達の目の前には・・・

「ル・・・　ルブラン君!?」

死んだハズの彼が・・・　ベッドの上でスヤスヤと寝息をたてて寝ていた。

「な・・・？」

「何で・・・？」

「はわわ・・・」

呆然とする私達。

「話せば・・・　長くなる」

もちろん・・・

「き・・・　聞かせてください・・・」

呆然としながら、そう応えた。

（第３６話へ続く）

第３５話　　嘘（後書き）

〜〜

次回予告

私達は・・・

サンジェルマン理事長の、壮絶な過去を聞く。

次回　「第３６話　理事長の過去　」

〜〜

第３６話　理事長の過去（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人で力を合わせ、ルブラン君を交通事故から救ったにも関わらず・・・　彼は心臓の病（やまい）で亡くなってしまった。

落胆して現在に戻ってきた私達。ところが死んだはずのルブラン君が、生きていた！？

第３６話　理事長の過去

第３６話　理事長の過去

サンジェルマン理事長。

今から２０数年前の彼は理事長ではなく、一介の化学教師・・・

サンジェルマン先生だった。

ちなみに【サン】が名前で【ジェルマン】が名字。だから、正確には【サン・ジェルマン】先生ね。

子供の頃、両親を亡くした彼。成人するまで、色んな親戚の元へたらい回しにされた。幼少期から負けん気が強く、物心ついてからは涙を見せた事が無いという。

そんな彼は１８歳の時、奨学金を取って大学に進学。化学を専攻した。

在学中、教員免許と薬剤師免許を取得。卒業後は、聖メンデレーエフ学園と聖フィロソフィー学園の両校で、化学教師として教鞭を執(と)る事になる。両校は姉妹関係にあり、どちらも女子高。前者は化学を中心に、後者は哲学を中心に授業や教育カリキュラムが組まれている。

厳しくて有名な先生だったらしく、生徒からの人気もゼロだったとか。

そんな厳格な化学教師に・・・　聖メンデレーエフ学園の１人の女

生徒が恋をした。

積極的なその生徒は、サンジェルマン先生に猛アタック。当初、その生徒をあしらっていた彼も・・・　いつしか彼女に惹かれていく。

生徒が卒業した後、２人は恋人同士としてお付き合いする事に。

４年後に結婚、翌年に奥さんは双子を妊娠した。

幼い頃両親を亡くし、家族のいなかった彼は、あっという間に４人家族の主（あるじ）となるわけだ。超音波（エコー）検査により、男女のツインズだと知るのは妊娠から半年後。名前も男の子は【ルブラン】、女の子は【ソフィ】とすでに決めていた。

トントン拍子に幸せの階段を登っている・・・

かのように思えた。

しかし元々奥さんは体が強い方ではなく、ましてや双子出産という事もあり、かなりの危険が伴うと医者に警告される。

サンジェルマン先生は、母体のため子供を堕ろす事をすすめたが・・・　奥さんはそれを拒否した。奥さんの熱意に押され、彼も出産を了承する。

医者と何度も何度も綿密に打ち合わせ、出産に臨んだのだが・・・

出産直後、奥さんは死亡。そして・・・

双子の男の子の方も、生後２４時間で死亡した。

そう。この時死んだのは・・・　ルブラン君の方なのだ。

サンジェルマン先生にとって、唯一生き残った家族が女の子のソフィ。

ソフィ・ジェルマン。

そんな彼女も産まれながらにして、心臓に欠陥があり・・・　医者には「もって１０年の命」と言われる。

サンジェルマン先生は男手一つ、ソフィちゃんを育てながら・・・

よく生徒にこう言っていた。

「神などいない」

奥さんの出産前日、幾度となく神に祈りを捧げた。それなのに妻と息子を失い、娘も１０年生きられるかどうか。４人家族の未来が絶たれ、１０年後にはまた孤独となるかもしれない。

いないと断言している神を、心から恨んだ。

学校では相変わらず、生徒に冷徹な教師として名を轟かせる。いつしか彼は・・・　【鬼のサンジェルマン】と言われるようになった。

ソフィちゃんの治療には莫大な費用がかかる。しかし幸運な事に彼は、長年研究していた錬金術・・・　すなわち化学的手法で金（ゴールド）を作り出す手順を発見した。

そのおかげで彼は、億万長者の階段を一気に上り詰める。金に物をいわせ、ソフィちゃんには最高の医療スタッフと、医療設備を完備させた。

そして薬剤師の免許も持っている彼は、娘の病を治すための治療薬の開発にも着手。聖メンデレーエフ学園の一部を改築し、最新機器を整備した研究室を作る。これにも莫大な費用がかかったとか。

しかし・・・

仕事の合間を縫って治療薬の開発に全てを捧げるも・・・　若干効果のある薬を開発したに留まる。完治するためのそれは作る事が出来なかった。

やがてソフィちゃんの病状は進行。

何かを悟ったのか、ソフィちゃんは自宅に近い市立病院へ転院を希望。

父親はそれに反対したが、ストレスは病(やまい)を進行させるという医者の言葉を聞き入れ、娘の転院を認める形になる。その代わり専用の病室を与えたのは知っての通り。

小さい頃からあまり学校に通えなかったソフィちゃん。病室や自宅の療養室で、数学書を読みふける事だけが楽しみだった。鬼のサンジェルマンも、娘にとっては心優しい父親。心から彼女を愛し続けた。

わずかながら効果のある治療薬のおかげで、医者に忠告された１０歳を過ぎても生き延びたソフィちゃん。小学校を卒業する事は出来たけど・・・

中学生になっても病院と学校を行ったり来たり。いつしか学校にいる時間より、病院にいる時間の方が長くなった。

ちょうどその頃・・・

聖フィロソフィー学園は、少子化や公立校の無料化などのあおりを受け、経営が厳しい状況に。

聖メンデレーエフ学園は、サンジェルマン先生の新薬開発研究のため、莫大な費用を援助されていたが・・・　彼にとって、聖フィロソフィー学園を援助する理由はない。

すでに億万長者のサンジェルマン先生。化学教師を続けなくとも、一生遊んでくらせるだけの金はある。

そこで学園を去る事を決意したのが・・・　ソフィちゃん１４歳の時。余命１年と、医者に言われた時でもある。

娘の命は１５歳まで・・・

高校には行けないと思ったサンジェルマン先生は、退職届けを両校に提出。ただし資金援助を継続している聖メンデレーエフ学園では、新薬開発の研究を続けた。

娘の寿命が尽きる前に、何とか治療薬を開発しようと研究の日々を送る。だが・・・

治療薬を作る夢はかなわなかった。そんな絶望的な状況で・・・

奇跡が起こる。

運命を変える1枚の手紙と遭遇したのだ。

ある日、自宅のデスクに置かれていた1通の手紙。その中には便せんが1枚入っており、こう書かれていた。

【この薬を服用させれば、娘の命は1年延びる】

【お前自身ただ生きるのではない、よく生きることだ。娘のように】

そして手紙の中には、白い粉の入った薬袋も入っていた。正体不明の手紙に警戒しながらも、彼は自らその薬を分析。心臓機能を向上させる、当時では画期的な薬だったらしく、すぐにソフィちゃんに服用させた。

おかげで彼女は、宣告された余命を再び超えて生きながらえた。

もちろん彼はその薬を調合しようとしたが、当時の技術では調合が不可能な薬だった。

ソフィちゃんの中学校卒業まで、あと半年となった頃・・・　再び謎の手紙がデスクに置かれてあったという。

【放っておけば、17歳で彼女は死ぬ。
だが言う通りにすれば、30年近く寿命が延びるだろう】

そう書かれていた。

【この４月。聖フィロソフィー学園に、ある女の子が入学を予定している。

その子はソフィを男の子と勘違いし、恋に落ちる。

有理数と直角三角形、そしてソフィを愛するその彼女が・・・

ある時に直面する問題を解けば、道が開けるだろう】

そして調合不可能と言われていたあの薬も入ってた。

１度はこの薬に助けられたサンジェルマン先生。

すでに学園を去っているし、何よりも聖フィロソフィー学園は、経営不振により次年度廃校予定だった。

深く悩んだ結果・・・

彼は聖フィロソフィー学園に直談判。莫大な資金を援助する変わり、理事長に就任させろと交渉。これを了承した学園側は廃校を撤回、公約通り彼を理事長に就かせる。

そして新年度案で彼は・・・　女子高だった学園を共学にする事を決定。伝統のある女子高を共学にという事で、学園内で多くの批判も浴びた。しかし理事長となった彼は男女共学案を強行。

ワンマンとか鬼の理事長などと言われもしたが・・・

共学後には数々の学園経営案を打ち出し、やがて周りもその経営能力の高さを評価していく。何より過去の彼とはうって変わり、生徒

よりの熱い教育活動が経営と結びついて・・・　学園はいい形で盛り上がっていった。

そんな経緯で男女共学になった聖フィロソフィー学園、通称テツ学。

何も知らずに入学した私は、いつしか【近代組】のルブラン君・・・に、扮装したソフィちゃんに恋をした。

・・・　・・・。

「そ、そんな・・・」

理事長の話を聞いて呆然とする私。

そう・・・

私は同性に恋をしていたのだ。

（第３７話へ続く）

第３６話　理事長の過去（後書き）

～～

次回予告

ルブラン君・・・　すなわちソフィちゃん。

事故死した彼女を救うため、サンジェルマン理事長は・・・

因果律のカラクリを巧妙にすり抜けるトリックを用意していた。

次回　「　第３７話　因果律トリック　」

～～

第３７話　因果律トリック　（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人で力を合わせ、ルブラン君を交通事故から救ったにも関わらず・・・彼は心臓の病（やまい）で亡くなってしまった。

落胆して現在に戻ってきた私達。ところが死んだはずのルブラン君が、生きていた！？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第３７話　因果律トリック

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第37話　因果律トリック

271号室にいる私、部長、デカルトちゃん、サンジェルマン理事長。

そして・・・

「きゃ！！」

ルブラン君・・・　じゃなくって、ソフィちゃん。

ちょうど今、部長におっぱい触られて悲鳴をあげたところだ。

「ホントだ・・・　おっぱいある・・・
僕より小さいおっぱいの子、初めて見た・・・」

「・・・　・・・・」

頬を赤らめているソフィちゃん。

「病（やまい）の進行を遅らせるため・・・
成長を遅らせる薬を服用している。それに・・・

女性ホルモンを抑える注射もうっていた」

娘の胸を予告無しに触った部長に対し、少々不機嫌な表情を浮かべている理事長。

「で、でも・・・　どうして？　ルブ・・・

ソフィちゃんは・・・　2日前、息を引き取ったのに・・・」

本人を目の前にして、失礼な言い方だけど・・・

「・・・　場所を変えよう。娘を休ませてやらないと・・・」

「は、はい・・・」

扉の方へ向かう私達は、今一度ベッドの方を向いた。

ルブラン君ではなく・・・　ソフィちゃんは笑顔で、私達に手を振っている。

「ソフィ。後でまた・・・」

「うん」

理事長の優しい笑顔と、ソフィちゃんの子供のような笑顔。

「・・・　・・・」

よくわからないけど、これが【親子愛】ってヤツかしら?

・・・　・・・。

再び聖フィロソフィー学園の理事長室へ戻ってきた私達。大理石のテーブルを囲むように、4人は座った。

「これだ・・・」

理事長は胸ポケットから小さな小瓶を取り出し、テーブルの上に置く。

「人を仮死状態にさせる薬さ」

「仮死？」

「通称【ＲＤＮＤ】。【Ｒｏｍｅｏ　Ｄｉｄ　Ｎｏｔ　ｈａｖｅ　ｔｏ　Ｄｉｅ.】。
２４時間前後、人を仮死状態にさせる。私が調合した」

「ロメオ・・・ディドゥナットゥハフ・・・？」

「ピタ子、英語ヘタ～。Ｒｏｍｅｏ　Ｄｉｄ　Ｎｏｔ　ｈａｖｅ　ｔｏ　Ｄｉｅ.
【ロミオは死ぬ必要なかった】って意味だよ」

流ちょうに英語を喋る部長。

「そりゃ部長は・・・　イギリス出身だし。私、英語苦手だし。
で、でも・・・　仮死状態にするって、そんな薬が？」

私は小瓶に視線を合わせ、目を丸くする。

「はわわ～　きっと【ロミオとジュリエット】のロミオです～」

シェイクスピアの悲劇【ロミオとジュリエット】。確か仮死状態のジュリエットを死んだと勘違いして、ロミオは自殺しちゃったのよね。

「か、仮死にさせる薬か～・・・」

「はわわ～・・・」

デカルトちゃんも、部長もその小瓶に釘付けだ。

「君達は、医療についてはくわしくないだろうが・・・
【仮死】に関しては、長年研究されている領域なんだ。
医学的にも非常に大きな効果を得られるからね」

「はわわ～　じゃ～　デカちゃん達が～　死んだと思っていた～」

「2日前、僕達が死んだと思っていたルブラン君・・・
いや、ソフィちゃんは・・・」

「仮死状態だった?」

「そうだ」

「な、何故?　ど、どうしてそんな事を・・・?」

「因果律さ」

「因果律?」

「因果律?」

「はわ?」

部長と私はハモったが、デカルトちゃんは相変わらず。

「あの時にも話したように、君達がタイムマシンを起動させるには・・・

どうしても【ソフィの死】、つまり【ルブランの死】が必要だった。

もっと言えば・・・

君達が【ルブランを死んでいると思っている】事が必要だった」

「あ・・・」

部長は何かに気づいたようだが・・・

「？」

「はわ？」

私とデカルトちゃんは、わからない。

「そ、そうか・・・」

部長はポンと手を叩いた。

「ちょっと・・・　部長、何かわかったの？」

私は部長の顔を覗き込む。

「う、うん。つまり・・・　僕達が2日前に戻った時・・・

結局はルブラン君が死んだと思って、現在に戻ってきたでしょ？」

「うん」

「それが正解なのよ！！」

「？」

「はわ？」

いつも説明がうまい部長だけど、今回はよくわからない。

「えっと・・・　ごめん、ちょっと興奮してて・・・
うまく言葉が・・・」

部長は何かを理解して嬉しそうだが・・・　私とデカルトちゃんは、頭の周りに【？】が出現している。

「私が代わりに説明しよう」

理事長が声をあげた。

「2日前、君達にはどうしても・・・
ルブラン、つまりソフィは死んだと思わせて、未来へ返す必要があった」

うん。それはさっきも聞いた。

「もし、ソフィが生きている事実を・・・
タイムトラベルした君達が認識したら？」

「えっと・・・　2日前、ソフィちゃんが生きていたら・・・
って事ですよね？」

まだ混乱している私。

「は～い！　デカちゃん、わかったです～」

勢いよくデカルトちゃんが手を挙げた。え？　解らないの、私だけ？

「ルブラン君が生きてると思ってたら～
Pちゃんがタイムマシンを起動する事に～　反するです～」

な・・・　何が？　何が反するの？

「2日前～　ルブラン君が生きていると、Pちゃんがわかったら～
その後、起動するはずのタイムマシンは～

Pちゃん的に動かす必要がなくなるです～！」

「その通りだ」

「そうそう！　つまり僕達があの時・・・」

「え？　え？　ちょっと・・・？」

・・・　・・・。

3人の説明を受けてようやく少し理解した私。つまりこういう事だ。

?ルブラン君が死んだ

?ルブラン君を助けたい私は、タイムマシンを起動させようと思った

?私はタイムマシンを起動させた（ラマヌジャンちゃんの助けもあったけどね）

これが実際にタイムマシンを動すまでの流れだ。大事なのは?が成り立たなければ、?は成り立たないって事（論理の世界では、?は?の【必要条件】って言うんだって）。

仮に?が成り立っていなくても（つまりルブラン君が生きていても）、私が彼を死んだと思い込んでいれば?が成り立ち、タイムマシンの起動に繋がるって事ね。

とにかくタイムマシンを動かすには、【ルブラン君は死んでいると、私が思っている】必要がある。ただしそれは、タイムマシンを実際起動させる事に成功した3月16日・・・　つまり、今日の数時間前までだ。

「な、なるほど・・・」

まだ完全に理解は出来てないけど・・・

「り、理事長の・・・　作戦だった?」

って事よね？

だから2日前の理事長は・・・　ルブラン君が死んだと言い放ったんだ。

「私に・・・　そう思い込ませるための嘘・・・・」

でもまぁ、実際のルブラン君は・・・　17年前に死んでいる。だから理事長は、ある意味嘘はついていない。

私はルブラン君が死んだと思って、この現在に戻ってきた。つまりタイムマシンを起動した後の世界に戻ってきたから・・・　因果律は守られている。

「って事で・・・　いいのよね？」

「Pちゃん、その通りです～」

「そうそう。ようやくピタ子もわかったか～」

「なんだかわかったような・・・　未だに解らないような・・・」

タイムトラベルがめんどくさいって事だけは、十分理解した。

「2日前、君達が未来に帰った後・・・　例の手紙があった。
あの薬もね」

待てよ。疑問が残るぞ？

「あの・・・　その薬はいったい誰が？」

「何だ、ピタ子。この流れで、わからないの～？」

「はわわ～　Ｐちゃん、わからないですか～？」

え？　またしても、わからないの私だけ？

「現代医学では調合できない薬なのよ？　オーパーツ的なね～」

「そうです～　あの薬を届けた人は～　オーパーツが好きな人です～」

「・・・　・・・」

腕組みをして、しばらく眉をひそめる私。何気に周りを見る。

「あ・・・」

鈍い私でも、今回はわかった。

「・・・　・・・」

この理事長室には、オーパーツがたくさん保管されている。

「そうか・・・」

私は理事長に視線を合わせた。視線を受けた彼は、優しく笑う。

「・・・　・・・」

未来の理事長だ・・・。

「で、でも・・・　あの薬は一時的なものなんですよね？
ソフィちゃんの心臓病は・・・

完全に治ったわけではないんですよね？」

私が心配そうに聞く。

「ふふ・・・」

理事長が笑った。

「今から・・・　未来へ治療薬を取りに行く。
君達も一緒に、未来へ行ってみないか？

ソフィを救ったお礼だ」

「そ、そうか。未来へ行けば・・・」

って、未来にもいけるんだ？

「物理的にはさ～
過去に行くより、未来に行く方が簡単なんだから」

と部長は言う。

「もちろん、デカちゃんも行くです～」

デカルトちゃんも手を挙げた。

「おぉ！　デカ子、イカせてやるよ～」

なんかいつもの雰囲気になっている。

「待って！！」

少しずつ頭の整理がついてきた私。

「理事長、未来へ行く前に・・・　もう一仕事あります！」

それを聞いて理事長は、やっぱり優しく笑った。

「あぁ、もちろん」

（第３８話へ続く）

第３７話　因果律トリック　（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

私達は・・・　まだやり残した事がある。

それをやらなければ、またルブ・・・　ソフィちゃんは危険になるかもしれない。

そう・・・

次回　「　第３８話　女神のような笑顔　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第３８話　女神のような笑顔（前書き）

～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人で力を合わせ、ルブラン君を交通事故から救ったにも関わらず・・・　彼は心臓の病（やまい）で亡くなってしまった。

落胆して現在に戻ってきた私達。ところが死んだはずのルブラン君が、生きていた！？

いや・・・　生きていたのは、ルブラン君と双子のソフィちゃんだった！

～～～

第38話　女神のような笑顔

第３８話　女神のような笑顔

「確かにね～
ＬＨＣで、光より速いニュートリノが観測されたのは知ってたけど～

まさか、親友のアインシュタインちゃんの相対性理論が覆されるとはね～」

タイムマシンの前で、部長達がおしゃべりしている。

「天動説が地動説に変わった時と同じぐらい・・・　いや、それ以上・・・
大きな波が押し寄せるだろう。

科学だけじゃない。数学、物理、哲学、宗教・・・
まさに全てにおいて」

理事長もおしゃべりに加わっている。

「デカちゃん的には～　光より速い物質があるのが～
なんでタイムマシンに繋がるのか～

全然わかんないです～」

「それはね、デカ子・・・」

タイムマシントークをする３人から・・・　少し離れた理事長のデ

スクに、私は座っていた。

【ｆｒｏｍ　α】と【ｆｒｏｍ　γ】　の手紙を書いている。最後の仕事のためにね。

手紙の表には、2通とも【ピタゴラスに告ぐ】と書いた。

【ｆｒｏｍ　α】の中には【3人で理事長室へ】と書かれた便せんを、【ｆｒｏｍ　γ】の中には【１７２９】と書かれた便せんを入れる。

「よし・・・　出来た・・・」

手紙をリュックに入れ、3人の元へ向かう私。

前回は3人でのタイムトラベルだったけど、今度は理事長も含め４人でタイムマシンに乗り込んだ。

そして・・・

過去へタイムスリップする。今回はルブラン君が死んだ2日前ではなく、その翌日。つまり現在からしたら1日前だ。

「昨日の私は、会議で3時半頃戻ってくる。だから・・・」

理事長のアドバイスに従い、私達は1日前の午後3時１４分へタイムスリップした。

1日前の理事長室の奥へ・・・　タイムマシンでやってきた私達。

「・・・　いないわね・・・」

過去の理事長が中にいない事を確認し、全員外に出る。

「・・・　本当に・・・　1日前なのか?」

タイムトラベル初体験の理事長を・・・

「そうですよ、理事長。ほら、扉のカギが閉まってます。
つまり1日前の理事長は・・・」

部長とデカルトちゃんに預け・・・

まず私は、【ｆｒｏｍ　γ】を過去の理事長のデスクへ置く。この時の理事長は、すでに事情を知っているから・・・　普通は意味不明と思う【ピタゴラスに告ぐ】も、通じるハズだ。

後はこの【ｆｒｏｍ　α】をソーカルちゃんに渡せばいいんだけど・・・

「ソーカルちゃん、物理倶楽部かしら?」

数学倶楽部の隣だから、結構危険な場所だ。

「この時間の私は、数学倶楽部にいるハズだから・・・」

部長達を相手に、自分を責め立てている頃。

「過去の自分と遭遇しない・・・」

これだけは注意しないとね。私は変装用のコートと帽子をかぶり、理事長室のドアノブに手をかける。

「・・・　大丈夫。絶対うまくいく・・・」

過去の住人との接触も最小限にしないといけない。

「・・・　・・・」

ドアノブに手をかけたまま考える。

交通事故で死んだルブラン君・・・　ソフィちゃんは、タイムスリップのおかげで死ぬ事はなかった。

つまり過去を変えることが出来たワケだ。でも今から私が失敗したら・・・

現在に戻った時、またソフィちゃんが死んでる世界になってる可能性もあるのよね。

「ミスは許されない・・・」

考えれば考えるほど、緊張が増してくる。

「スー・・・　ハー・・・」

深呼吸した私。だって今はちょうど学校が終わった時間。生徒だらけの学園内を、今から行かなければいけないんだし・・・　緊張するのも当たり前。

「よ、よし・・・」

ヘタに緊張して動いたら、余計に怪しまれる。ここはナチュラルに・・・　堂々と・・・

ガチャリ。

ロックを解除した私は・・・　扉を開け、勢いよく廊下へ出・・・

「あ・・・」

出た瞬間、出会い頭に誰かとぶつかる。

あれれ？　このシチュエーションって・・・？

その場で倒れてしまった私。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を向くと、

「やっぱり・・・」

色々な数式や化学記号がプリントされている洋服が目に入ってきた。

「ソーカルちゃん！」

思わず声をあげた私。

「・・・　・・・・」

尻餅をついた彼女も、私と目線を合わせる。

何度か同じ状況があったけど、違うと言えば・・・　目の前のソーカルちゃんとは、時空を超えて対面してるって事。

「人は・・・　紫外線を感じ取る器官がないけど、ナノトランジスタによる塗料電解質・・・」

き、きた!!　例の意味不明な早口言葉!　反射的に私は言い返した。

「い、今・・・　ＬＨＣで光より速いニュートリノが観測されたって!!」

「・・・　え?」

く、くいついた!?　よ、よし!

とにかく彼女の口を止めないと、手紙を渡せない。過去の私は、彼女に押されっぱなしだったからね。

「えっと・・・　あ、アインシュタインちゃんの相対性理論が覆されるのよ!
　そ、それがどれだけ・・・　すごい事かわかる!?」

私はよくわからない。相対性理論って何?

「な・・・」

あのマシンガントークのソーカルちゃんが呆然としている。

「天動説が地動説に変わった時ぐらい・・・
哲学にも大きな波が押し寄せる・・・　のじゃないかしら!?」

部長達のおしゃべりを、あまり理解せずに言っている私。

「・・・　・・・」

よ、よし。完全に黙った。今よ!

「コレ!　数学倶楽部にいるわた・・・」

おっと。【私】はマズイ!

「わた・・・　して!　ピタゴラスちゃんに渡して!!」

そう言うと私は、理事長室へ入っ・・・

「待って!!」

え?　ソーカルちゃんが声をかけてきた。

「な、何・・・?」

あまり関わりたくないんだけど。

「ど、どうやったら・・・　タイムマシンは作れるの?」

いや、もうあるんだけどさ。

「わ、わからない・・・」

ドアノブに手をかけたまま、お茶を濁す私。

「仮に出来たとして・・・　どうやって動かすの!?　材質は!?
ヒッグス粒子!?　別の超高速素粒子?

グラヴィトンは存在したの!?」

な、何言ってるの?

「さ、さぁ・・・　数式で動くんじゃない?
あと1つ解ければだけど・・・」

思わず言っちゃう私。

「だ・・・」

バタン!!

何か言いかけたソーカルちゃんを無視して、扉が閉まった。扉を閉めたのは・・・

「ピタ子・・・　あの子と、まともに会話しちゃダメだって」

ガチャリ。

中からカギをかけている部長だ。

「そ・・・　ご、ごめん」

そうだ。過去の住人との接触は最小限にだった。

「さ・・・　まだやらなきゃ行けない事、あるんでしょ？」

「う、うん」

「さっさと片付けて・・・　未来へ行こ」

笑顔で言ってくれた部長。

「うん！」

頷(うなず)いた私は、デカルトちゃんと理事長の側にあるタイムマシンへ向かった。

・・・　・・・。

１０分後の理事長室。

「来たか・・・」

理事長はデスクのそれを受け取る。

【ピタゴラスに告ぐ】

「・・・　・・・」

しばらくして、校内放送をアナウンスした。

「【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へお越し下さい。繰り返します。【古代組】のピタゴラス君。至急、理事長室へ・・・」

・・・　・・・。

今度は2度目となる、2日前にタイムスリップした私達。

2日前の朝・・・

学園の外にいた私は、登校中のラマヌジャンちゃんを捕まえる。

「あら・・・　あなたは？」

綺麗な黒髪、神秘的な黒目。思わずうっとりしてしまう美貌の彼女。

「わ、私・・・　ピタゴラスって言うの。初めまして・・・」

「・・・　・・・」

あからさまに不審な顔を浮かべるラマヌジャンちゃん。

「あ・・・　ナマギーリ女神の導きで・・・　ここへ来たの」

私がそう言うと、彼女の表情は一転。ニッコリ微笑んだ。

「初めまして。私、ラマヌジャン。ご用件は？」

「へ、変な話だけど・・・　その・・・」

何て言えばいいんだろう？　言葉に詰まる。

「大丈夫。ナマギーリ女神のお導きなんでしょ？　言ってみて」

「う、うん。今日と明日、あなたは別の私と会うの・・・
へ、変でしょ？」

「・・・　続けて」

「わ、私を助けて欲しいの！　あなたの力が必要なの！
とっても、とっても・・・　必要なの！！」

涙目でうったえる私。

「あなたの助けがなければ・・・　先に進めないの！　お願い！！」

私は深々と頭を下げた。

「・・・　・・・　わかった」

普通は【わからない】という所だが、さすがラマヌジャンちゃん！

「あなたを助ければいいのね。それがナマギーリ女神のお導きなら・
・・

そうさせて頂きます。具体的に、どうすればいいのかしら？」

「う、うん。今から2時間後ぐらい・・・
だから9時半頃ね。屋上に行って欲しい。

そしたら別の私がいるから・・・
あ、後はあなたに・・・　任せる・・・」

「9時半に屋上ね。別のあなたに会って、その子を助ける・・・
わかった。他にはまだ何かある？」

「う、ううん。とりあえず今は・・・」

「やれるだけの事はやってみる。それじゃ・・・」

笑顔を私に振りまいた彼女は、背を向けた。

「ま、待って！！」

「・・・　何か思い出した？」

再びこちらを向いたラマヌジャンちゃん。

「う、うん。迷惑なのはわかるけど、あと1つだけお願いが・・・」

「どうぞ」

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

そう。今回の件で、私は自分がいかに未熟者かを痛感した。

部長のように的確な判断力もなければ、リーダーシップもない。部長の豊富な知識は、ホント尊敬に値する。

最初のタイムトラベルで、部長がいなかったら・・・　絶対ルブラン君、すなわちソフィちゃんを助けられなかったと思う。

天然に見えるデカルトちゃんも、実は要所要所を締めている。何よりも鋭い洞察力を披露した。

手紙の主を真っ先に私だと言ったのは彼女。ソフィちゃんが学校休んでいた事を黙っていたのは、結果的に大正解。だって学校にいると思って、私達が動いてたら・・・　彼女は自宅前で交通事故に遭っている。

今回のタイムトラベル。2人とも必要不可欠な存在だった。

自分はといえば・・・

確かにタイムマシンを動かしたけど、それはラマヌジャンのおかげだし。

過去に戻っても、部長の言う通り動いただけ。

私の【ルブラン君が好き】というレベルも、サンジェルマン理事長の前では恥ずかしいぐらい。親としての愛の深さを思い知らされたな～。

自分はもっと成長したい！　哲学者として・・・　人として・・・

だから、簡単に答が与えられるのは嫌だ！　あまのじゃくだけど・・
・　それが私の本心。困難を乗り越えてこそ、成長がある！

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

「えぇ・・・　わかった」

再びステキな笑顔を見せた彼女は・・・

綺麗な黒髪をなびかせ、その場を立ち去って行った。

「・・・　・・・」

彼女の後ろ姿を見て・・・　私はあの言葉を思い出す。

「あなたは・・・
【ナマギーリ女神】のおかげで、未来を歩む事になる・・・」

何もかも見透かしたようなセリフだ。

・・・　・・・。

昼2時過ぎ。

私達は、学園内の駐車場。サンジェルマン理事長の車の中から・・・

屋上で繰り広げられている哲学バトルを見ていた。

「お、終わった。ちょっと行ってくる！！」

そう言うと私は、学園の外で待機した。

１０分後。

学園を出てきたラマヌジャンちゃんを捕まえる。

「・・・　・・・・」

彼女は私を見つめると

「ホントに・・・　別のあなたなのね」

表情を変えずに、そう言った。

「ありがと・・・」

私は頭を下げ、心から感謝の気持ちを伝える。

「あれで・・・　よかった？」

優しい笑顔のラマヌジャンちゃん。

「うん。完璧！　ホントに・・・　ありがとう」

私はラマヌジャンちゃんの手を握り・・・

「ホントにごめんなんだけど・・・　もう1つお願いが」

「わかってる。私の力で、何かをいい方向へ変えられるなら・・・
それもナマギーリ女神のお導き。

最後まで付き合うわ。今度はなぁに？」

何て優しい子なんだろう！

「う、うん。病院に行った後でいいからさ・・・」

「ふふ。あれは嘘よ。またすぐ学校に戻るから」

「え？　そ、そうなの！？」

先を読む力に優れているのか、リアルに未来が見えているのか・・・

彼女は本当に神の子なんじゃないかと思わされる。

「で？　お次は？」

「う、うん・・・　数学倶楽部にいる私達を・・・」

その後ラマヌジャンちゃんは、数学倶楽部で論理の話に加わる。その結果私は、哲学バトルでラマヌジャンちゃんに勝つための知識を得る事に。

そして翌日には・・・

あの【x】を求めるための大ヒントを、過去の私に与えてくれる。

「・・・　・・・・」

彼女もまた・・・　ソフィちゃんを救うのに、絶対必要な人物だ。

「・・・　・・・・」

再び学園に戻る彼女を見る私。

「まさか・・・」

彼女の美しくなびく黒髪を見て、ある思いがよぎった。

「ひょっとして・・・」

ナマギーリ女神ってのは・・・

（最終話へ続く）

第３８話　女神のような笑顔（後書き）

～～～

次回予告

ソフィちゃんを救うため、必要な事は全てやった。

そして私達は・・・　未来へ向かう！！

次回「最終話　大団円！？」

～～～

最終話　大団円！？（前書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、誰かが書いたラブレターを発見。私がそれを盗んだせいで、ルブラン君は交通事故に遭って死んでしまう。

理事長室に呼ばれた私は、衝撃の事実を２つ知る。１つ、ルブラン君がサンジェルマン理事長の子供だった事。１つ、目の前にタイムマシンがあるって事！

数学倶楽部に所属する私、部長、デカルトちゃんの３名は・・・ルブラン君が死んだ日にタイムスリップ。

３人で力を合わせ、ルブラン君を交通事故から救ったにも関わらず・・・彼は心臓の病(やまい)で亡くなってしまった。

落胆して現在に戻ってきた私達。ところが死んだはずのルブラン君が、生きていた！？

いや・・・生きていたのは、ルブラン君と双子のソフィちゃんだった！

私達は確実にソフィちゃんを救うため、再びタイムスリップ。やり残した事を全てやり通した。

最終話　大団円！？

最終話　大団円！？

「到着～　久々に言うよ～　ラッセル、ラッセル～♪」

今回の件を完全に片付け、現在へ戻ってきた私達。

「戻ってきたです～」

「しかし・・・　中は狭いんだな」

長身の理事長は、身をかがめてタイムマシンの外へ出る。

「これで・・・　やり残した事はないわね」

最後に私が出てきた。

「やり残した事、ないね～
ちゃ～んと生乳（なまちち）、揉んできたし～　ラッセル　ラッセル～♪」

エロオヤジ・・・

「ラッセル君のおかげで、操作の仕方は理解出来たよ。
ありがとう」

「いえいえ。僕なんかでよければ、いつでも～　ラッセル、ラッセル～♪」

「ただ時間軸が移動できるのであれば・・・
空間内も移動できるハズだと思うんだがな」

「ですね～。僕的にもそう思います。
多分、あのディスプレイに球面座標系・・・
つまり、緯度経度あたりを打ち込めば・・・
いけそうな気はします！」

「ふむ。もう少し、色々試してみた方がよさそうだな」

部長と理事長は、何やら難しい話をしている。

「でも・・・　ホントに時空を超えたんですね！
マジ興奮！　ラッセル、ラッセル～♪」

久々にテンションの高い部長は、例の口癖を連呼していた。

「ソファに座り給え。ホットコーヒーを出そう。
それとも、ホットティーがいいかい？」

「僕はコーヒー！　お願いします！」

部長が真っ先にオーダーし・・・

「デカちゃん、ホットティーがいいです～　お願いしますです～」

「私は・・・　コーヒーでお願いします」

私とデカルトちゃんが続く。

「いや～　すごかったね～」

ソファに座った私達。理事長がいるにも関わらず、女子会のごとく興奮気味にペチャクチャ喋り始めた。

「でもさ。僕、すごくね？　未来でノーベル賞とってたんだよ！」

そう。私達は未来へも行ってきた。ソフィちゃんの心臓病を治す薬を取ってくるために。あと、少しばかり・・・　色々なものを見てきたのよね。

「しかも物理学賞とかじゃなくって、文学賞よ！
マジ、ラッセルだよね！」

意味わかんないけど・・・

「部長が文学賞なんて・・・
センスのかけらもないと思ってたのに・・・」

「それに～　ラッセルちゃんは～
すっごい平和のために～　活動してたです～」

【ラッセル＝アインシュタイン宣言】。あのアインシュタインちゃん達も含め、未来世界の一流科学者達が科学技術の平和利用をうったえる、とても素晴らしい宣言だ。

何とこの素晴らしい歴史的宣言・・・　その名にある通り、未来の部長が中心となってなされていたから超びっくり。しかも共同宣言者１１人のうち１０人はノーベル賞受賞者というのだから、さすがの理事長も驚いていた。

「しかし・・・　部長さ。４回も結婚しなくても・・・」

「それは僕が、モテモテだからさ～
まぁ歴史は変えられるんだから。

今いる僕の未来では、結婚４回とかナッセルで～・・・」

「そうよね。変えられるんだから、今度はキチンと・・・」

「今度は5、６回は結婚しちゃおうかな～　ラッセル　ラッセル～♪」

「・・・　・・・」

部長は部長だ。

「でも、Ｐちゃんも～　出身のサモス島では～
すっごいリスペクトされてたです～」

理事長が静かにコーヒーやティーを差し出してくれた。それを飲みながら、女子会は続く。

「あれはノーベル賞の僕も驚いたね。島民の３分の１が・・・
名前【ピタゴラス】って、凄過ぎ！

世界中探しても、あんな島ないっしょ！」

未来の私は、何かすっごい島の人から尊敬されているらしく・・・
島中色んなところで、【ピタゴラス】を目撃する。人名だけでなく、建物とか町の名前とかにも使われていた。ピタゴラスホテルと

かあったし、ピタゴリオンという町も私の名前が由来なんだって。

「【ピタゴラスの定理】は、証明の多さ世界一！　ギネスブックか～
僕は結婚の多さでギネス狙おうかな～」

「・・・　・・・」

「未来のソフィちゃんも～
フェルマーちゃんの最終定理に挑んでました～　すごいです～」

私達がルブラン君だと思っていた・・・　理事長の娘、ソフィ・ジェルマン。

彼女もまた、未来ではすごい数学者として名を残すことになる。あの【フェルマーの最終定理】の証明に画期的進展（ブレイクスルー）をもたらしていたのだ。

それよりも・・・

ソフィちゃんは、未来の世界で数学者として立派に活躍している。
それは心から喜ばしい事だ。

放っていたら・・・　交通事故で死んでいたはずなのよね、ソフィちゃんは。

私達の苦労が無駄にならなかったどころか、数学史上に残る大問題を解決させるかもしれないのだから・・・

「そういう意味じゃ～　僕達。歴史も動かしたって事だよね～」

「はわわ～　何かデカちゃん達、カッコイイです～」

「た、確かに・・・　そういう事に・・・」

なるのか？

「ソフィちゃんは～　数学者として、ホントにすごいです～
みんな凄いのに～　デカちゃんは～

な～んか、未来ではイマイチでした～」

「そんな事ないわよ。デカルトちゃんだって、すごかったじゃない～」

「はわわ～　でも～　未来の哲学者は～　デカちゃんの哲学に～
批判的だったです～　デカちゃん、悲しいです～」

「いやいや。デカ子の哲学は間違いなく、哲学史に大きな影響を与えてるよ」

「ホントですか～？」

「私もそう思う。
それに哲学だけじゃなく、数学にも大きな貢献してたじゃない。

幅広い分野でさ。ホントにデカルトちゃん、多才よね」

「はわわ～　デカちゃん、褒められると伸びる子です～」

「でもさ・・・　僕達が見てきたあの未来が・・・

そのまま実現するとは限らない・・・
かもしれないのよね・・・」

「・・・　うん」

「はいです～」

そう。私達は【ソフィちゃんが死ぬ】という過去を変えてここにいる。

それならば、今見てきた未来も・・・　変わる可能性は十分ある。

「結構・・・　いい人生だったんだけどね～　みんなさ」

「そうね・・・」

「です～」

「・・・・　・・・・」

しばらくの沈黙の後、私が口を開いた。

「不思議ね・・・　５０時間ぐらいは動いたはずなのに、全然眠くない。
　疲れもないわ」

過去に行ったり、未来に行ったり。少なくとも５０時間はずっと動き続けた私達。

「デカちゃんもです～　全然まだ元気です～
しかも～　全然ご飯も食べてないのに～
そんなにお腹、空いてないです～」
部長はチラリと時計を確認した。
「まぁ、こちらの世界では・・・
タイムマシンに乗って、４時間ぐらいしか経ってないからね」
「　？　」
「僕、１つ仮説を立てたんだ。タイムトラベルに関する・・・」
「はわわ～　どんな仮説ですか～？」
「うん。多分タイムトラベルしてる間は、僕達の時間は全く動いていない。
そうね、仮にコレを【時間ゼロ】の仮説と呼んでみるかな。
時間は伸び縮みするもんだけど・・・
タイムトラベル中は、完全にゼロになってるんじゃないかな～」
「え？　時間がゼロなのに・・・
でも、私達は何１０時間も動いてたわよ？」
「デカちゃん的にも～　そうは思えないです～」
「その仮説が正しければさ・・・
僕達が５０時間も不眠不休で、平気である事の説明がつく。

いや、それよりも・・・　もっとすごい事がある！
わかる？」

「わかんない」

「はわわ？」

「タイムマシンに乗り続ければ・・・
不老不死！　だって時間が止まったままなんだからね！

つまり永久に年を取らない！　さらに食事の必要もない！」

そう言えば、この５０時間。私達は一切の食事を取ってない。それでも空腹かと言われると・・・　そうでもない。

「え！？　タイムマシンに乗り続ければ・・・
永遠の時を過ごせるっての？　しかも食事取らずに？」

「ありえないです～　でも確かに～
デカちゃん達～　２日近く何にも食べてないのに～

全然平気です～」

確かに部長の言う通りなら・・・
私達がそんなに疲れてない事や、食事を取らなくても平気な事も説明がつく。

「多分、ＤＮＡとかテロメアとか調べればハッキリすると思うんだ。

よし！　これからの僕の研究対象の1つにしようっと！

絶対僕の仮説、正しいと思うんだ～」

「部長なら・・・
タイムトラベルに関する研究、いい形でやっていけるわよ」

「もちろん～　それともう1つ！！
2人共、すっごい大事な事忘れてるよ～」

「え？　他にまだ、何かあった？」

「はわわ？」

「あ～　も～　2人共！！　あんた達、一応哲学者の卵でしょ！？」

「そ、そりゃまぁ・・・」

「そうですけど～」

「僕達、タイムマシンを手に入れたのよ！
それがどういう意味か、まだわかんない？」

私は首を横に振る。

「わかんない・・・」

「デカちゃんもわからないです～」

部長は右手の平をおでこにパチンと当てた。

「っか～！　まだまだ青いわね～、君達！」

仕草がいちいちオヤジくさい。いや、エロオヤジくさい。

「僕達哲学者の仕事！　その１つに【真実の探求】があるでしょ！
そんな僕達がタイムマシンと出会ったのよ？

きっと・・・　神様の贈り物よ！！」

【神様の贈り物】？　理事長も似たような事を言ってたような？

「まぁ、ホントに【神】がいるかどうかは・・・
これから調べるんだけどね」

「え？　調べる？　どうやって？」

「はわわ～　論理的にですか～？」

いつの間にか、飲み干したコーヒーやティ。理事長が新しいのを注いでくれた。

「違う、違う。実際に見に行くんだよ～
タイムマシンに乗って・・・　この世界の始まりを・・・」

「あ！！」

「はわわ～！！」

そうか！！

「タイムマシンで過去にさかのぼって・・・
この世界の起源を・・・　見に行けばいいんだ」

「ラッセル～♪」

「はわわ～　すごいです～！」

「それだけじゃない。例えば恐竜絶滅の謎や、オーパーツの謎。
文献だけではわからなかった、歴史の謎なんか・・・

タイムマシンがあれば全て解決!!
僕的には、まさに神の贈り物！　いるかわかんないけどね」

部長の言う通りだ。私達が欲してやまない【真実】。その【真実】を・・・　タイムマシンは教えてくれる。

「僕は【ビッグバン理論】や【インフレーション理論】を習ってるけどさ。
机上の空論の可能性もあるわけで・・・

やっぱり真実は見て確かめる！　僕は哲学者として・・・
あくなき真実の探求を誓っちゃう！　ラッセル～　ラッセル～♪」

「でも部長・・・　ノーベル文学賞は？」

「アインシュタインちゃんとの～　平和宣言は～
どうするんですか～？」

「きっと今が未来の分かれ道・・・　分岐点なのよ！

確かにたくさん結婚して、ノーベル賞も魅力的だけど・・・」

たくさん結婚は魅力的か？

「やっぱり真実の探求！　これが1番！
僕は・・・　あらゆる真実を探求する!!」

「う、うん。私も・・・　もっと色々な事を知りたい！」

「デカちゃんも、知りたいです～」

「く～　こんな興奮、超久しぶり～　ラッセル～！」

部長は右手を下にして、私達の前に差し出した。

「・・・　・・・」

「はわわ～」

私とデカルトちゃんも、右手を重ねる。

「Ｒｅｐｅａｔ　ａｆｔｅｒ　ｍｅ！」（僕の言葉を繰り返して！）

「ｏｕｉ　Ｍａｄｅｍｏｉｓｅｌｌｅ～」（ラッセルちゃん、わかったです～）

「え？」

な、何？　今、リピートアフターミーって言ったわよね、部長？
繰り返せって事？

「Ｌｉｋｅ　Ｔｈｅ　Ｔｒｅｅ　Ｍｕｓｋｅｔｅｅｒｓ！」（三銃士のようにね！）

「ｏｕｉ，ｏｕｉ～」（ＯＫ、ＯＫです～）

「え？　え？」

リピートアフターミーは聞き取れたけど、今のは？

英語とフランス語に挟まれた私は・・・

「Ｔｈｒｅｅ　ｆｏｒ　ｔｒｕｔｈ！」（３人は真実のために！）

「Ｔｈｒｅｅ　ｆｏｒ　ｔｒｕｔｈ～」（３人は真実のために～）

「トゥ、トゥリー　フォア　トゥルーツ？」

あ～ん。ついていけない！

「Ｔｒｕｔｈ　ｆｏｒ　ｆｕｔｕｒｅ！」（真実は未来のために！）

「Ｔｒｕｔｈ　ｆｏｒ　ｆｕｔｕｒｅ～」（真実は未来のためにです～）

「トゥルーツ　フォア　フューチャー！！」

下手な英語だけど、何とかついていく私。

「Ｗｅ　ａｒｅ　～　・・・」（我々は・・・）

部長がタメを作り、アイコンタクトをするけど・・・　な、何？

「Ｔｈｅ　Ｔｒｅｅ　Ｍｕｓｋｅｔｅｅｒｓ！」（三銃士なり！）

「Ｔｈｅ　Ｔｒｅｅ　Ｍｕｓｋｅｔｅｅｒｓ～」（三銃士なり～）

「な・・・」

部長とデカルトちゃんの手に押され、私達はの右手は上へ持ち上がり・・・　綺麗に散らばった。

「・・・　・・・」

私だけハモれなかった・・・　く、悔しい。

「わ～　超カッコイイ！　超ラッセル～！！
今の、絶対映画のワンシーンで使えるよね～」

「使えるです～　デカちゃん達、ハリウッド女優です～！」

「・・・　・・・」

何やら盛り上がる2人を見て・・・　1人悔しがる私。もっと英語、勉強しておくんだった～。

「よし！　早速倶楽部に戻って、何から始めるべきか会議・・・」

会話の途中で

「会議・・・　は、ふぁ～」

部長が大きなアクビをした。そしてそれは・・・

「ふ、ふあ～」

「はわわ～」

私とデカルトちゃんにも伝染する。

「あ、あれ・・・？　僕の仮説では・・・
時間は動いてないから・・・　眠くなるはずでは・・・」

「ちょっとだけ・・・」

「デカちゃんも・・・　少しだけ・・・」

タイムトラベルの疲れが、ここで一気に出たのだろうか？　私達３人は、同時にソファの上で寝てしまった。

「・・・　・・・」

サンジェルマン理事長は無言で私達の所へ近寄り

「すまんな・・・」

コーヒーカップやティーカップを片付ける。

「見てきたとおり・・・　君達には素晴らしい未来が待っている。
タイムマシンには関わらず、その素晴らしい未来へ向け・・・

これからも精進してくれ」

胸ポケットから小瓶を取り出し、それをじっと見る。

「未来には・・・　こういう薬もあるんだな・・・」

仮死状態にする【ＲＤＮＤ】とは違う物だ。

「今回の件の記憶・・・　すまないが消させてもらう。
それが・・・　君達のためでもあるからだ。

教育者として・・・　心から君達の成功と幸せを祈っている」

・・・　・・・。

1時間後。

私達は、数学倶楽部で目を覚ますことになる。

ここ最近の記憶を無くした状態で・・・

・・・　・・・。

1ヶ月後。数学倶楽部。

「お？　ピタ子。相変わらず、ソフィちゃんとベタベタだね～。
やけるね～　く～」

「だ、だって・・・　最近ソフィちゃんに、サッフォーちゃんがよってくるのよ！
あの子、レズビーで有名なんだから！」

「はわわ～　デカちゃん的には～　Pちゃんも変わらないです～」

「ちょっと・・・　私のは友情よ、友情！
ねぇ、ソフィちゃん？」

「う、うん・・・」

私に腕を掴まれたソフィちゃんが、ちょっと困ったように応えた。

「部長の性欲とは違うんだから～」

「お～っと、聞き捨てならないセリフ！　言っちゃったね～、ピタ子～！
人間の三大欲求・・・　快楽主義を語るかい～？」

「はわわ～　今日はソフィちゃんが～
【フェルマーの最終定理】に関する～　数学講座してくれるです～

デカちゃん、早く聞きたいです～」

「っち！　数学という邪魔が入ったな～
数学倶楽部の部長として、それは譲らねばなるまい～」

「デカちゃん、絶対あの定理を解いて～　フェルマーちゃんにリベ

ンジです～」

「リベンジ？　仲が悪いのは知ってるけど・・・フェルマーちゃんと、直接やりあったっけ？　デカ子？」

「何かデカちゃん～　フェルマーちゃんに～負けたような感じがするんです～」

「ふ～ん・・・　夢の中でやられたのかもね。おっしゃ！　じゃぁ、ソフィちゃん！

整数論の講義、お願いします～」

「う、うん・・・　じゃぁ・・・」

部室にある黒板の前に立ったソフィちゃん。３人の視線が彼女に突き刺さる。

「は、始めるね。えっと・・・」

最も熱烈な視線を突き刺しているのは・・・

もちろん私。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ピタゴラスちゃんのジレンマ

（おしまい）

長い間、ご愛読ありがとうございました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

登場人物

【ピタゴラス】
三平方の定理、すなわち【ピタゴラスの定理】で数学史に名を残す。また万物の根源を【数】とした哲学者としても有名。好き嫌いのはっきりした性格で、好きな物はとことん好きだが、嫌いな物（例えば豆や無理数）はとことん嫌い。ピタゴラス教団（本作中では、ファンクラブ）の教祖様。余談だが、無理数を語るヤツはぶっ飛ばす。

【ラッセル】
【ラッセルのパラドックス】は集合論の世界で有名。後にゲーデルの不完全性定理にもつながる。哲学者・論理学者・数学者として名を馳せるが、ノーベル文学賞を取るなど非常に多才。【ラッセル＝アインシュタイン宣言】では、第一線の科学者達と平和宣誓をするなど、その活躍も高く評価されている。余談だが、８０歳で４回目の結婚も？

【デカルト】
論理学・形而上学・数学だけでなく、魔術や秘術など、あらゆる分野の知識を有する博識者。数学で扱う直交座標を開発している。デ

カルト座標と呼ばれ、その名を数学史に刻む。【我思う、ゆえに我あり】も哲学史に残る言葉だが、後の哲学者にはがっつり否定される。余談だが、方程式等に現れる変数【x】を定着化させた人物でもある。

【カント】

本作ではチョイ役。【自由とは何か?】について哲学的に深く掘り下げた。自分の心が命じる【善い意志】のみに従い、それ以外には縛られない【意志の自由】を説いた。日常は決まった時間に、決まった場所で、決まった行動を取るなど非常に規則正しい生活をした。余談だが、カントちゃんを見て時計の狂いを直した人物もいるらしい。

【ラマヌジャン】

インドの魔術師の異名をとる天才数学者。本作中にも出た【1729】の希有(けう)な性質を発見しており、タクシー数とも呼ばれている。生涯を通して3000以上にもおよぶ公式を発見。余談だが魔術師の名にふさわしい神秘的な公式も数多く発見しており、どのような経緯でそれらの発見に繋がったかは、今なお謎のままである。

【ソーカル】

物理学を専攻し、俗に言う【ソーカル事件】を起こした人物。デタラメな数式や専門用語を羅列した論文が評価されるも、自らそれが無意味な物であると告白し、周りを混乱に陥れた。余談だが本作のソーカルちゃんのように、関連のないことを文章として会話に繋げる事は、かなりの訓練を要する。そのため、宴会ゲームで使うと盛り上がる。

【カントール】
集合論の創始者であり、この研究は数学界を大きく発展させるきっかけとなる。初期の集合論（素朴集合論）は、パラドックスが発見されており（ラッセルのパラドックスもその１つ）、周りから多くの非難を浴びることに。余談だが【数学の本質は、その自由性にある】という、哲学的な名言を遺している。

【ヒルベルト】
数学界の巨匠とも言える１人。数学の色々な分野だけでなく、相対性理論の研究にも携わる。矛盾のない完璧な公理体系で、数学の枠組みを作ろうと試みたが（ヒルベルト・プログラム）、ゲーデルの不完全性定理によりその夢は潰える事に。余談だが、不完全性定理の証明にはカントールの対角線論法のアイディアが使われている。

【タレス】
記録に残っている歴史上最初の哲学者。万物の根源を【水】と説き、後の哲学者間で【万物の根源は何か？】と大きなムーブメントを起こした。数学や天文学の研究をしており、相似の概念を用いてピラミッドの高さを測っている。余談だが、円の直径に対する円周角が９０度であるという定理は【タレスの定理】と名前がついている（ただし、名前を知らない人は多い）。

【ヘラクレイトス】
自然は常に動いているという【万物流転】を説き、万物の根源は【火】であるとした。性格的にやや難があり、人を見下す発言をかな

りしている。周りからは【闇の人】【謎かける哲学者】などと呼ばれてた。余談だが、「ピタゴラスはいかさま師だ」と口にしたとか？

【デモクリトス】
万物の根源を、それ以上分割できない原子（アトム）だとし、唯物論を説いた。哲学だけでなく数学や天文学、音楽などに精通し、その博識ぶりから【知恵（ソフィア）】とも呼ばれている。余談だが、明るく、いつも笑っている事から【笑う哲学者】とも呼ばれていた。

【プラトン】
ソクラテスを師匠とし、物質には理想的な【イデア】が存在すると説いた。師匠のソクラテスは何も書物を残してないが、プラトンは師匠について記した数々の書物を遺している。それらは、後の哲学者達に多大な影響を与えた。余談だが、プラトンは【アカデメイア】という名の学校を創設しており、これが【アカデミー】の語源となっている。

【茂木ちゃん先生】
聖フィロソフィー学園の保健室の先生という設定。本作では哲学バトルの実況という位置づけで、脳科学やクオリアについては全く触れてない。余談だが、空気の読めない自己中的発言をする事があり、周りから非難を浴びることも。

【西田幾多郎】
ラッセルちゃんの所属する【現代組】の担任。西洋哲学と東洋哲学

を独自の解釈で融合し、いわゆる【西田哲学】と呼ばれる哲学を展開。本作では哲学バトルの解説者担当。余談だが、幾多郎先生が好んで散歩した、京都市にある石畳の小道は【哲学の道】と呼ばれている（【タレスの定理】とは対照的に、こちらは結構有名）。

【ルブラン＝ソフィ・ジェルマン】

本作ではサンジェルマン理事長の娘として登場。心臓病を患ったが、タイムマシンのおかげで完治する、という設定。彼女の研究は、【フェルマーの最終定理】の証明に大きな前進を与える。性別を偽って男子しか入学できない【高等理工科学校（エコール・ポリテクニク）】に進学。余談だが、優秀すぎてラグランジュ教授に声をかけられ、性別がばれる事に。

※

ワイルズにより【フェルマーの最終定理】は証明がなされ、３００年以上にも及ぶこの定理の証明に決着がつけられている。現在その定理は【フェルマー＝ワイルズの定理】と呼ばれている。余談だが、余りにも【フェルマーの（最終）定理】が有名すぎるため、数学関係者以外【フェルマー＝ワイルズの定理】と言われたら、モヤッとする人が多い。

【サン・ジェルマン】

聖フィロソフィー学園の理事長。化学の教師でもあり、錬金術のおかげで億万長者に・・・　など、その過去は本作中でも語られているので、そちらを参照。ちなみに彼は、この後、歴史を動かす人物に？　番外編？参照。

（番外編？へ続く）

最終話　大団円！？（後書き）

〜〜

次回予告

私、ピタゴラス。え？　物語は終わったのに、何で次回予告かって？

この後、サンジェルマン理事長が・・・すっごい行動を取るのよ？

知りたくな〜い？　え？　知りたくないヤツは、川のほとりにぶっ飛ばしちゃうわよ〜。

次回「番外編？　サンジェルマン伯爵」

〜〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1365z/

ピタゴラスちゃんのジレンマ

2011年12月27日00時49分発行